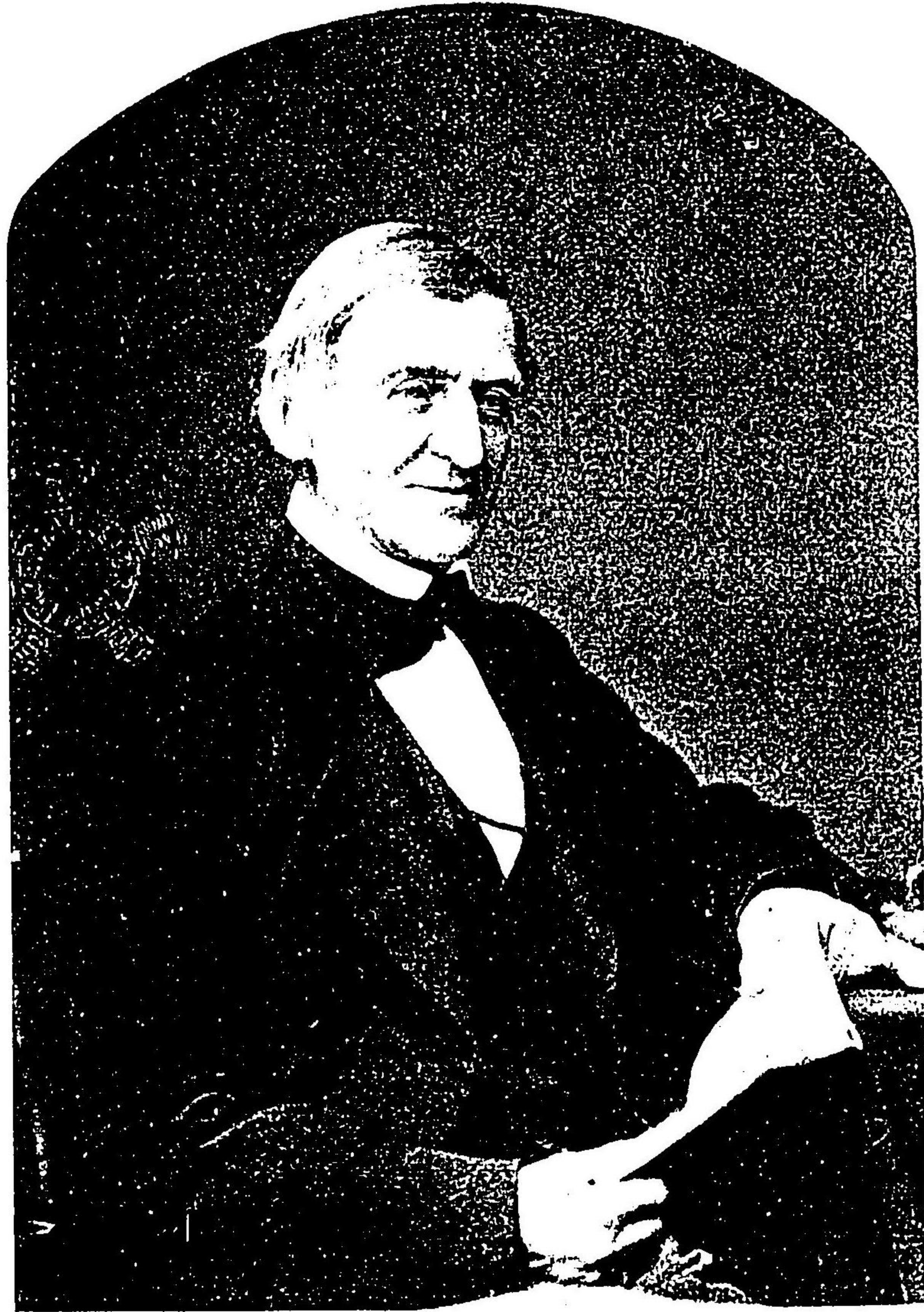


ラルフ・ウオルド・エマースン著
文學士水島耕一郎譯

大英國國民

明治
45. 7. 23
内交

東京 博文館藏版

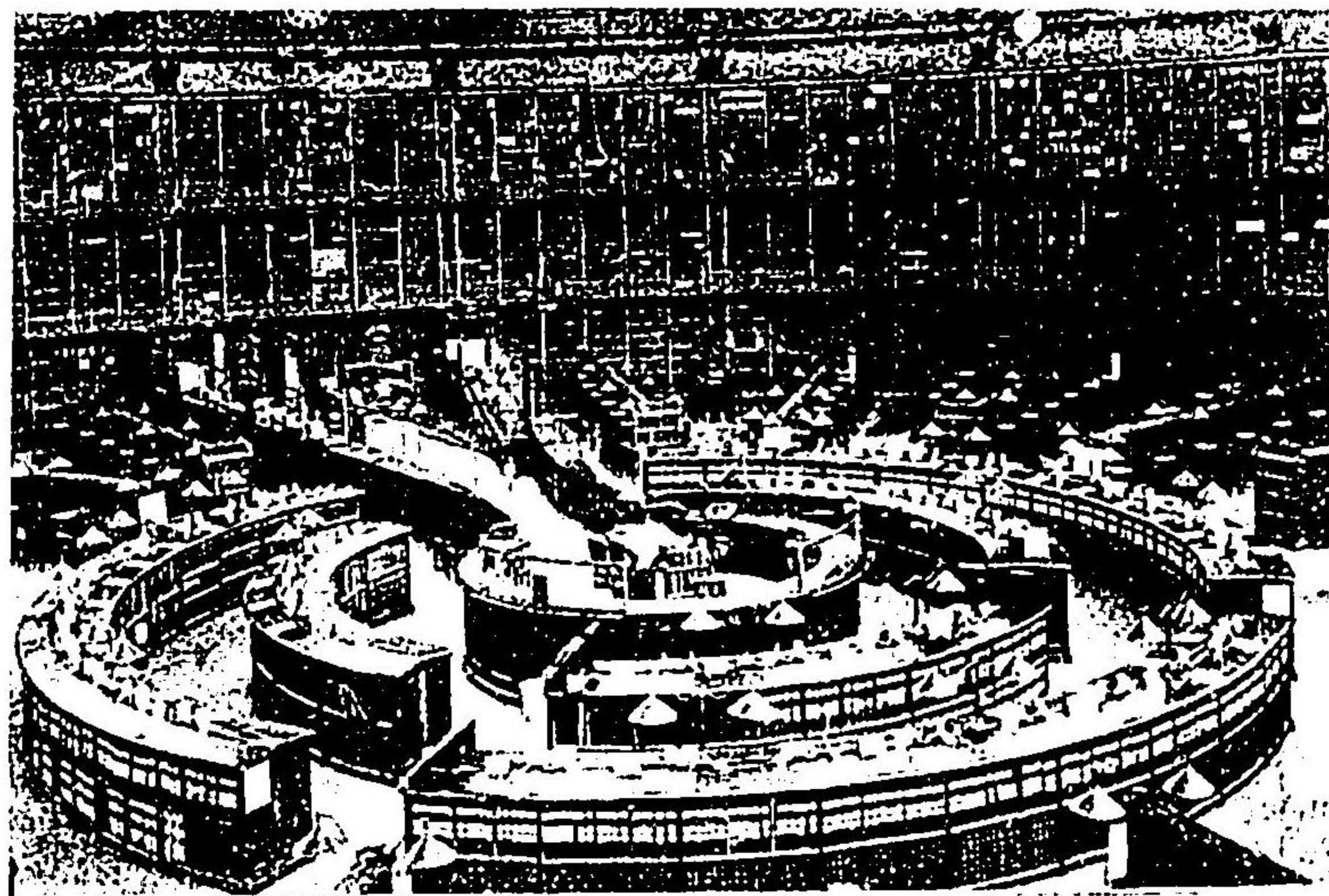


像 肖 ン ス ー マ エ

余の昔懐かしい



(宮教位三聖の郷故翁沙)ンヅア、ンポア、ドーフトラトス



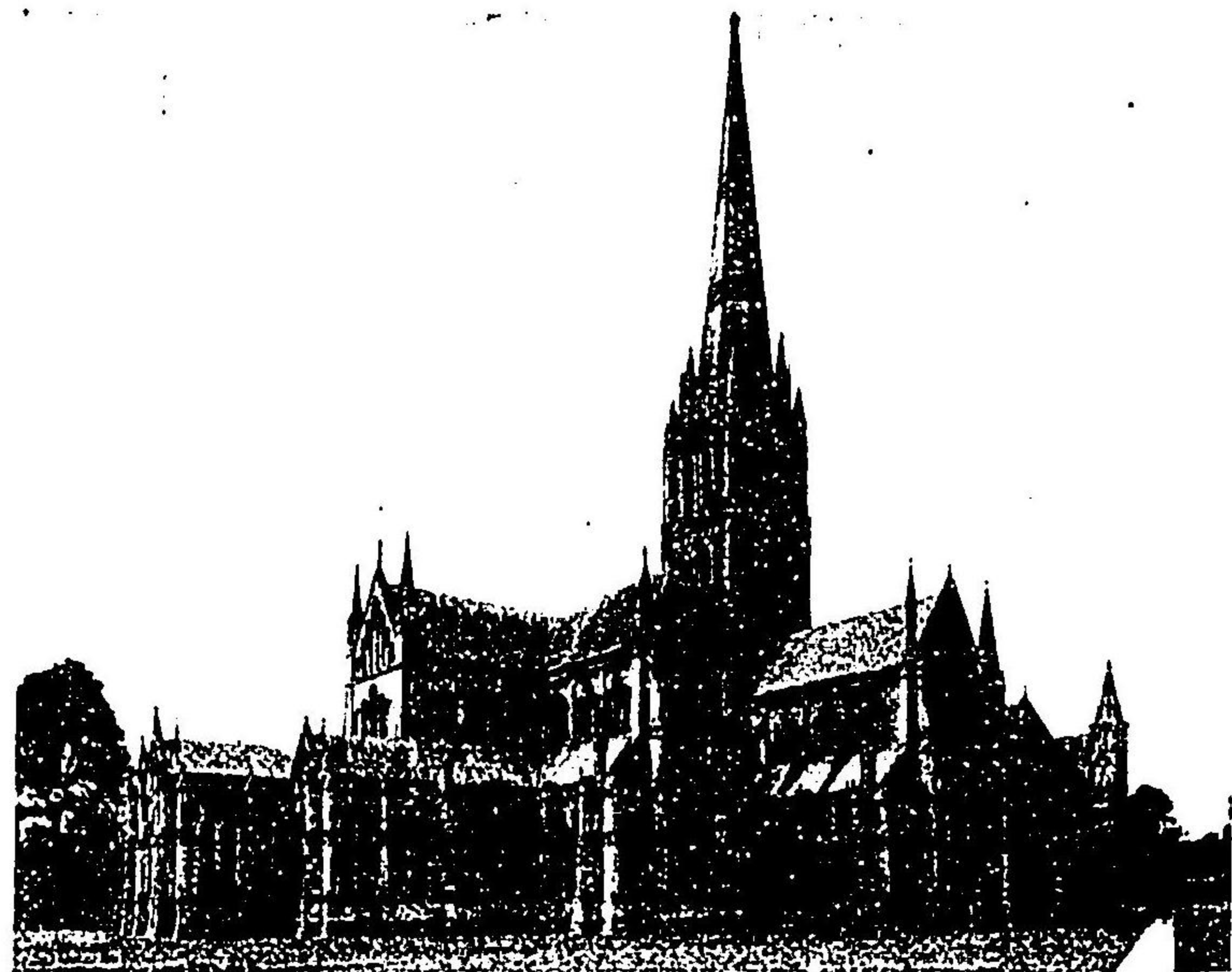
室覽閣書圖の館物博英大



山本大のイリエ



ジンヘントス



山本大のイリベスリサ



園物植立王一ユキ



ラ イ ダ (ル ッ ヅ ツ ト 居 の 地)



ウ ェ ッ ト ミ ス タ ー の 御 堂

332-3/6

ゼームス・マードック先生に奉る書

マードック先生

このやうな翻譯を先生に献じますのは誠に畏多い事と存じます。否假令ごのやうな著述を献ずる事が出来ましても——それは私には出来ない事でありませうとも——献本といふ事が元來先生の御満足を望み得る所以でないことは充分に承知して居ります。けれども私がこの翻譯を思ひ立ちましたのは全く先生の故郷なる英國及び英國民族の真相を一層能く理解し、その世界文明の爲めに有する本領を少しでも明に識りたいと考へたからでありまして、而してこの様な志を抱くに至りましたのは全く先生の惠深き感化に本づくのであります。かゝる次第でありますか

(1)

献本詞

(2)

ら、私は先生を外にしては動機を考へることの出来ない此仕事の結果を先生に向つて捧げずに居られないのであります。

英國民族を理解するには進んで自らその本國を訪問するに越した事はありません。けれどもそれは今の私には及びない望みでありますのみならず、よし出来たとしてもまだ生活其のものに就いて根本的解釋をもたない私が今卒然として英國の生活といふ特殊の生活を見て果してどれ程の智識を得ることが出来るかは疑問であります。それ故私は英國に遊んだ他の聰明なる人々の觀察を讀みまして、これから能ふ限り多くの利益と教訓とを得るに満足して居ります。而してこの書は私がかゝる意味に於て最も信賴するところのもの、一であります。

併しながら先生が原著者に就いてどのやうな御意見をもつて被入ら

る、かは私の思料以上であります。従つて私は果して先生がこの書を以て眞に能く英人を説明したものと御認めになることは豫期する事が出来ません。けれども私に於きましてはこの書の翻譯を始めましてから、語學の力の不充分なものにも拘らず、その洗鍊せられた意味深い表現を通して次第に明に英國民族の輪廓を眺め得るやうに覺えましたと同時に、年來私の頭腦の中に瀰漫して居ります懐しい先生の記憶——影響が平生よりも一倍力強く意識に上りまして、言ふべからざる幸福を感じました。實に私は過ぐる三月の間再び近く先生の邊に侍する事を得たのであります。

(3)

かく申しましても、私は先生を單なる代表的英人と考へては居りません。先生は私に取つては更に高く更に大であります、——この書に現れた

(4)

まゝの國民的英人を背景としましてさへ。先生にして若し一般英人の典型たるに止まらば、恐らくは今まで長く鹿兒島の山中には御留まりにならなかつたでありませう。これに反して先生は直に人道其のもの、恩師であります。日本海々戦の捷報の來ました日、先生が祝賀會の演壇の上から熱烈燦くが如き雄辯を振つて盛に日本の勝利を讃嘆せられ、且つ直に之を以てトラファガーの海戦と比較せられました時、私達は湧き上る歡びの感情の底にも一種深刻なる國民的自覺を喚び醒されました。先生は日本の鹿兒島は英國の蘇克蘭であること初めからこの地を殊の外御好きになりました。終に市外れの山中に自ら家を建て、それに御住ひになりました。而して餘念なく東西文明の接觸の跡を御調べになつて居ります。この間絶えず私に與へられました無言の感化といふものは到底筆

舌の現し得る所ではありません。私は實に先生の御住居に近きます毎に宛ら世界人類の胸臆を通じて流るゝ強大なる潜流の響を聞いたのであります。私はかくして以前の無意義無價値なる自分から國民として並に人類として一步を確信ある人間へと進めることが出來ました。是れ全く先生の賜であります。最後に私が鹿兒島を去るに就いて御暇乞に参りました時、先生は私の願によつて私の缺點を誡むる格言を書いて與へられました。それは唯一語でありました。けれども私はこの一語の中に三年間の先生の教訓の千萬無量の意味の籠つて居ることを感じました。

(5)

私はこの千萬無量の意味を及ぶ限り明白に實現しやうと力めることに、私の微小なる併しながら眞なる生活があること信じて居ります。

上京の當日、私は先生の命に従つて萬朝報社に五十雄山縣老兄を訪

(6)

問しました。私がまだ初対面の挨拶を終らない前に、老兄の突如として曰はるゝは「先生は實に神様のやうな人であります」と。言下に私は先生の感化が既に一種の宗教である事を悟りました。而して今迄先生に狎れ親むの結果、多く肉體的の先生を見て靈的の先生を理解する事の此先輩に比して迥に劣つてゐるのを愧ぢ且つ慨いたのであります。以來私が此先輩から多大の助力と同情を得ました次第は改めて申上げるまでもありません。就中私は此先輩を通じて一層先生の「靈的存在」に親炙する事を得ました。是れ實に先生に對しての二重三重の負荷であります。今や此愛する先輩は日本の新なる領土朝鮮に在つて大なる使命の爲めに働いて居られます。先生より老兄より山河幾百里を隔つる私は多少の淋しさを感ぜずに居られません。けれどもインテリは以て精神的距離を測

るに足りません。私は常に先生の偉大なる軌道の中に在る事を楽しんで居ります。

終に臨んで、この書を先生に献じましたのは決して先生の大なる御名を私の微々たる仕事に結び付けやうといふ野心の爲めではありません。唯々かくして先生の感化を愈々新にしたいこの止み難き衷情からであります。先生冀くはこれを諒ごせられん事を。

明治四十五年六月十九日

東京に於て 水島耕一郎謹識

(7)

緒言

一本書は米人 R. W. Emerson の著 "English Traits" を譯したるものなり。

一エマーソンの本書を著せしは一八五六年にして、こは本文第一章及び第二章の冒頭にある如く一八三三年と一八四七年の二回英國に遊びて親しく觀察して得たる結果なり。英國は以來諸方面に多大の發達をなしたるが故に本書に記す所就中第十章富に於ける數字の如きは今日の情態と甚だ相同じからず。是れ豫め讀者に向つて注意を請ひ置かざるべからざる點なり。されどエマーソンの見たる所は物質的方面よりも精神的方面、一時的事實よりも永續的事實なるを以て、かかる統計上のアクト・オブ・デット 違 期の如きは多く意とするに足らず。却つて英國國民性を研究せんと欲するものに取りては、本書の價值はワシントン・アーヴィングの『スケッチブック』又はホーゾルの『アワ・オールド・ホーム』と共に永久なるべ

(1)

(2)

し。アンドルー・ジョージ氏も一八九九年を以て『此書に含める大なる真理は、多く當時に於て誤解せられ、今日漸く明白となりつつあり。而してこれを昨年中の出来事に照らすに、實に瞭々として神託の如くに光耀を放つ』と言ひき。

一原書の題目は即ち「英人氣質」なり、初めかく記し置きしが他にこれと似たる題目の著述あることを注意せられたため、漸く「大英國民」と改めたるに、印刷半になりて又々文明協會の翻譯中に同名のものあるを發見したり。されどそは現代佛人の著にして本書とは全く異なり。一言これを辯ずる事爾り。

一原著者の肖像以下寫眞は昨年英國より歸朝せられし内ヶ崎作三郎氏の好意によりて其弄藏を複製せるもの、謹んで之を謝す。

目 録

(1)

第一章	初回の英國訪問	一
第二章	英國への渡航	三〇
第三章	國 土	四二
第四章	人 種	五五
第五章	能 力	九四
第六章	品 行	一三二
第七章	眞 理	一四九
第八章	性 格	一六三
第九章	倫敦兒	一八四

(2)

第十章	富	一九五
第十一章	貴族	二一八
第十二章	大學	二五二
第十三章	宗教	二六八
第十四章	文學	二九〇
第十五章	「タイムス」新聞	三二七
第十六章	「ストーンヘンジ」	三四二
第十七章	交游	三六四
第十八章	結論	三七四
第十九章	マンチエスターに於ける演説	三八六

大英國民

ラルフ・ウォルド・エマースーン著

文學士 水 島 耕 一 郎 譯

第一章 初回の英國訪問

余は、英國に赴く事、前後二回、一八三三年には、シシリイ、伊太利、及び佛國に遊びたる歸途、ブローロンより海を渡りて、倫敦のタワー・ステアースに上

(1)

陸しき。そは陰慘たる日曜日の後にして、街上行人の影を見ざりしが、余が、この時、初めて英國の土を踐み、同行者たる一人の米國美術家と共に、タワーより、チープサイド、ストランドと順次に上りて、ラッセル街の一旅館に投じ、茲

(2)

にて、良き室を薦められしまでの愉快は今尙忘れず。余等は、今や、幾ヶ月の後初めて旅人のすなる、傍若無人の批評を遏めざるべからざりき。若し街頭にて聲高く語らんか、忽ち他人の了解する所となるを免れざればなり。塵頭の招牌も余等の國語を語り。余等の國の姓氏は、戸々の標札に記され、公私の建築物も、今迄經過したる諸國に比して、一層自國的の、見慣れたる正面を有す。

當時に於ける、多數青年の例に洩れず、余も亦エディンボロ並びにエディンボロ評論の人々に負ふ所多かりき。曰くジエフフリー、曰くマッキントッシュ、曰くハラム、曰くスコット、曰くプレーフェア、曰くデクインシー。而して、余の狭く、且つ秩序なき讀書は、余をして親しく二三文學者の面を見ばやとの望みを起さしめつ。即ちコールリッジ、ウァーズウァース、ランドル、デクインシー及び最も新しくして、且つ最も猛烈なる、各種評論雜誌の寄稿家カアライルなり。されば想ふに、余が二豎の惱ます所となりて、旅行を勧めらるゝに方り、特に歐

洲を擇びし理由を吟味すれば、主としては是等の人物に引寄せられし如し。ゲイテ若し、尙ほ生存せんか、余は獨逸にも遊びしならん。上記の諸人を外にしては、(スコット既に死せしが故に)英國に於ける當時の生存者中、一人も余の見ん事を欲したる者なし。たゞウエリントン公爵のみは、これが一見を願ひしが、後ウエルバーフォースの葬儀に際し、ウエストミンスター^の御堂にて見るを得たり。

年若き學生は、眞實の相を世界に示し得る天才と、共に生活するを、幸福と想像す。されど、彼等も亦その思想に囚はれて、自己其のものを我に致し能はざる者なるを思はず。文學的成功の條件は、殆んど、最良の社交的能力を破摧す。何^{なん}也、そは人をしてその友と親交を訂せしめ得る唯一の性質、快活なる自由を許さざればなり。故に、有名の文學者を訪ひて、これに一瞥を投せんが爲め、遙々海を渡り、山を越え、恐くは、却つて正しき天賦の機智を有し、是非の心を挿まらずして、一切平等に人生を觀る無名の友を、旅宿若くは故郷の田圃に見棄つるの

(3)

(4) 憾みあるべし。然りと雖も、余の見たる文人は、皆その著書に現れたる以上なりき。従つて、余は初と同じく固く信ず、頭腦強大なる人物に至つては、容易にかゝる障礙をも擺脫して、その訪問者に、眞實の満足、果して其人に逢へりとの意識、及び從來見ざりし弘曠の天地を與ふる事を。

一八三三年に於ける、余が旅行中の日記を閲するに、土地の訪問に就いては、何等の公表すべき記録を見常らず。依つて、余は、茲に、人物を訪問したる際に書留めたる、覺書數葉を轉寫す。これ等の人物たる、極めて俊秀なると共に、全世界の眼に映する所、又極めて玲瓏透徹なるが故に、敢て謹慎を装ふて、その明亮なる人格の一斑をも、故らに掩蔽するの必要なればなり。

伊國フロレンスにては、多くの美術家の中にて、特に米國彫刻家ホレージョ・グリーンローを見たり。彼はその顔美しく、五體正しく發達し、その作メド（パイロンの時「海賊」に出でたる女）の像の面と、同じくその作なるアキレス（希臘の）の大粘土像の軀幹

(5) とを以て、既に人も云へることく、彼自身の理想化となすも不可なかるべし。グリーンローは非常の人、熱烈にして、辯を能くし、その抱負氣高くして、豪爽なり。彼の信ずる所に曰く、希臘の美術家は、學派若くは黨派を結びて働けり。師はその意匠を門下に分ち、これを以て、門下の出精を勵まし、而して師の氣力傾くに及びては、門下の新なる手が、同一の熱度を以て、その製作に従ひ、斯くして屢屢人を代ふるも、各部盡く同一の火力を以て完成せらる。此の如き方法を取るは、大理石と云へる扱難き材料に於いては、必要の事なりと。従つて、彼は、今日の度量狭く、猜忌に満てる方法を改め、希臘人の如く、多數戮力して、製作するにあらずんば、決して藝術は榮えずと思惟す。彼の思想は、總て同一の寛濶より出づ。彼は精緻にして深邃、希臘人を崇敬し、ゴシック美術を包容する能はず。一八四三年の出版に係る、彼が建築上の論文は、ラスキン氏の中心思想たる、建築の道德性を、氏に先ちて道破せるもの、唯、美術史に關して、これと見解を異にす

(6) 余は彼の私信を藏す、——後に受取りしものなれども、この時期に屬す、
 中に自説の概要を記して曰く「余の建築説は、是なり。目的と場所とに應じて、空間及び形式を科學的に配列する事。形状の誇張は、その目的の重要な程度の濃淡に比例すべき事。色彩と裝飾とは、嚴に有機體の法則に従つて決定せられ、配列せられ、變化せられ、個々の決定に對して、各明確なる理由あるべき事。假冒の手段、假冒の理由は、残らず直に排斥する事」と。

グリーンローは、一友人に托して、サン・ドメニカ・ディ・フィエソレに住める、ランドル氏よりの招待状を、余に送りき。乃ち、五月十五日、ランドル氏と晝餐を共にす。彼は爲人高潔にして雍容、その臨眺の美を縦にせる豊厦ゲラルデスカ別墅の、雲と懸れる畫幅の間に住めり。余は彼の著書より推し、或はその逸話を擴大して、アキレスの大忿怒の印象、——狎るべからざる痼癖を豫想したりき。余は彼に關する世評の當否を知らず。されど、この月この日、彼の禮貌は、確に

(7) 斯かる傲慢を掩ひ、彼は醇厚溫和稀に見る所の主人なりき。彼はフローレンスを、繞りて生ずる美きサイクラメンの花を賞し、ワシントン^{ワシントン}を讚嘆し、ウァートズウァース、バイロン、マッシンガー、ポーモン、フレッチャーの噂をなせり。たゞ最も確實なるは、彼が斷乎としてその意見を主張し、好んで人を驚かしめ、到底如何ともする能はざる過去に對しても、英人得意の幻想を加へて、自ら喜ぶの風ある事なり。例へば曰く、偉人は未だ曾て偉人を生まず、ヒリップ及びその子アレキサンダーと雖も、亦然りと。即ち、彼はアレキサンダー大王よりも、ヒリップを以て一層偉人となす者なり。美術に就いては、彼は希臘人を愛し、その中彫刻は、獨り希臘を重んず。彼は他の如何なる作品よりも、ヴィナス像を取り、これに次いで、この地の美術館に藏する、アレキサンダーの頭像を取る。ミカエル・アンゼロよりも、彼はボログナのジョンを取り、繪畫に於ては、ラファエルを取り、又、ベルジノその他早期の諸畫家に向つて、漸次起りつゝある時代の嗜好を

(8)

共有す。希臘人の手に成れる歴史は、彼の見る所に依れば、唯一の美きものにして、これに次ぐを、ゾオルテイアの著とす。余は彼をしてマッキントッシュをも、或は更に新なる余の諸友をも稱揚せしむる能はざりき。彼はモンテインに對しては、懇懃をきはめ、シャロンにも亦然りしが、これ等は殆んど十把一束の觀ありき。彼はデゲランドの哲學を以て、『幸福に於けるルカス』及び、『聖徳に於けるルカス』に負へるものと思惟す！彼は又サウジイを説いて、余を惱ませり。されどサウジイ畢竟何者ぞや。

金曜日に至つて、彼は再び、余を朝食に招きぬ。その金曜日に、余は、相違なく、これに赴きしが、此度はグリーンノーと與に共にしき。然るに、彼は早くもジュリアス・シーザーの詩五六行を誦して、余等に響應はんとは！而して曰く、こはドナツスに本けりと。彼は過當にチェヌターフィールド卿を讚嘆し、パークを貶し、ソクラテスを貶し、而して世界の三大偉人として、ワシントン、フォシオ

ン及びティモレオンを挙げたり。その狀、恰も、わが國の果實學者が、その表に就いて、『一小果樹園に對し』、三種、乃至六種の最良なる梨子を選出すが如く、尙ほこれ等偉人の名の語尾の同一なるを附加するを懈らざりき。彼曰ふ『偉大なる人間は、偉大なる犠牲をなさるべからず。わが一百頭の牛をも、その神と英雄とに食はるゝか、或は蒼蠅に食はるゝかを考へずして、屠らざるべからず』と。余曾てアミシ教授を訪ひしに、教授は余に二千倍（と聞きぬ）の顯微鏡を示しき。依つて、余はこの顯微鏡の使用に就いて、ランドルに語る所ありしに、彼はこの昆蟲學を好まざりしも、尙ほ同一の口氣を以て、斷言して曰く『壯美は塵の一類にも存す』と。余は察するに、新進の文學者を説きて、彼を苦めたるが如し。されど、彼は、ハーシェルはその名をだに聞かずと明言せり。一個の室は繪畫を以て充滿す。彼はこれを客に示すを好み、就中、その一幅は、特に彼の誇れる所にして、この前に立ちし時、曰く『これをドメニチノの作と誓ふ者あらば、五十ギニア

(9)

(10)

を興ふべし」と。余は斯かる物よりも、彼の書齋を見んとの好奇心を有せしも、客の一人H氏、余に告げて、ランドルは、惜氣も無く、その藏書を他人に與去り、一時に一ダス以上の書を家に留むる事なしと言ひき。

ランドルは、刻々變化する轉心まがひを愛して、これを極度に實現す。英人のこの轉心を縦にするを悦ぶや、以てわが威力ある自由を標榜せんと欲するものゝ如し。ランドルは専制、猛烈にして、憚るゝ事を知らざる、驚くべき頭腦を有し、恰も軍人として生れながら、何等かの機會に逢ふて、偶、文學に改宗したる者の如く、この文學の範圍に於ては、如何なる様式も、如何なる色調も、これを窮めざるなくして、尙ほ活動と英雄とに對し、英人本來の嗜欲を具ふ。されば、彼惟らく、實行せられたる事のみ益あり、これに就いて語られたる所は然らず。一行の獨創的文章も、一步の前進も、一切の批評に勝れりと。ランドルは不思議に英國に於ては貶抑せらる。されど、學生は尙ほ彼が無數の妍麗なる文章に向つて、

睿智と、機才と、及び忘るゝ能はざる忿怒とに向つて復歸せざるを得ず。

(11)

八月五日、余は倫敦よりハイゲートに赴き、コールリッジに短翰を致して、面會を乞へり。時既に千に近し。コールリッジ言を傳へしめて曰く、如今床上に在り、然れども、幸に一時以後に來らば、相見ゆるを得んと。余則ち一時を以て抵る。彼は現れたり。これを見るに、丈低く、體肥え、碧眼鮮に輝き、面は美しく潔らかなる老翁にして、その身を杖に托せり。彼は盛に喫煙草メナツを用ひ、その粉は、看々、衿飾スリカズリより、清楚なる黒の衣服を、一面に汚せり。彼は余にアルストンを知れりやと問ひ、その羅馬にてアルストンと交りし頃の彼の行狀及び人物をば同情深く物語りき。彼は真にチン派の巨匠なりき等、云々。彼はチャンニグ博士の事を語り。博士が終にユニテリアン信徒に變じたるは言語に絶する不幸なりと、説いて爰に至りし時、彼は突如として「ユニテリアニズムの愚と無學、——其高度の不合理を絶叫し、卓上にありしウォーターランド僧正の著書を取上

(12)

げさま、その見返しの白紙に、彼が記し置きたる文章二三頁を、凄じき勢にて朗讀したり。この文章は彼の著『回想のたより』中に收められしものと信ず。余は、彼が息継ぎの爲め、朗讀を中止したる隙を見て、語を挿んで曰く、『高説は大に尊重する所なれども、余はわが「ユニテリアン」信徒として生れ、且つその教育を受けたる者なるを告げざるを得ず』と。彼答へて曰く『然り、余もその然るべきを察しつ』と、而してその論を續くる事依然たり。怪むべきかな、かくも長年月の間、何等の疑をもおかすして聖ポールの教を奉じたる後、——これ三位一體トリニティーの教にして、又ヒロ・ジェディアスに依れば、基督以前より存したる猶太の教なり——この一撮爾の僧侶が敢てこれを否認するの舉に出でんとは、云々。彼はチャンニン博士——彼が仰視する所の人——否、彼が博士を仰視すと言ふは虚欺を語るなり、實は多大の興味を以て睥視するのみ——が、かゝる見解を取るに至りしを悲めり。彼、曾て博士に逢ひし時、博士の基督教を愛するは、その愛すべく、秀美

(13)

なる方面のみに非ざるなきかを怖ると諷したり、——その善を愛して、眞を愛せざる者なりと。乃曰へり、余は君に告ぐ、余はその眞を愛する者の一人に對して、善を愛する者の十人を知る。されど眞其のもの、爲めに眞を愛するは、善其のもの、爲めに善を愛するに比して迥かに偉大なる徳る也と。コールリッジは曾て自らユニテリアン信徒たりしを以て、その教義の總てを知悉し、且つその假冒に過ぎざるを看破せり。彼は一度び「ユニテリアン」派の「昇る星」と稱せられたり。彼、更に語を繼いで、定義を下し、或は寧ろ原意を改善して曰へらく『三位一體の教は實在論リアリズムなり。神の觀念は本質的にあらず、本質的以上なり』と。次に三位説トリニティ、四位説クワリニティを述べ、その他語るところ極めて多かりしが、余が其中にて心に留めたるは、唯次ぎの點に過ぎず。『意志とは人格の人格たる所以のものなり。何となれば人若し路上にて余を後より突き、余はこれが爲めに前の人を狗舎いぬやに押込みたりとせば、直に叫んで言ふべし、余はこれを爲さずと。これ余の意志にあらざる

(14)

を意味す」と。又曰く、『若し君が君の信仰を此英國にて固執し、余は余の信仰を固執すとせば、余は異論として君よりも一層激しく攻撃せらるべし』と。

余は彼の語り止むを待ちて、彼がその宗教上の意見に就いて、米國に多數の讀者を有する由を告げ、進んでその著『朋友』の第三卷に出だせる、所謂獨立信仰者のバムフレットよりの拔萃なるものが、眞の引用なるか否かを訊ねしに、彼は實際これをその所藏に係る『獨立信仰者の一抗議』若くは要するにかゝる意味の表題の一バムフレットより取れりと答へき。余乃ち告ぐるに、余が之を極めて卓見と考ふる旨、及びその全文の一讀を熱望する旨を以てせしに、彼曰く「然り、その著者は混沌たる眞理を藏す。されど、彼は神が秩序の神なりとの智識を缺く。かの文は疑もなくその原本よりも、拔萃の方が、君を感動せしむべし。余はこれを改めたり」と。

余が辭して歸らんとするや、彼は『余は君が詩を愛するか否かを知らず、されど試に頃日余が洗禮の紀念日にもしたる數行をば誦すべし』とて、一句毎に調子を強めて、立ち乍ら、其十行許りを誦したるが、冒頭の第一句は次の如くなりき。

『基督によりて神に生れ——』

彼は余の旅行し來れる地方を問ひ、余がマルタ島及びシ、リイ島にも赴きたりと告ぐるや、これ等二島を比較し、かれが往年、この地方より歸りし際、倫敦の僧正に語りたる所なりとて、之を繰返して語りけるは『シ、リイは財政學の絶好なる學校なり。この島に於ては、何れの市邑に到るも、唯政府が如何なる法令を議定したるかを問へば足る。如何に爲すべきかを知らんとせば、之を逆倒せよ。その制度法律は、總て善なるもの、賢なるものと、最も愉快に背馳せり。政府がこの歡樂の園に齎したる所のものは、僅に三を數ふ。即ち疥癬と、疱瘡と、飢饉とのみ。然るに、マルタ島にて在りては、法律及び精神力の効果、著しく現れ、半サラセ

(15)

(16)

ン族の住地たる、礎礫の地は、變じて、人口繁殖、物産豐饒の樂土となれり』と。去るに臨み、次ぎの室にて、アルストンの畫を示して曰く『モンターグと云へる繪畫商人、一日、余を訪來りて、この畫を一見し、心に之を以て古畫となして曰く、『好い哉、君は佳品を得たり！』と。それより、彼は畫布を背にして、余と語りつゝ、手を揚げて之に觸れしが、忽ち叫んで曰へり『底事ぞ、こは未だ十年を経ず』と。——この男の觸感の鋭敏にして精妙なる事、實に斯くの如し』と。

余は、約一時間、彼と相語りき。されど、彼の議論は、大部分、これを想起する能はず。そは屢々彼の著書に印刷せられし多くの文章と酷似す、——恐くは同一ならん。彼が極めて容易に一種の平凡に墮するや、斯くの如きものあり。この訪問は、余が預め想察したる如く、語る爲めよりも、寧ろ視る爲めにして、余の好奇心を満足せしむる以上に何等の得る所なかりき。彼は年老い、且つ先入の思想に充され、従つて、新しき友の前に身を屈して、與に共に考ふる事能はず。

エディンボロより、ハイランツに赴きたる余は、歸途、グラスゴーよりダムフリースに到りて、心に羅馬より携へ歸れる一通の書狀を渡さん事を急ぎつゝ、グレイゲンバトックの地を尋ねしに、そは爰を去る十六哩、ダンスコーア教區、ニッスデールの一田庄にして、その邊へは、乗合馬車も通はずと曰ふに、余は特に一臺の馬車を備ひて、旅宿を立出でたり。頓て見る、石草蔓々として、荒果てたる丘の間に、一軒の家あり、是れなん、我孤影蕭條たる文人カアライルが靜に其博大なる心情を養ふの所なりける。彼は少年にして大人たり、又、その讀者より隠るゝを要せざる著者なるも、單に世界の一人としては、全然、他人に知られず、此山畦に竄伏す。その狀宛も倫敦に於ける最善のものを我意の儘に所持するに似たり。彼は丈高くして軀瘦せ、額は巉巖の如く隆起し、舉止沈着、才辯縱横、會話に於て、絶倫の技倆を有し、その北方蘇國の發音を操るや、さも快きが如く、活氣ある逸話に富み、機智流るゝ如く、其眼に觸るゝ所を盡く浮揚し、尋常一様の

(17)

(18)

事物を鋪張するの巧なる、その對手をして苦も無く、彼が非凡の鬼才と親ましむ。されば、彼に依つて、他日神話を構成すべき、運命を有するもの、奈邊に潜めるかを知るは、極めて愉快なる事に屬す。對象は少く、人物も稀にして、彼の語を假れば『ダンスコーアの教務長を除きては十六哩以内に一人の語るべき者』も無き片田舎の事として、彼の話柄は勢ひ書籍ならざるを得ざりき。

彼はその議論に引き慣れたる事物に對して、自己専用の稱呼を有し、『ブラックウッド雜誌』を『砂雜誌』、これよりも稍生氣に富める『フレーサー雜誌』を『泥雜誌』、或企業の失敗したる紀念を残せる附近の一道路は、これを『最後の六片の墓』と呼べり。彼の前にて餘りに多く何人かの天才を稱揚し、以て、彼を惱ます時は、彼は堂々乎としてその飼養に係る豚の才能を説き來るべし。彼曾て多大の時と工夫とを費して、その豚を檻の一部に拘囚せんとしたるに、豚は大にその理性を發揮して、板の一枚を外すべき方法を見出し、かくして見事に彼の計略を敗りきと。

かゝる事實あるにも係らず、尙彼は人間を以て、地球上最も變化自在なる可憐の小動物となし、羅馬の暴王ネロの最後「自滅の藝術家」を、多くの歴史に踰えて愛好す。彼は一時米國を研究し、これに關する著述を少からず讀みき。彼に依れば、ランドルの主義は、單に一揆に過ぎず。且つ、彼はその米國流にあらざるかを恐る。彼が米國につきて知れる最上の事は、此國にては、何人もわが勞力に依つて、食物を得るの一點のみ。彼はスチュアートの書にて、著書が紐育の一旅館にて、靴磨人を呼びし時、その靴磨人が、街の向側の我家にて、七面鳥の焼肉にて食事を認めつゝあるところを示されたりと云へる記事を讀めりと。

余等は書籍に就いて相語りき。彼はプラトローを讀まず、ソクラテスを擯斥す。而して余の強ひて問ふに及んで、ミラポーを一個の英雄なりと主張しき。彼はギボンを呼んで舊世界より新世界に入るの一大橋梁となしき。彼の讀書は多岐に亘れり。『トリストラム・シャンディ』は、『ロビンソン・クルーソー』に次いで、彼の

(19)

(20)

讀みたるものゝ一にして、ロバートソンの『亞米利加』もその早期に於ける愛讀書なりき。ルソーの『懺悔』は彼をしてわが痴呆にあらざるを悟らしめたり。彼は、十年以來、獨逸語を學べり。これ獨逸語の中に、わが求むる所を見出し得べしと或人に勧められしに因ると。

彼は今日の文學に對して絶望的若くは嘲笑的見解を抱き、大なる書籍商が、廣告の爲めに、一年間に支拂ふ費用の信すべからざる程多額なるを説き、その結果、今や新聞紙は盡く信用なく、書籍は總て賣れず、書籍商は破産に垂々たりと言へり。

彼は又英國の貧窮を論じ、その人口稠密なるを説き、且つ、公人が公人として成すべき一切の務を、我慾の爲めに放擲せるを憤りき。『政府は貧民を導きて、その當に爲すべき事を爲さしめざるべからず。感むべき愛蘭人は、この邊の野山にも彷徨來る。余の妻はこれ等アダムの子孫に、各、麵麩を與ふるを常とし、その口

腹を充して、これを次ぎの家に到らしむ。雖然、爰に數千エーカーの荒地あり、以て彼等の總てに食を與ふべし。然るに一人としてこの感むべき愛蘭人に向つて、茲に來つてこれを耕せと曰ふもの無し。彼等は禾堆を焚き、以て富人を強ひて自己を助けしむべき道を發見しき』と。

余等は家を出で、蜿蜒たる丘陵の上を徜徉し、折しもその頂を隠せるクリッフ
エル山を望み、頓てウァーブスウァースの里に降り、爰にて兩人相對坐して、靈魂の不滅を語り。余等がかゝる題目を論ずるに至りしは、カアライルの過にあらす。彼は、性來、かの劇疾なる精神が壁に衝突して、徒らに自ら傷くを厭ひ、到底一步をも進む能はざる境地に、自己を置く事を好まざればなり。されど、彼は換實にして精誠なれば、能く時代と時代とを繋ぐ靈妙なる連鎖を認め、いかなる出來事も、盡く未來の一切に影響するを知れり。『基督は木の上にて死しき。こは彼方のダンスコーア教會を建てき。こは君と余とを引合せたり。時間タイムは畢竟關係

(21)

的存在を保てるのみ」と。

彼はこの頃既に倫敦に注目し、學者の見地より、これを批評せり。曰く、倫敦は世界の心臓なり。單に多數の人間を含める事實より見るも、驚異に値すと。彼は其大なる機械を好む。機械の各部は、盡くその任務を守りて運轉す。麵麩屋の小僧は、毎日、一定の時間に、マフィンマフィンを窓際まどぎはに持來るべし。こは此題目に就いて倫敦人の知り、若くは、知らんと欲する所の一切なり。されど、倫敦はまた優秀の人物を産す。彼はその人物の若干を指摘せり。就中、彼の友なる或る學者の如きは、その知人中、最も高雅の精神を有するもの、倫敦の市民亦能くこれを遇すと。

八月二十八日、余はライダグ・マウントに赴きて、ウアーズウアースを訪へり。その娘の呼び來れる彼を見るに、頭に霜を戴ける、飾氣なき一老翁にして、何等特異の點も無く、且つ碧眼鏡をばかけて、痛くその風采を損せり。やがて、椅子に腰を卸し、極めて卒直なる調子を以て語り出だし、所に依れば、彼は今旅より

歸りし所にして、健康は佳良なれども、旅中、二人の辯護士と連立ちて歩みし際、仆れて齒を一枚折りたれば、この事四十年前に起らざりしは幸なりと言ひて、二人の爲めに、その哲學を稱揚せられたりと。

彼は米國に就きて多くの意見を有し、米國が彼の好める話題に機會を與ふるに至つて、多々益々然りき。曰く、社會は皮層的教授の爲めに開發せらるゝに偏し、その道徳的修養に依つて管束せらるべき進度と、權衡を失する事甚し。學校は益なし。教授は教育にあらずと。彼は教授の教育よりも、境遇の教育を重要となせり。法律の認むる罪過オラニエスありや否やは問題にあらず。法律の認めざる罪過ありや否やを考へざるべからずと。彼の怖るゝは罪惡ノムなり。而して社會は如何にしてこの罪惡より生ずる最大の損害を免るべき乎？彼は更に一步を進めて、米人はその社會的結合を一層固くするの必要を學ばん爲めに、須らく内亂を起すべしと、一見矛盾らしき説をさへ主張せり。而して曰く「米國に於ては、或は多少その風習の

(24)

野鄙なるを免れざるべきも、それは重要な點にあらず。それは萬事草創の結果のみ。されど、余は怖る、米人は、第一、餘りに金儲けの爲めに、第二、政治の爲めに、その心を奪はれつゝあるべきを。彼等は政治界に名を現すを以て、最後の目的となし、これを以て手段となさず。又、怖らくは、米國は、間暇を有する階級——約言すれば紳士の階級——を缺き、従つて、社會に名譽と云へる調子を與ふべきものなきを。聞く、英國に於ては、毎日の如くに行はれ、決して何人の口にも上らざる行爲が、米國の中流社會に在ては、大に誇揚せられつゝありと。米國に就いて、余はその教會、若くは學校の數を聞かんことを欲せず。唯、いかなる新聞ありやと問ふべし。この丘の麓に住める余の友ハミルトン大佐は、曾て一年間米國に在りしが、その新聞の惡辣極りなく、一國の代議士を攻撃するに、匙を盜みたりとの口實を以てするを、余に斷言したり』と。彼は、英國の改革政治家が、新聞紙の税を智識の税と稱して、これを免除せんとするに反對せり。その理由と

して曰く、然る時は世人は劣惡なる印刷物の洪水に遭ふべしと。而して、彼は斯く政治を論じたる理由を告げて、これ余及びあらゆる米國人に向つて、道德的、保守的、その他種々の修養を力めん事を勧め、且つ、現に英國に於て改革案に關して行はれたる如く、——夙にデロームの預言したる所のもの——人民の暴力を招致するに至らざらしめんと欲するが爲めに外ならずと云へり。彼は、又、頃日彼を訪問せしチャンニング博士と彼との間に行はれたる問答に就いても、一度言及する所ありき。(博士はこゝに坐したりとて、一脚の椅子にその手を置きつゝ)。

談話は書籍に移れり。彼はルクレチウスをヴァージル以上適に推尊せしが、これその學說の故にあらず。彼の學說は半文の價なし。唯、その彰明の力に於て然りとすと。又曰く、信仰は何事を説明するにも必要なり、神の先見と、人間の罪とを調和するにも缺くべからずと。クーズン(その講演は、我ポストンに於ても、大に讀まれたり)に就いては、彼は僅にその名を聞けるのみ。

(25)

(26)

余は彼にカアライルの批評及び翻譯を讀みしやと尋ねしに、彼は時としてカアライルを狂人と思推すと言へり。彼は進んでゲーテの『ウイールヘルム・マイステル』を痛快に罵倒したり。そはあらゆる状態の恣淫を以て充滿す。そは群蠅の空中を渡るが如し。彼は未だ此の書の第一部より先きを讀まず。彼がこれを厭ふの甚しき、取つて放抛するに至りきと。余は彼の激怒を遺憾とし、能ふ限り、この書の佳所を辯明したるに、彼は今一度これを見るべしと懇ろに約束しき。彼謂つて曰く、『カアライルの文章は、極めて曖昧なり。彼は聰明にして深し、されど、他人の同情を蔑視す。余はコールリッジに向つても、常にその今一層理解し易く書かん事を冀望したれども、カアライルに比すれば、尙明晰と言はざるべからず』と。彼は余を導きて、庭園に出で、その小石多き細徑を示したり。これ彼が從來幾千行の詩を綴りし所なり。彼の眼はいたく炎衝せり。されど、こは讀書の爲以外には、毫も彼に不自由を與へず、蓋し彼は散文を作らず、詩に至つては、その

(27)

數百行をも能く腦中に貯へ、然る後、これを紙に下すを以てなり。彼は今恰もスタッフアの島に遊びて歸りし所なりとて、そのフィנגアル洞窟について三日間に、小曲^{ソネット}三章を成し、嚮に余を見んが爲めに出來りし時は、次ぎの第四章を作りつゝありし由を語り、而して曰く『君もし余の詩に興味をもたんか。或はこれを聞くを好むべし』と。余は喜んで之を請へり。彼は則ち暫く記憶を呼びたる後、眞直に起立し、一章又一章、順を追ふて、その三章とも、非常に活潑に吟じ終りき。余はその第二章及び第三章を以て、彼の從來の諸作に比すれば、常ならず美しきものあるが如く想像したり。第三章は花に與へたるもの、就中、オックスアイと稱する野菊は、その巖壁の頂上に夥しく生せりと。第二は洞窟の名、即ち『音樂の義』の義を詠じ、第一は、その洞窟が、物騒しき汽船の客に見舞はるゝ状態を詠じたり。

この朗讀は、甚だ予想外にして、余を驚かしめ、——老翁ウァーズウァースが、

彼方に直立して、園内を徇遙せる余の爲めに諳誦をなす有様は、小學生徒の練習に彷彿たりき。——余は初め殆んど失笑せんとしたり。されど、余は實に詩人を見んとして、斯くも遠く尋ね來り、而してその詩人は現在余の前にて自作の詩を朗吟しつゝありと心附くや、余は彼の正しく、我の謬れるを悟り、欣然としてこれに傾聴しき。余彼に告ぐるに、余が從來印刷に上れる彼の詩の少許の拔萃を見しとき、その未だ世に公にせられざるものを知らんとの念に堪へざりしを以てせしに、彼は、決して出版を急がず、是れ一は大に改刪を加ふるに因る。發表後に訂正すれば、必らず有難からざる批評を受ければなり。されど、わが作れるものは、生前と死後とを問はず、何時かは必らず出版せらるべしと答へき。余曰く、『ティンテルンの御堂』は、世人の最も愛誦する所なるが如し。されど、思索的の讀者は寧ろ『散策』^{エキスカシオン}の第一篇、及び小曲を取るべしと。彼答て曰く『然り、後者を勝れりとす』と。彼はその詩の中、感情^{アフェクシオン}に觸れたるものを、他の如何なる作よりも可なりとす。何となれば總て教訓的の作は——總て社會の學說も、其他も——速に滅ぶべし。されど、總て眞理と感情とを結合したるものは、今日に善くして、又永久に善ければなり。彼は小曲『心高き西班牙人の感情について』を以て自餘一切の作の上に置き(と余は推察す)、又『二つの聲』を取り、又、さも我意に適するもの、如く、『雲雀に與ふ』を擧げき。之と關聯して、彼はニュートンの原理も、世人に斥けられ、忘れらるゝ日あるべしと言へり。ダルトンの原子説も亦然りと。

余が身繕ひして辭去らんとするや、彼は英國に於ける普通の人間は、誰にても示し得る所のものを余に示さんと言ひ、余を伴ひて、その執事の園牆の中に入り。こは彼がその所有地の一部を割きて、執事の青年に與へたるものにして、その手に依りて趣味多く墾かれ、美しき自然の姿を現したり。次ぎに、彼は旅宿に至る捷徑を教へんとて、相語りつゝ、余を送り來ること、ほとんど一哩、この間、

時に歩を停めて、或はその語、或はその詩を深く余の心に刻みたる後、終に多大の深切を示して、余と別れ、野を横りて歸り行きたり。

ツァーズツァースは卒直に事物の眞を守るを以てその名譽となし、肯て外飾を繕はず。されど、その思想の嚴密なる限界を有する點は、余をして一驚を吃せしめき。この一場の對話より判断すれば、彼の印象は、狭く且つ眞正の英人的なる精神なり。非凡の雄高を得たる爲めに、その報償として、一般的溫柔と、交譲とを保つ所の人物なり。彼れ自身の鼓吹を離れては、彼の意見は毫も價値なし。斯の如く同情と安靜とを慕ふが爲めに、或る一方面における普通人との懸隔を、他の總ての方面に於ての交譲にて償へる人を見るは、甚だ稀なる事にあらず。

第二章 英國への渡航

余が再度英國を訪ふに至りしは、同國ランカ州シテ及びヨーク州シテに於ける諸の職

工會インステテユートの招請に因る。この職工會なるものは、その個々に就いては、わが米國の修養團ライシユームと殆んど同様に組織せられしが、一八四七年、一大合同ユニオンの下に統轄せらるゝに及んで、都市二三十を含み、以來、早くも中部諸州に弘まり、北は殆んで蘇克スコット蘭にも入れり。余は手厚き條件を以て、これ等職工會の爲めに講演を爲さん事を求められ、マンチェスターの懇なる諸團體の如き、あらゆる好意を仄して、これを余に迫り、且つ諸般の補助と慰藉とを約せしが、結果に於ては、果して優に其語を充たせしものあり。余の受けたる報酬は、わが國に於て、當時、この種の勤務の爲めに拂はるゝ授業料と同額なりき。何は兎もあれ、此金は以て一切の旅費を辨するに足り、且つ、余はこの勧誘の爲めに、到る處の都市に於て、余の到着を待ちたる家庭を通じ、及び聰明なる友人より成れる委員を通じて、英蘇兩國の内部を見るべき、絶好の機會を得たり。

この行、元來、余の大に望みたる所にあらず。余は旅行に長せず、又、長途の

旅行が、道理に合へる時間を相當に割り與ふるを知らず。されど、此招請の繰返され強ひられしは、恰も余が比較的多くの暇を有し、且つ、平生になき勉學の爲めに、稍疲勞を感じたる際なりしを以て、余は變化と強壯劑とを要するに方りて、英國を勧められし者と云ふべし。これを外にするも、少くとも海洋てふものに對する、猛烈の嗜欲、及びその健康を助くる効果のあるあり。斯くの如くにして、余は遂に郵便船ワシントン・アーヴィング號の一室を領し、一八四七年十月五日の火曜日を以て、ポストン港より船出したり。

金曜日の正午に至つて、余等は僅に百三十四哩を航したるに過ぎず。印度人の身體輕快なる者は、これ丈の距離を泳ぐべし。されど船長の確言する所に依れば、時來らば、船はその快足を示すべしと。かくて暫くはメーン及びニュー・ブランスウィックの兩河が洪水と共に海中に吐出したる板片、丸太、或は斧口柴（おぐく）の雜揉して漂へる間を、徐々として縫進めり。

終に、日曜日の夜、一日の勤務を四時間にて済したる後、天候一變し、暴風來り、船はその綱具と帆とを激しく緊張せられつゝ、西北の風を受けて、飛ぶが如くに駛り出でぬ。わが頼母しき船は、終日、終夜、魚の如く、波を貫いて突進し、その高速度のために微に顛ひつゝ、倏ちにして音もなく幾萬頃の水を滑り、水平線より水平線へと滑り行く。彼は今セーブル岬を過ぎつ。彼は今バンクスの灘にかゝりつ。陸鳥は影も見えず、鷗（かも）、ハグレット、鴨、海燕の類、或は遊ぎ、或は潜り、或は船を圍んで翔翔す。漁夫も見えず。船は今バンクスを過ぎぬ。今朝のほどは余等よりも迥に東方にありし船を、五隻まで追ひこして、これをば遠く後方天の一角に残し、——舳艫相趁ふは容易に決勝を見ざる競争なりと云はるゝにも拘らず——尙も生命（いのち）の爲めとぞ趨るなる。ポストンよりリヴァプールに至る航路は、二千八百五十哩、是れ汽船の取る所にして、百五十哩を節約し得たるものなり。帆船に至つては、三千哩以下の航路を取る能はずして、而も通常之を越ゆ。

(34)

わが好船長は、最高帆を極度に張り、補助帆は風のまにまに、或は高く、或は低く飄飄せしめ、絶えず舵を真直に取りて、些もその航路を延ばさざらんとす。警戒は船の法律也、——警戒の上にも警戒を加ふるもの、進行の爲めにして、又生命の爲めに外ならず。船の初めて建造せられし時より、船長たる者は、その乗組中、未だ曾て衣を解いて眠らざるが如し。サージは曰へらく『航海には多くの利益あり。たゞ安全は其一に居らず』と。されど、この無底の深潭を奔過するに際しては、假令絶えず不測の危険に向つて突入すとすも、尙ほかの陣風、衝突、海上病、海賊、沍寒、電撃等各種の機會を含める、海上數百哩の危険を、毎日に脱出しつゝあるは疑ふべからず。同一の時間内にては、帆船よりも汽船に危険多し。されど速度は安全なり。換言すれば、二十四日の危険に對する十二日の危険也。この船は登録噸數七百五十、その容積を加ふれば、恐らくは千五百噸にも上るべし。主檣メインマストの高さは甲板より頂蓋に至つて百十五呎、甲板の長さは、船首より

舵器に至つて百五十五呎を算す。吾人は船を擬人せざらんと欲するも得ず。これ一切の人が、一切の事を語るに就いて爲すところ、——彼の行動は好し、彼は舵に従へり、彼は家鴨の如く泳ぐ、彼はその頭を波濤の中に突入る、彼は港を目指せりと。かくて、吾人はわが接觸する所のものを、盡く主我心の中に攝取せんとする同胞的精神の爲めに、身を以て、船の航海的性質を代表するに至れり。

この意識的汽船は、種々の讃辭を聞く。彼は一週間に一千四百六十七哩を駛れり。されど、今宵は耳を傾けて、今日の二時にボストンを出帆したる汽船を、その背後に聞くものゝ如し。彼は速力を改めつ。而して、今や、灰色の南風に吹かれつゝ、一時間に十一節半を飛べり。燐火は後方一帯の水痕中に輝き、又遠く船を離れて浪の碎けたる處にも見ゆ。余は此光を假りて懷中時計の九時四十五分を讀みき。赤道の近くにては、最小の活字をも讀み得べし。機關士は此燐光蟲を桶にて汲上げしに、カロリナ馬鈴薯の形に似たりと云へり。

(35)

(36)

余は海上生活の趣味なるものは、畢竟、赤茄子又は阿列布の趣味と同じく、後に生じたるものなりと思惟す。拘囚、返寒、激動、騒音、悪臭は免るべからず。余の室の床は時として二三十度の傾斜をなし、毎朝、余は何者かわが寢所を下より輕打する者ある如く感じて眼を醒せり。何人と雖も、わが凌辱せられ、推倒せられ、壁に叩きつけられ、輾轉ねころがされ、艙水か、毒氣、スチューの臭氣にて窒息するを好むべからず。吾人も終には是等のものに習熟すへし。されど海に對する恐怖は尙殘れり。海は男性的なり。活動的勢力の標本なり。見よ、卵の殻にも似たる無數の船は、その總ての表面に泛び、これに満載せる人間は、何れも余等の船に於ける者と同じく、戦々競々の想を抱きつゝ、而もその輕佻自ら慊するや、水波の平靜と狂暴とに従ひて、一喜一憂す。この哀愁の色を示せる一大圓圈は、それ永劫の墳墓なる歟。吾人は墓場に於ては穴を穿つべし。されど、この大膽不敵の海は、自ら幾哩に亘る墓穴と巨口とを開き、以て堂々たる艦隊をも、一氣に嚙下す。地

(37)

質學者の眼には、海は長へに芥々たり。獨り陸に至つては、絶えず變化し、倏ち噴出して瘤腫を生じ、忽ち陥没して裂虧を成し、僅々數百年間の觀察にかゝれる記録を見るも、その起伏絶間なき衝撞に在るを證す。これに反して、海は萬古の水準を保てり。故に若し大洋の咆哮にして、吾人の傳説を打消さんとしつゝ、ありとせんか、人間の歴史が、かくも新しきは怪むに足らざらん。若しこの海面に曾ても觀察せられし如き隆起を生じ、例へば一世紀に一時づゝ、東西の陸地を侵すとせば、そは極めて確實に、而も人間の注意に上る事なくして、あらゆる都會と紀念碑と遺骨と智識とを葬去らん。果して海にこの偉大なる物質的危害を逞くし得るの力ありとせんか、その個人的又は地方的損害を惹起する事、元より易々たるのみ。而して海員の海を畏るゝや、陸上の人の比にあらず。船長、運轉士等が語るところの話は不愉快にして危険を感せしめ、吾人が歐洲に赴かんとする希望を挫折する事、その高價なる船賃に譲らず。されど海の靈怪は常に新しく、壯

(38)

健の男子をして容易に水夫とならしむるに足る。こゝに又、余が航海の第二日に、襯衣一枚の少年ありて、突然甲板に現出でき。彼は英國に赴かんと欲したるも渡航の費用なきが爲め、船の港に碇泊せし間に、窃にその中に忍び入りて、麴麩房に隠れるたりしと。水夫はこれにゲルンシー風の上衣を着せ、その帯に小刀を帯びしめたるが、是より彼は水夫の後を追ひて、身輕に綱具を攀ぢ、水夫の語に依れば、『最も勞働を好み、若し船長だに許さば、再び此船にて歸らんと言へり』と。運轉士はこの方法があらゆる水夫の歴史にして、その十中九まで、脱走少年なるを斷言せり。又曰く彼等は總て海を厭へるも、矜誇の念よりこれに留まれるのみと。水夫の生活は危険多きのみならず、間斷なく劇務に服し、而もその賃銀極めて賤し。運轉士はこれに勝る事僅に一等、船長と雖も、大に勝れるにあらず。一ヶ月百弗は高給と認めらる。されば水夫にして若し能く之に満足し、毎次海を棄てんと決心をなす如き事なくんば、余は彼等を尊敬せざるべからず。

勿論かゝる不便及び恐れといへども、神氣自若たる人にとりては、元より何物にもあらず。水の法則も、極地の氷雪も、高山大嶽も、鑛坑も、獨り都會の輕薄兒を戰慄せしむるに足らんのみ。高邁なる活動家は、自ら我居るべき場所を造るべし。大なる學者は、大なる詩人と共に、好個の水夫たるべし。而して海は善き博物學者に向つては無價の秘寶をひらくに吝ならず。

旅行の度びに、何等か一般的研究に關する書籍を携へて、不良の天氣、不良の夥伴、又は旅宿の騷擾の爲めに、いかなる節約家も、奪はるゝことを免れざる時間の損失を拯ふは、良き掟なり。我家にて睡魔に襲はれつゝ讀みし古文學書も、田舎の宿屋、又は商船の窓格子の下にて讀む時は、怪しきまでの妙味を有す。余も從來讀書に依つて得たる、最も楽しく且つ最も有益なる時間の中、その或るものは、數年前、これを船中にて費したるを記憶す。海上の讀書にて、余が最も不便と感ずるは、船室に光線の足らざることなり。

(39)

余等はこの船にても普通の船室文庫を見出せり。その中、最も多く讀まるゝはバジル・ホール、デュマ、ディケンズ、ブルソー、バルザック、サンド等の稗史小説にして、是等の作者は海神とも云ふべき地位を占む。乗客は何れも多少才能及び職業の相異を有す。乃ち余等はわが経験を交換して、各、學ぶ所ありき。陸上にては多忙を極むる者も、海に出づれば、間暇に乘じ、且つ種々の便宜を得て、自由に談話を爲すべし。従つて、吾人が平生知らんことを欲して、譬へば精神の一部に壁龕を設けて期待せるごとき事も、圖らず、他人の口より聞くを得べく、かゝる時、吾人は採集者の如き喜びを以て、これを迎ふるを常とす。然れども、いかに良き事情の下においても、航海なるものは、人を惱ます事最も甚しき試煉の一なり。大學の試験も物の數にあらず。海上の一日は長し、——悠々として吾人を顧みざる、この光弱く、樂なき日は長し。されどその日數は多からざりき、船長によれば十五日、余の記憶にては十六日に過ぎず。船の初めて着鍾深度を離

れし時より計算するに、その速度は非常にして、船長は赤インキを以てその航程を海圖の上に引き、以て後の航海者を奨励し、或は羨望せしめんとするに至りき。

英國皇帝は軍艦の船室内にて外國大使を引見し、これに依つて、その威嚴を圖ると傳へらる。余惟らく、大西洋上に汽船の描出す蒼白の舟路は、是れ即ち數百年來、嚴然として海上の主權を握り、あらゆる他の國民の船より、その通行税を徴し、其下帆の敬禮を受けし航業國民の王宮の正門に達する大道なるべしと。この特權に對して、獨逸其他の小なる海上業者が異論を挿み、英國民に向つて、卿等も決して同一の波上に碇泊する能はず、且つ絶えず流動する水に對しては所有權を保つ能はずと主張せし時、英國民は強ひてその海峡を壟斷せんと欲せず、又あらゆる大洋の底にも未練を残さざりき。彼等は曰へらく『吾人は譬へば、海水の爲めに争ひて、海の位置、若くは其水の底たる地面を忘れたるものなり。海は

(42)

我陛下の帝國を以て圍まるゝにあらずや」と。

吾人は陸地に近くに從つて、その魂を感じたり。こは是れ到底英國の岸なり。今や、人々の精神に新しき組織、英人の感情、英人の愛と怖れ、英人の歴史と其社會状態とは湧上れり。昨日は乗客皆船の欄干に凭れて、泡沫を眺めつゝ、その速度を測りしが、今日は、泡沫の代りに、キンセール、コーク、ウォーターフォード、アードモリア等の海港を以てす。愛蘭の妻々たる岸は、さながら或る豊満樂土の濱邊の如くに、彼方に横れり。余等は都會を見、尖塔を見、寺院を見、秋收を見たり。然りと雖も、過去八百年の詛は、未だ之を看破するによしなかりき。

第三章 國 土

アルフィエリ惟らく、世界に於て、住むに値する國は、唯伊太利と英國とあるのみ。前者に在りては、自然がその權利を擁護し、政府の加へたる害惡を征服

(43)

せるを以て、後者に在りては、人工が自然に打勝ち、荒涼慘烈の國土を變じて、愉快にして收穫饒多の樂園と爲せるを以てと。英國は一個の庭園なり。その灰色の空の下に、野は條文正しく整平せられ、鋤もて耕されたりと云はんより、寧ろ鉛筆を以て畫かれたるが如くに見ゆ。多くの都市を構成する建物は、極めて堅實にして、歴代人民の勤勞を語れり。自然の儘に残れる物は一もなし。山川谿谷、乃至海其ものと雖も、皆人間の技術を感ず。力強く、發明の才に富める民族は、年久しくこれに住みて、寸尺の地に至るまで、これが最善の用途を講じ、その總ての可能性を盡さずんば息まず、或は耕地、或は石坑、或は公道、或は傍道、或は渡船場、或は舟筏に堪ゆる河流と、而して、今や、新なる交通の設備は、到る處に吾人を待てり。されば、英國は又わが要する所のものを、殘らず自己の交界内に備へたる、一個尨大の同住共產舎フラスネナリイの如し。旅客は厚蒲團クッションに横り、各種の便宜を樂みつゝ、わが米國の汽車に殆んど倍する速力を以て、或は高く、或は低く、

(44)

河を踰え、市街を過ぎ、三四哩の長き隧道に依つて、山を貫き、宛ら砲丸に乗れるかと許り、國內を奔馳すると同時に、尙車中靜かに「タイムス」新聞を読む。この新聞たるや、即ちその博大なる通信と報道とを以て、自國以外の世界をば、總て其旅客の活動の爲めに機械化せるの觀あるもの。

リヅァプールの港に上陸したる旅客の疑問は次の如し。何故に英國は英國なるか。英人が他の諸國民の上に有する勢力の根本的要素は何ぞと。若し一般の承認する所となれる、國民魂の試金石ありとせば、そは成功に外ならず。而して、過去一千年間に、成功したる國がこの世界にありとせば、そは英國に外ならず。

見識ある旅行家は、元より現在生存せる國民の中、その最上なるものを探んで、これを訪はんと欲すべし。且つ米人は、他國民に比して、殊に米國に向ふべき多大の理由を有す。吾人は、正しき思考、若くは實行を遂げんとして、米國人民の今日成就し、或は着手したる各般の事物が、英國に在りては、既に一種の文明

(45)

として固定し、その威力を逞くせるを見る。現下の修養、すなはち人類の思想及び目的は、畢竟、英人の思想及び目的なり。エグバート王以來、一千年間、重きをなしたる英國々民は、最近數世紀に入りて、大に頭角を現し、わが刻印を以て、全人類の智識、活動、及び勢力を刷出しき。これに抵抗するものも、等しくこれに感じ、或はこれに服従す。露國は、その雪の中にて、英國たらん事を目的とせり。土耳其も、支那も、英國たらんが爲めに、粗魯の努力を爲しつゝあり。現代の實行的常識、並びに勞働、法律、思潮、宗教等が取りつゝある功利的方向は、貌列嶺精神ブリテンの自らに備へたる靈能なり。佛國の感化は、現代文物の一要素を成す。されど、いまだ以て、最も健全なる英人の影響と匹敵するに足らず。米國は、單に新しき境遇に於て、英人の天才を繼承し、多少これを改めて好都合と爲せるに過ぎず。

わが米人の書庫を充たせる書籍の何たるかを見よ。吾人の讀む書籍は、傳記も、

(48)

戯曲も、小説も、その形式の如何を問はず、盡く、尙未だ英人の歴史にして、又その風習なるを免れず。この故に、ある賢き英人は、曾て余に向つて曰へらく『卿等が吾人に版權を許すまでは、吾人、卿等を教導すべし』と。

然れども、吾人は、英國の社會的乃至道德的評價を發すに方り、かの州奉行が、その地方全體を動搖せしめ、従つて、何人も利害の關係を有する如き事件に就いて陪審官を抜くと異ならざる困難に會すべし。官吏も、陪審官も、判事も、各何れかの黨派に屬す。英國は、總ての國民に、その文明、智能、及び趣味を移植せり。故に、この英國的要素の横恣と先入とを排せんと欲する、慎重の人は、これを極東、極西、古希臘、東邦諸國の文明、就中理想の標準と比較するの手段を假らざるべからず。英國的形式は、不羈獨立の精神をして、必ずや、含忍する能はざらしむ。乃ち單にこの感情を假る如きも、棄つべきものにあらず。

これを外にするも、吾人若し倫敦を訪はんか、今の時は、最上の時の如し。ある種の標徴も、その最高點に達したるを示せり。或は曰く、英人はこの數年來吾人に影響を與ふる事稍少しと。従つて、英國の勢力は、正に絶巔に達し、日至點に入り、或は既に傾きつゝありとの印象を見る。

人既に英國に入るや、そのウエールスを加へて、尙わがゼオルジャ州より大ならざるに拘らず、この小さき國土も、倏ち錯視に依つて、一大帝國の廣袤に擴大すべし。數限りなき個々の事物、町と都會と寺院と城と輪奐壯麗の第宅との密集せる連續、許多の力強き商店及び會社、軍隊の威力と光華、富みて著名なる人民の群衆、奴婢と妝飾——これ等は總て眼を奪ひて、瞬時もこれを休息せしめず、無盡藏の富と豪華の印象を以て、あらゆる際限を掩護す。

余は、この彼も此も残らず見ん事を要すと、性急に迫る所の一切の強請に答へて曰ふ、——然り、審に英國を見んと欲せば、一百年の歲月を要すと。何也、その告ぐる所は、倫敦に於けるサー・ジョン・ソーン博物館の眞價にして、その能く包

(47)

(48)

装せられ、保存せらるると云へるは、即ち英國の眞價に外ならず。それは隈より隈まで、都市、堂塔、別墅、宮殿、病院、救貧院を以て填充せらるればなり。歴史上には、大古の大石壁コロンネより、今日のヨークの御堂に至るまで、悠々たる年譜を経たり。されど、その中間一切の徑路は、現にこの何物をも保存する島に於て、盡くこれを尋ぬるを得べし。

英國の地は、眞に異常の完美を有す。その氣候は、緯度の割合よりも暖き事數度にして、暑からず、又寒からず。従つて、人の勞働し得ざる時は、一年を通じて、一時間もある事なし。英國は、冬といふものを知らず、唯米國マサチューセツツ州に於ける十一月頃の日あるのみ。こは人間の體力を消耗せしめずして、却つてその身體に能ふ限りの發育を許す溫度なり。チャーレス二世曰く、『こは海外の客を招き、他國に比して、一年には一層多くの日を、一日には一層多くの時間を過さしむ』と。然り而して、英國は勞働國として、木材を除く外、あらゆる資料を

具備す。雨は絶間なく降注ぎて——ある地方に於ては潮の干満に伴ふて來り——無數の河流を充たし、農産をその最大極度に揚ぐ。英國は多量の水を有し、多量の石材を有し、多量の陶土を有し、多量の石炭を有し、多量の鹽を有し、多量の鐵を有す。その陸は、自然のままに狩獵の獲物に富み、廣漠たる叢林と草原とは、鶉、松雞、山鵝の類を以て填塞し、その海草は水禽の爲めに騒然たり。河流も、沿海も、夥しく魚類を産し、富人の爲めには鮭あり、貧者の爲めには鰻あり。此方の湖には、青魚數限りなく群をなし、ある季節に際しては、その地方の人民をして、湖水は三分の一水となり、他の三分一魚となると言はしむるに至る。

この工業的便益に對する唯一の缺陷は、その空の暗きことなり。晝も夜も、餘りに同一の色に近し。従つて、書を讀み、字を書かんが爲めには、いたく眼を勞せざるべからず。これに加ふるに石炭の烟を以てす。工業市に於ては、微細なる烟煤、日を晦くし、雪白の羊を黧黒の羊となし、人の唾液を變色し、空氣を汚染

(49)

(50)

し、多くの樹木を戕毒し、紀念碑その他建築物を蝕壞す。

倫敦の霧に至つては、この暗澹たる空をして、更に愈々暗澹たらしむるもの、時に、かの英國才子の警句、『晴天には烟突を仰視し、天氣悪ければ、これを下瞰す』の眞實なるを證す。リヴァプールの一紳士は、余に告げて、その客間に爐火を要せざるは、一年間僅に一日に過ぎざるを認めたりと云へり。されど、國內に於ける無量の石炭消費は、一般の氣候を和ぐる上に効果ありとの籍口も無きにあらず。

人工的氣候に劣らざるは、人工的位置なり。英國は、その形、宛も一隻の船に似たり。而して若しこれを船とすれば、その最も老練なる船長と雖も、これ以上に思慮深き、或は有效なる位置に、これを齎し、或は碇泊せしむる能はざるべし。

サー・ジョージ・ハーシェル曰へらく『倫敦は地球の中心なり』と。これ、商業國民が、商人の所謂「好き場所」を占めたる也。古のヴェニス人は、ヴェニスの地が極と赤

道との中央なる、四十五度の所に在りと云へる諛讃を喜び、これを以て恰も絶對的中心なる如く思惟したり。上古、希臘人は、地球を一個の動物となす得意の寓話製作法に従つて、デルヒの神域をその臍と想像したり。猶太人は聖地ゼルサレムを中心と信じき。余は曾て費府の都が、雅典、羅馬、及び倫敦と同一溫度帯に在り、従つて、推理に依りて、同一の帝國帯に在る事を實示せん爲めに工夫せられし地圖を見たり。こは愛國の熱情に富める費府人の描く所に係り、その説明の下に、チェストナット街の住民、喜んでこれを點檢せしが、次にチャイレストンに搬ばれ、ニー・オルレアン、ボストン等に搬ばるゝに及んでは、遂にその聰明なる學者の信用を得るに失敗したりと云。

(51)
されど、英國は歐洲の側に碇泊し、正しく現世界の心臟部に位す。其海は、羅馬の詩人ヴァーギルの有名なる句に従へば、慙むべき英人を全然世界より除外せるものなれども、實は他のあらゆる國民に對する結婚の指環なりき。書物の中には

(52)

記されざる、——たい地層の中にのみ書かれたる——その幸多き日、獨乙の海の波濤は、ケントとコーンウォールとを佛蘭西に結付けたる古き地峽をば、一氣に押崩して、長さ八百哩、幅は出入不定にして或は三百哩に達する、一個の島を切取ると共に、この歐洲の一斷片に、永劫犯すべからざる海の城壁を與へたりき。

この國土は、あらゆる國民勢力の種子を饒に含みて、獨立に充分なる廣袤を有し、大陸の收穫を望み得るほど、近きと共に、その海峡の極めて暴れ易きが爲めに、これを横斷する者は、必らず熟練の船乗りならざるべからざるばとに、避し。米國と、歐洲と、亞細亞とが、現在のまゝにあらん限り、英人は地球上嚴密に最高の商業的位置を占むべく、従つて、その製造せる所の貨物は、盡くこれを販賣すべき市場を有す。而して、かゝる利益を實際に收むる爲め、テームス河は英帝國の中心より海に向つて、その廣濶なる放水口を鑿り、斯くして、無數の船に、その航路と繫留所とを與へ、百般の便宜を商業に供せり。これ即ち船渠、倉庫、解

船等を以て、巧に且つ有效に臨水の土地を利用する、英國人民の要求せし所のもの。曾てゼームス一世、倫敦市を罰せんとの目的を以て、遷都を宣言するや、市長はこれに答へて曰く『陛下假令御座を他所に移さるゝとも、冀くはテームス河を民等に殘されん事を』と。

土地表面の變化多き點に於て、ブリットンは歐洲の縮圖と云ふべし。平原あり、森林あり、沼あり、河あり、海岸あり、コーンウォールには鑛坑あり、マトロックとダービー州には洞窟あり、ダヴデルには佳絶の風景あり、トル灣には佳絶の眺望あり、蘇國には高原地方あり、ウェールスには高山帶あり、ウエストモアランド及びカムバールの袖珍、瑞西は、その湖と山嶽と、並びに眼中をみたし、想像を縦にするに充分なる大さを有す。こは小にして便利なる國民なり。フォンタネル惟らく、自然は時に多少の矯飾を爲すと。而して、この技巧家の國民は、極めて著しき技巧的整全を有し、或は初めより工業市バーミンガムの大なるもの

(53)

(54)

を丹精せんとの意匠ありしかを想はしむ。自然は深思熟慮の後、謂つて曰く『わが羅馬人は既に去れり。余はわが新しき帝國を建てんが爲め、徹頭徹尾男性的にして、野獸の氣力を有する、粗暴の人種を擇ぶべし。余は粗暴極まる男子の競争を怠まず。水牛をして水牛を撞かしめよ、而してその草原を最も強きものに與へよ。何也、余は最良の意志と筋力とを必要とする仕事を有すればなり。勁烈にして尙度を踰えざる北風は、吹いてその意志を活かし、且つ鋭からしめざるべからず。海はこの民を他の國民より離隔し、これを打つて猛烈なる國民性を鍛上げざるべからず。そは又あらゆる方面に港を與へざるべからず。長年月の間、余は貧困と、邊疆の戦と、航海業と、海上の危険と、及び獲物の刺戟とを以て、彼等を奔命に疲らしめん。そは一個の島ならん、——大に過ぎず、人口多きに過ぎず、大なる市場を填塞して、互に苦痛を醸す如き憂なく、却つて歐洲その他諸大陸の大さと適當の比例を有するもの』と。

その收穫、その製造品、その金銭の放射に伴ひて、その人文的感化も亦放射せざるを得ず。かゝる地理的中心性に對して、奇なる一致とも稱すべきは、精神的中心性なり。サミュエル・スウェーデンボルグは、これを英人の特質に歸して曰く『何となれば、英國民中、その俊秀なる者は、内に智慧の光を含みて、あらゆる基督教徒の中心に坐すればなり。この事實は著しく明に靈性の世界に現る。この光は彼等が言論の自由、従つて思想の自由より取る所なり』と。

第四章 人 種

(55)

ある才氣鋭き解剖學者が、書を著して論證したる所に依れば、人種は決して滅亡するものにあらず、されど國民は柔軟なる政治上の産物にして、容易に變化し、或は絶滅すべしと。されど、この著者はわが假定せる人種の、理想或は形而上的必然性を闡明するに依つて、その人種を必然的法則の上に置くことをなさず、又、

(56)

他方に於ても、嚴密に現存の人種を數へて、眞の限界を定めず、従つて精細の一點と、其説の普遍的證左を缺く。同一の人種中に在りても、極端に相異なる二人を取れば、狼の抱狗こいぬに於ける如きものあり。されど、個々の差異は、漸次に推移りて、殆んど認識に上らざるが故に、何人も一人種の始まるどころ、若くはその終るところに、判然たる區劃を設くる能はず。爲めに、その計算は人に依つて異なり。ブルーメンバッハは、五人種を挙げ、フンボルトは三人種を算す。頃日、わが國の探検隊に加はりて、自ら地球上のあらゆる人民を目撃したりと考ふるピツケリング氏に至つては、これが十一を主張す。

英帝國は、二億二千二百萬の人口——蓋し、世界人口の五分一——と、五百萬方哩の領土をたもつと算せらる。これ丈を英人の支配せる範圍とす。その中、凡そ四千萬人は、恐くは貌列嶺系統プロットンに屬すべし。これに加ふるに、亞米利加合衆國を以てせよ。こは三百萬方哩の領土に、奴隸を除いて、二千萬の人口を有し、そ

の中他國人の血統も少からずと雖も、皆急速に同化せられつゝあるが故に、英人の子孫にして、その國語を操る者は、合計六千萬人に上り、その支配する所、二億四千五百萬人に及ぶ。

大貌列嶺民勢調査の特に臣民に限れるは、本國諸州に於て、二千七百五十萬の人口を算す。この民勢調査をして重要ならしむる要素は、これを構成する個人の品質なり。彼等は自由なる力強き人間にして、生命の安全なる國家に住み、最高の價値を發揮せり。彼等は現下の時代に傾向を與ふ。而して、こは偶然に依らず、多數に依らず、單にその品性に依り、その個人的才幹ある人士の若干數に依るのみ。英人の天才を有する事は否認せらる。そは如何にもあれ、勢力洪博の人間は、英國の土より生出で、最も大切なる發明をなし、或はこれを應用したり。彼等は、健全の身體を具へ、戰爭に於ても、勞働に於ても、この上なき忍耐を有す。この人種の繁殖力は、今日迄既に世界の大部分に殖民するに至りしが、彼等が、

(57)

一八五二年には、一日千人以上と計上せられたる、莫大の海外渡航者を、如何に利用し得るかは、尙今後の問題として残り。彼等は同化力を有し、従つて、その屬領臣民の模倣する所となるのみならず、更に侵略的、傳道的にして、その技術と自由との版圖を恢弘す。彼等の法律は寛仁にして、その下に奴隸の存在を許さず。如何なる厭制の現るゝあるも、そは偶發的にして一時的なり。彼等の成功は急激若くは僥倖にあらず。これに反して、彼等は幾代の久しきに亘つて、恒心と静泰とを持續す。

この力は、彼等の人種に本くか、若くは他のある原因に由來するか。世人は血統或は人種の力を聞くを喜ぶ。何人も、自己の利福が、空氣、土地、海、若くは鐵坑、石坑の如き地方的富源、若くは法律、傳説、運命の如きものに歸せらるゝ能はずして、獨り優秀なる頭腦より來れりと知るを好む。何也、こは其名譽を一層個人的となせばなり。

(59)

吾人は、人種の理論に於て、稍かの生理學の原則の如きものを豫想す、骨と筋肉と重要器官とを問はず、苟も健全なる一個體の中に見出さるゝものは、總てその同族の同一局所に、若くはこれに接近して見出さると云へるは、是れ。従つて吾人は、祖先の有せし種々の精神的、道德的性質を、盡くその子孫に向つて期待す。人種に於て、利益を與ふるは、幅廣き肩にも、柔軟性にも、身長にもあらずして、機智をも包括する均齊なり。爰に初めて奇蹟と聲名とを生ず。爰に初めて、吾人は系圖を検せん事を思ひ、注意深く偉人の訓練を模倣す、——斯かる天稟の機才と、微妙なる思想と、豪健の睿智とを胚胎せし食物は何ぞ、哺育、學校、運動は何ぞと。アルフレッド大王、ロージャー・ベーコン、ウィリアム・オブ・ワイクハム、ウォーター・ローリ、ヒリップ・シドニ、アイザック・ニュートン、ウィリアム・シェイクスピア、ジョージ・チャプマン、フランシス・ベーコン、ジョージ・ハーバート、ヘンリー・ヴェーン等は、如何にしてこの地に生るゝに至りしか。彼等の精緻なる

性能を造りしは何物ぞ。そは空氣か、海か、或は血統か。何也、彼等がその同時代人の標本なるは疑ふべきにあらず。聽く耳は常に語る舌と密接して見出さる。如何なる天才も、その周圍の人間より求められざる、或は欺待せられざる所の事を、長く若くは屢語る能はざればなり。

印度に於ける幾千萬の生靈を、遙遠なる北歐洲の一島國に隸屬せしめたるものは、人種なり。然らずと言ふことを得べきか。世に稱せらるゝ如く、果してケルト族は總て羅馬教徒にして、權力の統一を愛し、索遜族は總て新教徒にして、代議主義を愛すとせば、人種の方も亦偉なりとせざるを得ず。人種は猶太人に在りては、管束的威力たり。彼等は、二千年來、いづれの地方に到るも、常に同一なる品性と職業とをたもてり。黒奴に在りては、人種は、戰慄すべき意味を有す。カナダの佛人は、全く母國との交通を絶たれしも、尙其國民性を保存せり。余は久しからざる前、圖らず、ミッソリー及びイリノイスの奥にて、タシタスの『獨乙人の

風習に就きて』を讀み、この際、ハルシニアン大森林に住みたる獨逸人と、わが米國森林地に於ける、是等諸州民との間に夥しき夥似點あるを發見しき。

されど、人種は、かくして無窮にその勢力を保たんと勉むるも、他の勢力の爲めに阻害せらるゝを免れず。文明は一種の試薬なり。古き特質を奪取す。今日の亞拉比亞人は、尙舊約聖書に現れたるファラオ王治下の亞拉比亞人なり。されど、今日の英人は、カシペラウナス或は第三世紀の詩人オッシュアンと、甚だ同じからず。何れの宗派も、各、その人相學を有す。メソヂスト派は、メソヂス派の顔を、クエーカー派はその派の顔は、尼は尼の顔を有す。英人は、容儀によつて國教違反者を指摘し得べし。商業、職業も各々、その皺條を顔面乃至體軀の上に刻む。英人の生活に於ける、一種の境遇も、これに劣らざる影響を與ふべし。曰く一身の自由、曰く食物の多量、曰く良好のエール酒、羊肉、曰く開かれたる市場即ち各種の勞力を償ふ高き賃銀、曰く才能及び熟練に與ふる多額の報酬、曰く島國生

(62)

活、即ち道徳的にして而も不遇なる才能に對する無量の機會及び門戸、曰く政治又は事業の爲めにする迅速の團結、曰く同盟罷工、曰く勞働又は戰爭に於ける勝利の習慣に本く自己優越の意識。而して優越に對する慾望は、これを味ふに従つて愈々増長す。

人種を控制する勢力を、この上に附加するは難からず。その主なる要素を信念とす。宇宙觀は、何れの國民に於ても、そのあらゆる制度を決定すと稱せらる。いかなる感化を、精神的又は道徳的性能に加ふるも、それは、他の特質と共に、その國民性を握ひ、國民の生活をして不都合なる妥愜たらしめずんばあらず。

畏るべき人種の法則も、尙免るゝ能はざる以上の如き制限は、更に他の制限を示唆す。これ、この法則が未だ充分の根據を有せざるに乗じて、根柢よりこれを覆さんとする所のものなり、吾人が見る如き人種の固定性、若くは不變易性は、以てこの脆弱なる人種的區別の永久なるを證する理由とするに足らず。何也、歴

(63)

史上の時期と稱するものも、大自然の活動する時間の連續に比すれば、畢竟一點に過ぎざればなり。博物學上の事實は、如何に微小且つ稀有にして、例へば菓物、動物種族の改善の如きものならんとも、悠久なる地的學時期の機會を得て發展すれば、一大勢力の價值を有す。矧んや、亦吾人は人種の純粹なるをかたる傳説を以て、個人又は國民の主我心に媚ふと雖も、あらゆる吾人の經驗は、これ雜多の人種が互に浸漸し、融合したる結果に外ならず。従つて、吾人は到るところに於て、奇なる暗合に逢着す。されば、吾人若し虎と狒々との痕跡を自己の身體に認め、又、人種の區別なるもの、甚だ固からずして、唯ある種の飛沫が、吾人を大洪水前の海より洗淨むるに過ぎざるを想はゞ、馬來人種とバプアン黒奴と、ケルト族と羅馬族と、索遜族と土耳其族と、互に混和せるを見て、毫も怪むを須るざるなり。

下等の有機體は單簡をきわめ、僅に一個の口を具ふるに過ぎざるあり。水母、

(64)

若くは直蟲のごとし。品等漸く上るに従つて、有機體はその複雑を加ふ。吾人は血統の純粹を誇れども、自然は接種の方法を愛す。小兒の顔は、その両親の顔を混じ、わが家の壁上に懸れる祖先の肖像より、そのある状態を取れり。最良の人種とは、最廣く關係せる人種に外ならず。而して航海は、世界的混種を助くるを以て、國民に取りて、最も有力なる誘掖者なりとす。

英人の複合的品性は、その混合的出生を洩露す。總て英人的なるものは、相隔絶し、相反對せる要素の混合なり。國語も混化せり。人名にも各種國民の名あり、——三種の國語、三種若くは四種の國民をふくめり、——思潮の中にも相對抗する數多の傾向あり、思索と實際的技能、活動的智力と死せる如き保守主義、世界に跨る企業と舊習墨守、侵略的自由及び寛厚なる法律と峻烈なる階級制度、戦争及び事業の爲に全世界の表面に散布せる人民と懷郷病者たる個人、——約言すれば、これ極端の國なり、——公爵と普通選舉論者、デュルルハムの僧正と、異教

徒なる裸體の苦力、——この國に於ては一として除外例を設くる事なくして稱讚し得る物無し。又一として、感歎なる稱讚の辯疏なくして、非難すべき物なし。

英國人民は同一の幹より出でたる如く見えす。されど、全體としては、これを派生したる何れの人種にも勝れり。又、彼等の由來を尋ねて其出生を看る事も容易にあらず。何人か、固有の名稱を以て、英國内にいかなる人種の住めるかを告げ得んや。何人か、彼等を歴史的に探求するを得んや。何人か、彼等を解剖的に、若くは心理的に吟味するを得んや。

(65)

人種の歴史的疑問に就いては、満足の解答を得ること能はざると共に、英人は、いかに論争の餘地ある族譜に出づるにせよ、余の現在見る所に依れば、明白一點の疑義を容れざる英人にして、自ら著しき特色を備へ、且つ他に於ても到底見るを得ざる人種なるを以て、余はその祖先として、何れの種族を擇ぶも、この問題は全く度外におきて不可なしと想像す。デフォーは忿怒の餘り叫んで曰へらく「英

(66)

人はあらゆる人種の汚泥なり』と。余は水と石灰と砂とが漆灰を成す如く、若干種の氣質が能く結合し、且つ能く按排せられたる反對性を含む時は、英人の如き神効顯然たる品性を造出することを信せんと欲す。要するに、注意すべきは、ある一地方より來れる、同一の素性の索遜、ジュート、フリシアン族等、一種若くは若干種の歴史にあらずして、是等諸種族全體の性情を編みたる花輪なり。或種の性情は英國の空と、その土に適す。そは或は八種、十種、或は二十種なるべし。是れ猶一百株の梨子樹の中にて、八株或は十株の樹がその園の土に適して、獨り榮え、他はこれに慍はずして枯死するが如きのみ。

英人の系統は、汎く多種多様の國民性に跨り、その變化に富める才能と品性とを開展する爲めには、海と陸との兩方面を要す。蓋し大洋はガルヴァニ電池の作用をなし、酸を一方の極に、アルカリを他の一極に集むる歟。英國は、その進歩派を亞米利加に、その保守派を倫敦に集むる傾向を有す。英民族中、スカンディナ

ヴィアン系統は、いつの時代にも、その母たる海洋の蹄々を聞き、貌列顛系統の血脈は、今尙その郷土に戀着す。

然り而して又、宛も人種以外の影響を除外せんと欲するものゝ如く、吾人が英人氣質を論ずるに方りて考ふるところの對象は、實際極めて狭少なる地方に限局すべし。この對象は、愛耳蘭を除き、蘇格蘭を除き、ウェールズを除き、遂に倫敦に集注す。すなはち倫敦に出入する、英人なり。倫敦のアカデミー展覽會に陳列さるゝ肖像、「ボンチ」誌に載する公の人物或は俱樂部の挿畫、店棚に出せる版畫等は、明白に英國的にして、米國的にあらず、又蘇國的にあらず、愛耳蘭的にあらず、是れ最も限られたる國民性なり。北の方、工業又は農業の殷盛なる地方に赴き、毫も旅行をなさざる人民を訪ひ、ヨーク州シテに赴き、蘇國に入れば、世界の英人は最早見るべからず。蘇國に於ては、看々容貌風采の華美を減じて、地方的摯實と尖利とを現し、田舎の貧窮が顯著となり、態度は粗野と變じ、學問ある人士

(67)

の間にも、尙不醇の訛りを聞くべし。愛耳蘭も英國と等しき氣候及び地味を有す。されど食物は少く、土地に對して正しき所有權なく、政治上の隸屬と、小作と、劣弱なる若くは適所を得ざる人種とを見る。

以上の如き系譜上の不審も、當に許さるべし。何也、英人の繁榮ほど、人間の種類てふものに依頼せる繁榮は他にあらざればなり。たゞ頑強、聰明の人民にして、初めてこの一小國土を大ならしむるを得べし。吾人は端艇或は快走船の競争に際し、船の構造略々匹敵せば、勝つものは人に在りと云ふ。最上の操艇者は、何れの船に乗るも、必ず勝たざるを得ず。

されど、かの連綿として絶えざる傳説に至つては、假令明瞭を缺き、且つその起源を寓話の中に隠せりとするも、これを考察するを愉快の業なりとす。傳説は、その脚場を得て、攪亂せらるゝを肯んせず。臺所の時計は、星年の計算に勝れり。吾人は、リンネウス氏の分類を用ゐるが如く、通俗的類目を用ゐざるべからざる

も、これを便宜の爲とすべく、精確なる最後の標準と爲すを得ず。然らずんば、ある一民族の固定せる品質も、新なる人類學者に依つて、正にこれと反對せる種族の特色とせられたる時、忽ち混雜に逢ふを免れざればなり。

余は顯著なる英人の典型を、數多く發見したり。美しく肉附よき顔に、紅色を帯び、その顔の形の同じき事、宛ら骸子の如くにして、一種の強き島國的の訛言と聲調とを有する、強壯の人は、即ち諾曼型に屬するもの、かゝる體質に特有の快活を具ふ。他は、その容貌、或は體軀に現れたる點に於て、或は米人とも云ふべきもの、その言語に特色なく、その思想に檢束なき事、共に前者に比して甚しき相違あり。吾人は、これを索遜と呼ぶべし。次に羅馬人あり。その薄黒き顔色を、この血統上の三位一體、或は四位一體の中に混す。

1。傳説の源となりて、その材料を給する民族の重なるものに二種あり。第一

(70)

を世界最古の人種たるケルト族となす。人種の或るものは、脱落的なり、又は経過的なり。希臘人は今何處にありや。エトルリアンはいづくに、はた羅馬人はいづくに？ひとり、ケルト民族は、ふるき家柄にして、その始を知らず、その終は更に愈々遠からん。蓋し、彼等は忍耐強く、且つ繁殖力に富めば也。彼等は貌列顛に移住し、その海と山とに、詩にして、同時に自然のきよき聲をうつせる、名を與へたり。彼等は特別の待遇を以て、歐洲古代の記録のうちに保留せらる。彼等は横暴なる封建的守産法を保たずして農夫自ら土地を所有しき。彼等是一種のアルファベットと、星學と、僧侶の修養と、崇嚴なる教條を有しき。彼等はかくれたる不確定の天才を有す。彼等は中世時代の最善なる通俗文學として、メルリンの歌と、アーサーのやさしく趣深き神話とをつくりき。

2。英人は、主としては獨乙人より出づ。これ羅馬人が二百十年を経て、征服し難しとなし、もの、——長き後の結果より見れば、寧ろ到底征服の不可能なる

民族にして、彼等については、古の帝國中、この民族に手を出して、之を悔いざる者なしとの流言ありき。

3、シャーレマン大帝、一日、ナーボンニス、ゴール族の町に駕を駐め、北人の船の一隊が、地中海を巡航せるを、窓より眺めたり。彼等の船は、帝の坐せるこの町の港口にさへ入來りて、少からざる恐慌を生せしめ、急にその軍船に人を配し、戦備を調へしむるに至りき。彼等の再び外海に向つて去るや、帝はその眼に涙を浮べて、やゝ久しくこれを目送したる後、喟然として嘆じていはく「朕は、彼等が朕の子孫に災をなさんことを思へば、悲みにたえず」と。かゝる豪邁なる帝王の涙にも道理はありし也。船を造り、その索具を發明したる、——索條、帆、羅針盤、活脚をも、——港の内外における仕業をも——人民は、船以上のものを獲得したり。彼等をして武裝せしめよ、いづれの海岸も彼等の意のまゝのみ。何となれば、彼等もしその碇泊せるところに於て、衆寡敵せずと見れば、自己の優

(71)

(72)

勢を保たんが爲めには、たゞ一二哩だけ沖に出づれば足れり。奈翁の戦術、即ち攻撃點に向つて勢力を集中するの策は、我好める場所に戦場を移し得る彼等の、常に使用するところならざるべからず。言ふまでもなく、彼等は陸上の人間に比し、一層勝れたる地點より戦場に入るものなり。而して岸において敵と交戦するに方りて、この上もなき退却の便宜を有す。各地の海岸漸くひらけて、海賊が引きあはざる業となるや、彼等は同一の熟練と勇氣とを以て直に商業に従事したり。

スノッロ・スタールソンの集蒐したる『ハイムスクリングラ』(ハイムスクリングラはインゲ氏によつて英譯せらる)即ち諾威諸王の『古史』は、英國史の『イリアッド』及び『オデッセイ』なり。その個性描寫も、ホーマーのこの作と同じく著しく特相を現せり。『古史』はスバルタの如く王を戴ける共和國を記す。政府も市民の権力の前には姿を失ふ。諾威に於ては、波斯の如く多數の人民が一人の王を大にせんが爲めに、或は戦ひ、

(73)

或は亡滅することなく、却つて登場の俳優は、奴隸又は地主にして、是等は盡く王の友として、其名を記され、個人的ならびに家系的に説明せらる。稀疎なる人口が、この大なる價值を各人に許したる也。個人は屢、その容貌の美しさを認められ、此特色のみにても、この物語をして愈、英人種に近接せしむに足れり。次には堅實なる物質的利害が、彼等を支配す。そは英人の理解力にとりては、極めて大切な要素にして、實價と土地とをつなぐ彼等の連想は論理的なり。『古史』の英雄は、南歐の騎士にあらず。佛蘭西又は西班牙の虚榮心は、彼等を腐敗せしめざりき。彼等は實力を有する農夫にして、亂世のために、自らわが財産を護ることを學びたり。彼等は武器をそなへて、何の憚るところもなくこれを使用したるが、決して武士道の爲めにせしにあらず、たゞ我農場の爲めにせしのみ。彼等は著しく野人の技に長じ、殆んど水陸兩棲的に波あらし海岸に住み、その食物を半ば海より、半ば陸より、得たり。彼等は牝牛の群を有し、麥芽、小麥、燻肉、バター、

(74)

チーズを有しき。彼等は峽江に魚を漁し、麋鹿を狩りき。かゝる農夫の間の王なれば、勢力定まらず、時としては、その權威一州の長官を踰えず。王はあたかも我米國のある地方における、冬季だけの小學教師の如く、こゝに一週、かしこに一週、次ぎにまた隣りの村に二週と、交るゝ農家に寄食したり。王はこれを客に行くと呼しき。而して是れ實に貧しき國にて、多くの臣下をもてる貧しき王が生活する唯一の方法にして、この間、王はわが田園をすてゝ、その貢租を集むるために、國內をめぐる也。

是等の北人は概して優秀なる人間にして、よく道理を解し、志堅く、談話に長じ、動作敏速なりき。されど彼等は不思議に殺人を嗜み、その人間としての第一目的は、他人を屠るか、若くは自ら屠らるゝに在りき。機、鋏、魚叉、鐵挺、泥炭刀、草搔の類は、そのいみじく虐殺の用に適するが爲めに、愈々彼等の重んずるところとなりき。二人の王が、食後、慰みのために、その劔を互に對手の身に

(75)

突通すことあり。イングフ王とアルフ王とのごとし。他の二人は、朝、馬にのりて遊山にいで、手近に武器なきを見るや、各、わが馬の轡より尖鐵をはづし、これを揮つて、互に頭を碎くべし。アルリック王とエリック王との如し。天幕の繩、又は外套の紐を見れば、輒ち何人を絞殺せんと欲す、妻か、夫か、王ならば殊によし。農夫にして若し草搔ほどの利器だに携へんか、彼はこれを王の頭に打ちこむべし。ダック王はかくして殺されたり。インギリアルド王は、六人の王を一室に招じて、酒に酔はしめたる後、これを焚殺し、これをば無上の愉快と考へたりき。古來、北人のごとく生命に囁廢し、猛烈にこれを棄てんと欲したる惑むべき紳士はなかりき。彼等はもし他人と争鬪をひらく能はざれば、進んで牡牛の角にかゝりて快く刺貫かるゝことエジルの如く、或は山崩れに投じて死することオヌンド王の如し。オーデインは瑞典にて、床の上に死したり。されど老いて死するは一般に不幸と考へられき。瑞典のヘーク王は、戰場にて力限り敵を斬りま

(76)

くりし後、その戦艦に味方の屍と、その武器とを積み、舵を固定し、帆を張りて、これを沖に出さんことを命じ、たゞ一人これに乗りて、火を船に放ち、泰然として甲板に横はりき。風は陸より吹き、船は鮮なる紅の炎をまいて、小島の間をくさりつゝ、外海へと駛りいでぬ。かくてヘーク王はその望みのごとき最後を遂げたるなり。

『古史』の初期は、血なまぐさく、海賊的なり。後期に至れば、禮容甚だ備はれるを見る。十字軍士たるシグアード王と、其兄アイスタイン王とが、互にその人となりを推讃したる對話のごときは、歴史も多く示さうるところたり、——一人は軍士にして、他の一人は平和の藝術なる愛好者なりき。

されど北人の歴史を読むものは、動物的氣力に本ける遠き昔の賠償を念頭に留め、以て我感情を冷酷となさるべからず。太古の化石世界は、混沌の時代を整理する第一歩が、蛭蟻其他の巨大なる、怖るべき動物に委托せられし事實を示す如

く、新しき人文の基礎は、最も殘忍粗野なる人間の手をかりて、据えられざるべからざりしなり。

北人の佛國より英國に入來りしときは、その百六十年前佛國に入りしときよりも、愈、兇惡を増したりき。彼等は既にその國語を失ひて、ローマンス語及びゴール人の用ゐる鄙しき拉丁語を學び、之れと共に、その國語にて呼ばるゝ一切の惡德を學びたりき。北人の英國征服は、歴史の上に「悲哀の記憶」といへる名を留む。ヘスチングスに上陸したる二千の北人は、盡く盜賊なりき。是等「上院議員」の始祖は、貪慾暴戾の龍騎兵にして、貪慾暴戾の海賊の子なりき。彼等は皆同一の兇徒にして、その搬び得るものは殘らず奪ひとり、火を放ち、劫掠し、強姦し、呵責し、屠戮し、遂に苟も英國的と稱せらるべきものは、盡く破滅の淵に瀕するに至りき。されど、舊物と豪富とは人をして錯視せしむ。今の清楚にして威儀堂堂たる人々は、競ふてその家系の是等不淨の盜賊に出づることを誇となしつゝあ

(77)

(78)

り。祖先の盜賊は各彼等に似たる豕、山羊、小狗、豹、狼、蛇等を取りて、其標號となし、が、是れ今の貴公子の徒よりも遙かによく自己の價值を知るものと謂ふべし。

英國は十世紀及び十二世紀の間に、丁抹人と北人とに降服し、この剛勇なる人民のあらゆる精神をうけいる、器となりき。諾威、瑞典、及び丁抹はかゝる遠征の爲めに、絶えずその精銳を海外に出したる結果、あたかも若木わかぎの間に多量の實を生じたる果樹の如く、國力いたく涸渴して、以來世界の二等國となれり。人種の根本勢力が他に移りて、諾威ノルウェーは空虚となりき。オラフ王曰く「余の父ハロルド王が西の方英國に赴くや、諾威ノルウェーの選良これに隨ひて去りき。ために諾威は一時に空しくなり、これより後かゝる人間は國內に跡を絶ち、殊に聰明にして剛膽なること、ハロルド王の如き指揮者を見ず」と。

一八〇一年、英國がネルソンを送りて、瑞典海峡の丁抹要塞を砲撃せしめ、次

ぎに一八〇七年カスカート卿が、コッペンハーゲンにおいて、その港内に碇泊せる丁抹の艦隊を全部捕獲し、且つその造兵廠より残らず武器彈藥を奪ひて、これを英に携へかへりしは、往年の侵略に對しての緩漫なる轍返なりき。曾て諾威、瑞典、丁抹三國の君主が、常に會見の場所となし、コングハルの町は、今や、英國の一私人が、獵場として租借するところとなれり。

初めて北方より英國に到着したる一隻の船の海賊を、刈り、梳り、香水をかけた、最も尊嚴なるガーター貴族となすには幾多の星霜を要したりき。されど、今日の裝飾はその一點一劃といへども、その源を北人の船に發せざるはなし。この武力を變じて、禮法とに宗教とになすには、今後尙ほ充分の時あるべし。盲人の子も盲人にあらざるは醫學上の事實なり。惡漢の子も健全の良心を有す。卑屈にして憶病なる小兒も、成年に達すれば、眞摯寛仁の人間となる事珍らしからず。以來幾多の平和なる時代を経たりと雖も、オーディン神の痕跡はいまだ全く消失

(79)

(80)

するに至らず。たとへば虎の發達したる身體構造の痕跡が、今尙高加索人カウカサスの身に認めらるものあるが如し。英國民の身體は強靱にして酸性を帯び、布教と文化の幾世紀も、以てこれを甘美ならしむる能はず。アルフィエリ曰く『伊太利の罪惡は、その民族の優秀なる證據なり』と。吾人はまた英國についても、此時計は金剛石の小片の上に運轉すと言ふを得べし。教化をうけざる英人は野獸の如き國民なり。その歴史に記録されたる犯罪には、冷酷なる惡意を實行するに望ましき方法をば唯一つも遺さず。英人の感情に貴きは、立派なる立合の勝負なり。下層社會の風習の野獸的なるは、拳闘、熊に、犬を與ふる娛樂、闘雞、死刑の嗜好及び街上に於て容易に鬭争を惹起するの風に現れ、こは總ての階級を通じて英人一般の喜ぶところたり。倫敦市中の藥物賣子は、卑怯を賤みて曰く『吾人は能く拳を使はざるべからず、吾人はみな拳を揮ふを便利とす』と。小學校は腕力萬能の熊の檻カケなりと非難せられ、又この故を以て人民に愛せらる。下級生驅使フアッギングも同一の性質

(81)

より出でたる特色なり。メドウィンは、その著『シェレイ傳』の中に、陸軍のある學校にてその學生等相集り、一人の青年を雪達磨の中に埋めて、これを彼の室に置きたるまゝ禮拜堂に出で、遂にその青年をして、手足を失ひて生涯不具たらしめし事あるを記せり。英人は今尙公役を強制する罰法、甲板上の笞刑、軍隊の笞刑、及び學校の笞刑を保存す。軍隊教育の峻酷を極むるや、笞刑を申渡されたる兵卒は、往々その宣告の死刑に代へられんことを祈るに至るといふ。笞刑は既に西歐諸國の陸軍に跡を絶ちたるも、英國に於ては、ウエルリントン公の允許を以て、尙行はる、也。夫がその妻を賣るの權利は、今日に至つて尙保存せらる。猶太人は王家及び人民が迫害を行ふべき最好の犠牲なり。ヘンリー三世はその借金借金の抵當として、英國内の猶太人を總てその弟コーンウォールコーンウォールの伯爵に委ねたりき。罪囚の慘刑及び拷問についての論は、甚だ振はざりき。刑法につきて、サー・サミュエル・ロミリーは曰く『余は各國々民の法典を調査したるに、我英國最も惡し。英

國の刑法は食人民族のものと言ふも不可なし』と。前期議會にて、下院は、監獄内に行はるゝ笞刑及び拷問の詳細を傾聴したり。

前に述べたる如き地理的關係を有する此島國が、剛健なる一民族の占據するところとなるや、彼等は到底世界の水夫となり、原動力とならざる能はざりき。彼等は幼時より水に潜り、魚の如く泳ぎ、小艇を玩具となしたり。造船税の當否が裁判上の事件となるや、判官はこれを法律に愜へるものとして論じて曰く『英國は島國なるが故に、その中央に位する諸州といへども、皆な海岸と見做すべし』と。而してフラーはこれに附加して『四方陸に圍まるゝ諸郡區の精神も、その住民を驅つて、海上の業務に熟達せしむ』と。北人征服の昔に於てさへ、早く既に、英國の富を説明する爲に、其商人の諸外國と貿易を營みし事を擧げたる者ありき。英人は、今日に於ても、その體軀極めて強壯にして、忍耐の力に富む。他國の人間を彼等の傍にをけば、疲せて丈低く、且つ不健全の觀を呈す。彼等はわが米

人よりも身體大なり。余は、不用意に街上より百人の英人を集めきたり、その全重量を同數の米人と比較するときは、英人の方が或は四分一位の重かるべしと想像す。されど、余はその骨格が特に大なるにあらずと聞けり。彼等は圓く肥え、紅色を帯び、且つ美しく、少くとも、上半身だけは形整ひ、而して一般に頑強にして力強き體格を成す傾あり。余はこの強壯を、初めてリヴァプールに上陸したるときに認めたり。門番、荷馬車夫、御者、衛卒等皆然り、——いかにも丈夫らしく、重々しく、長老めきたる風采にて、その衣裝、態度これにかなふ。今や米人は舊き邸宅に入りて、わが周圍に伯父、伯母、祖父母を見たり。彼の育兒房の煙突の瓦に描かれたる繪は、即ちこれらの人々を描けるなりき。こゝに英人は、曾ていたく彼の心を惹きたると同じ服裝と態度とをなせり。

英人がいたく横様に肥ゆるは、その體質の罪なり。婦人もこの不利益を有す、——丈高く、華奢にて、すらりとせる姿少く、大抵は發達を害せられて、肥矮な

り。佛人はいふ、英國の婦人は二本の左手をもつと。されど、いづれの時代にも、彼等は美しき男女なり。倫敦のテムブル會堂にある、脚を組み坐せる十字軍士の銅像、ウオーセスター及びサリスベリー寺院にある銅像は、いづれも七百年前のものなるが、今の英國の端麗なる青年と全く同じ型に屬し、同じ性質の美と、誠實の心、勇氣及び品位を調和したる表情と、大人に残れる淨らかなる青年の面影とを以て、人目を樂ましむ。かゝる顔は、日毎に倫敦市中にて見らるゝものなり。

スカンデナヴィア人の兩民種は、何れも其美貌を以て著れたり。紀元前六百年のころ、聖グレゴリーが羅馬にて見たりといふ美しき捕虜の物語にも劣らざるは、それより五百年の後、北人の史家が、年若き英人の捕虜の美と、その長く垂れたる髪を嘆賞したる一條なり。そは兎も角、『ハイムスクリングラ』は屢々その英雄の美貌を記せり。この美しき人種が、いかに人道を表示し、又いかに精神的、道德

的勢力の手段を表示せるかを想へば、——それが帝國を成就せるは、新に精美なる時代を劃するもの、茲に至つて、古き頑強の勢力は、遂には人道に屈服し、是より後その本分に從つて力役に從ふべし。

英人の顔は、決斷及び膽量と、優しき容色、碧の眼、乃至ゆるやかにして華々しき姿とを調和せり。従つて眞實を愛する情を見、従つて物に感激し易き傾向を見、精緻なる知覺力を見、詩的想像を見る。打解けたる面貌に、誠實の意味をやどし、家庭的にして、愛情深き、索邇の美男子は、人肉を食ひ、宗教裁判の迫害をなし、或は虐殺を行ふべき人種にあらず。彼等は法律の爲めに、法律にかなへる商業の爲めに、禮儀、結婚、小兒の純潔、大學、教會、慈善、植民の爲めに生れたる者なり。

彼等は好戰的といふべからず、君子的といふべし。戰終りて、假面を去れば、彼等をして婦人の如く溫柔ならしむる、優しき家庭的の趣味を見る。かゝる異なる

性情の調和を語れるものは、『美人と獣』と名くるその國民的傳説にして、更に溯れば、希臘の傳説『ヘルマフロディト』あり。男女の兩性は英人の心情において共存す。余は英國最近の一小説家が、その作中の女主人公を形容して、『彼女はその慄悍なると同じく柔和なり。柔和なると同じく慄悍なり』と云へる語を假りて、海と植民の女王なる、貌列顛に與へんと欲す。英人は同一の人間に、勇氣と溫柔との兩極端を結合する矛盾を好むものなり。ネルソンは、トラファールの海戦にて、將に死せんとする時、コーリングウッドに愛情の詞を與へ、小兒の眠に就かんとする際の如く、『乞ふ、接吻せよ』と云いて、瞑目しき。ネルソンの同僚、コーリングウッドも、亦極めて愛情深く、家庭的なる人なりき。ロドニイ大將に至りてはその容姿、殆んど華奢、纖弱とも云ふべく、又、彼自身もその甚しく恐怖に感じ易きことを明言したり。たゞ彼は名譽と國家に對する義務とを思ひて、これに打克ちたるのみ。クラレンドン曰く、バッキンガムの公爵は餘りに濃厚感歎な

(87)

るより、その近臣のうちに、これを侮らんとするものを生せしが、遂にこの濃厚と感歎とが、全く極度の猛烈なる決心を覆へる假面に過ぎざるを悟りきと。又、近きころ、サー・ゼームス・バリイは、サー・ジョン・フランクリンに就いて曰く、『彼若しウエルリントン海峡の開けるを見れば、必らずこれを探窮したるならん。何となれば、彼は決して危険の前に頭を回さざる人なればなり。されど彼はまた一匹の蚊をも掃ふことを難んずる優しさを有す』と。英國に於ては、剪徑の如きものにも、かゝる美德ありと稱せられ、ロビン・フッドは『此上なく優しき盜賊』と傳へらる。されど、英人はまた其猛犬の何處に伏するかを知る。クロムウエル、ブレーク、マールボロー、チャタム、ネルソン、及びウエルリントンは、これに戯る、能はず。社會の下層には野獸的氣力あり。埠頭、闘雞場等には殺伐殘忍あり。シーアデッチ、セズン・ダイアルス、スピットルフィールド等には、牡牛の如き菓物賣子あり。いかにして是等のものを起たしむべきかは、英人の熟知するところな

り。
 彼等は身體最も強壯にして、中年老年に達するも、これを失ふことなし。老人と雖も、薔薇の如き紅色を帯びて、依然として秀麗なり。清らかなる皮膚と桃花の如き面と、よく揃ひたる齒とは、國內到るところに見るべし。彼等は多量の滋味ある食物を取り、傭工といへども、水芹みづたがらしにて生活する能はず。一流の勞働者に至つては、牛肉、羊肉、小麥麵麩、麥酒の類を、普通に使用する。食物の良好なることは、下流人民が國民的に自負するところにして、彼等はその諷刺畫のうち、佛人を貧しくして餓ゑたる子供の如く描けり。タシタスが、その當時、既に獨乙人の間に英人の造りし麥酒の用ゐられたることを認めたるは、亦一奇といふべし。『彼等は大麥又は小麥を腐らして稍葡萄酒に似たる一種の飲料を製す』と。ヘンリー八世のとき、クランスベンチ裁判所長のフォーテスキューは謂つて曰く『英國の民は水を飲まず。これを用ゐるは、或場合に限る。即ち、宗教上の目的の爲

めにし、且つ之を苦行くぎやうとして勤むるなり』と。極度の貧も、禁慾的苦行も、英國において、いまだ冷水を飲むまでには至らざりしが如し。考古學者ウッドは、英國ゼスイト派の長老レシイの、赤貧骨に徹する状態を記すに方りても、尙ほその麥酒を用ゐたることを否認せざりき。曰く『彼の臥床は茅屋の屋根裏に設けられ、梯子を攀ぢてこれに連す。彼の食物は粗悪なりき。彼の飲料は一ガロンペニー一片を價せしのみ』と。

(89)
 彼等は他の國民に比して、一層旺盛なる體力を有す。彼等は、ヘンリー・クォートルと同じく、多くの運動は精神を高むる基礎となりて、他に勝る所の性質を與ふるものと考へ、又は亞拉比亞人と同じく、狩獵に費す日數は、生涯の長さに算入せられずと考ふ。彼等は拳闘し、競走し、射撃し、馬に乗り、舟を漕ぎ、世界の果より果まで航行す。彼等は野天にて食ひ、飲み、住み、晝と晝との境として數時間の熟睡を置く。彼等の散歩し或は騎行するや、能ふ限り速に進み、頭を前に

屈して、宛ら至急の用事にてもあるが如し。佛人はいふ、英人は街頭にていつも一直線に余等の前を急歩し、其狀狂犬に類すと。男子も女子もその歩行は殆んど狂亂なり。資産ある英人の子が、漸く長じて獵銃を取扱ひ得る年頃となれば、遊獵は則ち彼等一般の藝術たり。彼等は古今無類の大食なる食肉民族なり。一獵期毎に、國內の貴族は残らず獸を狩り、魚を漁せんが爲めに、田舎に向つて趨り、その中特に強壯なるものは、本國の島より溢れ出で、歐洲に入り、亞米利加に抵り、亞細亞に、亞非利加に、濠洲に赴き、銃を以て、農を以て、魚釵を以て、蹄網を以て、犬と共に、馬と共に、象と共に、獨峯馳ドロウグリと共に、勢猛く、ありとあらゆる獲物を追ふ。これらの人々は以上の諸國に就いて狩獵案肉を著せり。例へば、ホーカー、スクロップ、ムレイ、ハーバート、マクスウェル、カミング、其他多數の旅行家の如し。我家に留れるは拳闘、競走、跳飛、競漕象の競技に熱中す。

(91)

余は想像すらく、英國の馬と犬とは、その人間が殆んど彼等と同じく、強靱なる筋肉を有する事實のために、感謝せらるべき理由ありと。而して、若し有爲の人間たる者は、必らず先づ良好の肉體を具へざるべからずとせば、英國民こそはその最も勝れたるものといふべく、五體豐厚にして、血液に富み、胸廓ひろく、エール酒の芳醇に浸されて、元氣爽に、其少しく肥大に過ぐるを憾むのみ。動物性に饒なる人は、動物と同じく、其本能に依頼す。英人は犬と馬とを酷愛す。彼等の馬に對する愛情は、これを御するに必要な勇氣と熟練より出でたり。馬は己を怖るゝ者を識別し、わが意見を枉ぐることなし。心血沸騰せる年少の書記、元氣旺盛なる大學の學生等は、馬と交るを愛して、教授先生と交るを愛せず。余も亦惟らく、彼等にとつては、馬を以て一層良き伴侶となすと。馬はピュッホンの擧げたるよりも、尙多くの効用を有す。足一步街に出づれば、客馬車若くは荷馬車の御者は、盡く偉丈夫なるを見るべし。若し勇健なる一隊の兵士を要すれ

(92)

ば、余はこれを厩舎の間に募らむ。是等壯夫の活氣に加ふるに、多少の文雅を以てせよ。すなはちかの交際社會の男女をして、勢ひ當るべからざるものたらしむるに必要なる最適の性質を得べし。

彼等はヘングスト及びホルサの兩人を索遜民族の開祖として、かくして道理正しくその馬術を得たるものなり。この人種の別派に韃靼の遊牧民ありき。彼等は其の馬を富となし、小兒も馬の乳にて育てられき。北人はその後久しく祭禮に馬肉を食ふ舊習を墨守し、かくして韃靼の野を記憶したり。丁抹の入寇に際し、劫掠者はその上陸したる所にて、馬を奪ひて、直に自ら精銳なる一隊の騎兵と變じき。

此技術は一時衰退の觀を呈し、二百年前には、英國の馬は、一度も海外にて目覺しき働きをなさざりき。その理由として、彼等英人は、その天性より、何等の夾雜物もなき、純粹且つ固有なる男子の態度として、常に徒歩の戦を好むの傾向を

有す。馬上の勝利に於ては、その名譽を人と馬との兩者に分たざるべからざればなりと言はれたり。されど、この二百年間に變化は起れり。今や、彼等は世界における、いづれの國民よりも能く馬を解すること、及び馬が彼等に取つて第二の自己なることを誇とす。

カムデン曰く『ウイリアム大帝は人よりも多く野獸を愛し、その獲物を犯す者あれば、多額の罰金と重き刑とを課したり』と。『索遜編年史』に曰く『彼の大なる鹿を愛するや、さながら鹿を彼等の父とする如し』と。而して以來富人は彼の例にならひ、各々その能力に従ひ、我獵場を擴めて耕地並びに公有地を侵せり。英國の諺に曰く、兎を射るよりも、人を射るを安全となすと。狩獵規則の峻嚴は、確に英國民が馬と獵師とに對して法外の同情を有することを示すものなり。紳士は常に馬背にありて、馬を理想的完全の度に養成したり、——英國の競馬用馬匹は人工に成れり。十人、二十人と組をなせる馬上の紳士は、屢々、屋根の如く急

(93)

(94)

勾配をなせる山腹を、半人半馬の怪物ケンタウルスの如く驅下れり。いづくに行
くも旅籠屋の壁には、競馬の畫を張れり。電報は一時間毎にニューマーケット又は
アスコットより競馬の勝負を報じ、下院はダービー競馬の日には休會するを例と
す。

第五章 能力

索遜民族も北人も共にスカンディナヴィア人なり。歴史は、これら二つの名稱を
用ゐるに方りて、精密にその限界を定むることを吾人にゆるさず。されど、北人
は一部佛國に住み、且つその土地の力強き感化を、血液ならびに風習の上にと
めたるが爲めに、通常、英國に於ては貴族主義を代表するに至り、これに反して
索遜人は平民主義を代表す。而して又、貴族も實際これら兩民族より成り、勞働
者も兩民族より成れるは疑ふべからざるところなりとするも、吾人はこれらの名

稱をや、神秘的に使用し、以て一をして勞働者を意味せしめ、他をして貴族を意
味せしめざる能はざるものあり。

英國は古來優良の人種の爲めに賭けられたる賞物なりき。有力の人種は相繼いで、こゝに其運命を試みたり。フェニシア人、ケルト人、及びゴック人は既に侵入せり。羅馬人も亦來りき。されどその來るや、恰も羅馬の勢力絶頂に達したる際にして、本國を窺ふ新しき敵の勃興するに逢へり。彼等はその軍隊を上陸せしめ、要塞と望樓とを建てたり、——間もなく不吉の報知は伊太利よりきたりぬ。而して一年は一年より凶を加へたり。遂に彼等は道路と城壁とを美しき置土産として、辭し去りけり。されど索遜民族はかたくこの土に異まりて、家をたて、野を耕し、魚を漁し、商業を營み、獨人傳來の眞實と事物を固執するの風を守れり。丁抹人も來りて、彼等と地を分てり。最後に來りしものは北人即ち丁抹佛國人にしてかたの如く征服し、奪取し、王國を立て、これを統治しき。されど一世紀

(95)

(98)

の後は、索遜人のみ獨り其中堅となり、長壽を贏ちて、征服者に被征服者の言語を語らしめ、その法律と慣習とを採用せしめ、貴族をして索遜の條件を以て、王に號令せしめ、一步は一步より、平民の自由に關する、あらゆる根本的保證を立案し、且つ確定するに至れり。この人種の特徴とこの島國の特徴とが相俟ちてこの結果を將來したる也。この島は自由の勞働に對しては利益あり。されど他の條件にては、所有に相當する價值を備へず。索遜民族は封建的、或は軍政的土地所有法の到底戰爭時代より長く持續せざるを識るだけの明ありき。索遜民族は戰爭においては全然敗北し、爲めに英人の名と賤奴とは同一意味を有するに至りしも、尙ほ王に迫りて種々の特權を強奪するほど敏活なりしが、この勢力たるや、實に彼等の強大なる人格に本けるもの也。常識と經濟とより成れる世界においては、常識と經濟とが支配せざるべからず。従つて、銀行家は其の年七分を以て伯爵をその居城より追出すべし。軍人貴族は、狡慧なる科學的人間より成る平民社

會を壓服する能はず。百代の家系と雖も、我工場に蒸汽機關を備ふる紡績業者、或は肩骨いかめしきリヴァプール商人の社會に向つては、畢竟何するものぞ。スティブソンとブルーネルとは、これら商人の爲めに、機關車と筒狀鐵橋とを工夫しつゝあり。

この索遜民族は世界の人類の手なり。彼等は勞苦に向つて趣味を有し、快樂若くは安逸に向つて嫌惡を抱き、遠き利得に向つて、望遠鏡的測量をなす。彼等は富の製造者なり、——こは又、彼等の精神的能力に依るものにして、この能力にはそれ自らの條件を備ふ。索遜民族は、その好みの爲めに、或は自己自身の爲めに勞働す。故に彼等をして、仕事を始めしめ、若くは、瘦薄なる英國の地にて、彼等の愕くべき價值をひき出さん爲めには、先づあらゆる不名譽と憤激と、障害とを取除かざるべからず。然る後彼等の精力は現れ來るべし。

スカンディナヴィア人は自らトロール神に護らると想像したりき。この神は強

(97)

(98)

大なる勞働の力と巧に物を産出する靈能を備へたる一種の怪人にして、神聖なる船荷積卸人、大工、麥刈人、冶工、石工をかね、わが受けたる親切に對しては、速に金銀の賜を以て報いるものなり。英國の歴史を通觀すれば、この夢は事實となりて現るゝ如し。一種のトロール、即ち活動的頭腦は、アルフレッド、ベード、カクストン、ブラクトン、カムデン、ドレーク、セルデン、ダグデール、ニュートン、ギッボン、ブリンドリイ、ワット、ウエッジウッド等の名を以て、英國内のトロール山に棲み、その額の汗を變じて勢力と名聲とになしつゝあり。

人種若果して善くば、土地も亦善しと云はざるべからず。何人といへども、この魔力に封せられたる島に上りては無事なること能はず。礪礪不毛の土地と、險惡なる氣候の魔力とは、あらゆる冒険家を變じて勞働者となす。こゝに到着したる遍歴者は、若し身を屈して軌くびきに繋がれずんば、必ずその空氣の緊密なるに堪へずして立ちさるべし。強きものは生きのこりき。弱きものは地に沈みき。英國に

於ては、縱樂者又は酒徒の輩といへども、他國人に比して強壯の體質を有す。堅硬なる性情は索邏若くは索邏丁抹人の造りいだしたる所にして、これに追隨し得る佛人又は北人は、總ての點に於て彼等と同化したり。

賞讃すべき方法或は手段にして、その英國に於て發見せられしは、盡くこの人種の膨脹的精神より成長したるもの、若くは、その必然的發芽と見られざるべからず。一人の人間がこの精神を以て思考し、且つ行動すれば、その隣人も亦同一種の精神に刺戟せられ、たとひ富者なりとも、若くは男爵、若くは公爵なりとも、その男爵、公爵としての意志に反いて、わが臣下又は小作人の思想、行動の正しきことを承認す。

英國は曩日猛犬マステックを飼養することにて有名なりき。この猛犬は極めて瘁惡にして、一度噛付くときは、頭を断たざる限り、その齒を離すこと能はず。人も亦犬の如くなりき。英人は膽汁質なり。この氣質は、醫學者によれば其人を他人の意志に

(99)

(100)

屈從せしめんとする一切の手段に抵抗するものなりと云ふ。英人の競技は、主力に對する主力なり、足を踏みたて、足に對し、勝負は公平に、場所は公開なり、——詐術若くは奸計を容れざる力争にして、終には一人或は兩人ともに斃れずんば休まず。エセルワルド王はウィムポーンの戦場に立ちしとき『茲にて生くるか、又は死するか、この中一をなさん』と曰ひしが、是れ英人の精神を道破したるものと謂ふべし。彼等は權謀と機略とを厭ふ。彼等は毒を用ゐず、伏を用ゐず、暗殺をなさず。而して互に對手を遺憾なく傷け終れば、則ち握手して、以後死に至るまで親交を訂す。

吾人は、かゝるゴシック美術風の粗大なる手法を、學校に、田舎市場に、代議士選舉場に、又議會に認むべし。この島においては、いかなる技巧も、眞理に背き、又公平の處置に背くいかなる違法も、許されざるのみか、無記名投票といふものさへも許さるゝ事なし。議會に於て、政府反對黨の取るべき策は、政府の方針に

容赦なく攻撃を加へて、絶えずこれと抗争するに在り。商業上に、利得の見込みは、いかに商人に取りて重しとするも、尙ほ、欺かるゝの苦しきを思ふには若かず。

チャーレス及びゼームス二王の廷臣にして、スカンデルーンの海戦に勝利を得たるサー・ケネルム・ディグビーハ、其當時に於ける模範的英人なりき。『彼は狀貌魁偉にして美しく、辯舌爽快、言語典麗なれば、いかなる土地に姿を現すも、忽ち人々の尊重する所となるべし。彼は六ヶ國の語を能くし、諸の技術と武術とに精通したりき。』彼は『肉體及び精神につきて』と題する一書を著し、その中に論じて曰く『三段論法シロギスムはあらゆる人間生活の變化を生せしむるもの、或は變化そのものなり。そは吾人が一切の務をなすに方りて經過する所の段階なり。人間は、人間たるがゆゑに、決してこの連鎖を編むより外の事をなさず。人若しこの仕事より離るゝときは、何事をなすとも、それだけ人間の天性に於て缺くるところあり

(101)

(102)

とす。而して、若し縦に種々なる皮屑的活動に突入し、この法則を超越して或事をなすとも、其人は尙ほこの單純なる論法の相繋される結果の中に、これが方法、原因、規則、制約、及び標本を發見すべし』と。

茲に英國民族の特色は現れたり。茲に彼等が論理的ならざるべからざる必要あり。彼等は他人より善事をなさるゝも、若しこの行爲が論理的に來らざるときは、これを欺受せず。その状態もこれが爲めに自己の價値を除外せられ、或はわが理解力を犯されたりとなすが如し。彼等は容易に事物の連想をなし得る精神の人を忌む。是れわが思想に對して多くの關係を看る時は、この連綴性と有利なる精神集中とを妨げらるゝとの本能的恐怖に因る。彼等は天才に對して、即ち思索を事とする精神に對して、容忍する事能はず、わが慣用の定規を以て徑路を測る能はざる偶發的思想に對しては、たとひ正當のものなりとも、これが輕蔑を掩ふこと能はず。彼等は又三段論法に終る三段論法を貴ぶものにあらず。何となれば、彼等

(103)

は事實に向つて此上もなき視力を有すればなり。彼等の論理は、食鹽をスープと結合し、鐵鎚を釘に結合し、オールをポートに結合する論理にして、料理夫、大工、及び化學者の論理といふべく、全く自然の論結に従ひ、いかなる言語もこれを記しといひる能はず。彼等の精神は、それ自身の手段たる理性の光に眩惑することなく、かたく實際の結果に鎖され、拘束せらる。彼等は、多くの學者の中の一博士たるサミュエル・ジョンソンの如く、大前提の危急に瀕するや否や、躍つてその三段論法より出で、これを救はんが爲めには、いかなる困難を辭せざる底の間を愛す。彼等の實際的視界は濶大なり。彼等は多くの絲をも、互に紛糾せしむることなくして、把持するを得。あらゆる段階を、彼等は、秩序的に踏み、高等の論理を守りて、決して大前提と小前提とを混同することなく、その眼をわが目的にといめて、多くの手段を連續的に用ゐる複雑の關係、及びこれより生じ易き遲滯のうちにも、その方針を失ふことなし。彼等の精神には此と彼との爲めに餘

地を存す、——これ程度の學問なり。法廷に於ても、判官の獨立と、訴訟人の忠實とは、等しく安全に行はる。議會に於ては、彼等は自由、即ち憲法に遵據せる反對といへる、偉大なる發明をなしき。而して、法廷と議會と共に耳を假さざる際にも、原告は決して黙することなし。彼等が、年より年をこえ、徐かに、忍耐強く、わが利益を保護する武器は、計算と見積りとを立てて、執念く弊害を陳述する反覆なり。されど、これと同時に、彼等は又その意見の味方として多數の人間と金錢とを集め、若し一切の救済が失敗に歸したる曉には、わが協會設立免許證の筐の底に、尙ほ革命の權利ありとの決心を抱く。彼等はその方略を實行せざるべからざる運命をもち、幾代となく失敗を重ねて、尙ほこれを固持するものなり。

而して又、かゝる英人の論理には、正義といへる觀念の附隨せるあり。こは他國の人民に在つては甚だ明かならざるものにして、畢竟、物に兩面あるを確信し、

而してその公平なる勝敗を看んとするの決心に外ならず。いかなる問題に於ても、一方の斷定したる證據に對しては、他の斷定より來る控告あり。彼等は、理論に向つて懷疑的研究を加ふるに就いては、不忠實なれども、事實に向つては、容易に屈服す。機械にまれ、特許權にまれ、鬪場ドヘウの上の力士にまれ、或は選舉場裏の候補者にまれ、英國の天地は、總てこれが試みの行はるゝまでは、その判斷を停止すべし。彼等は言説に動かさるべからず、彼等は活用的計畫をもとめ、活用的機械をもとめ、活用的憲法をもとめ、忍びて試みの終るまで待ち、結果に左袒し、而してあらゆる預想的理論を排斥す。政治上にも、彼等は露骨なる質問を提出して、これが辯明を強請す。租税を拂ふものは誰ぞ。政府は貿易に對して何事をなさんとするか。穀物に對しては如何。紡績業者に對しては如何と。

かゝる特異なる公明正大と、その結果とは、佛人をして非常に駭かしめたり。

ヒリッブ・ドゥ・コンマンは曰く「余の意見によれば、全世界を通じて、余の知れるあ

(106)

らゆる國家の中にて、公衆の利益に注意すること最も多く、人民に危害を加ふること最も少き國家は、英國なり』と。生命安全にして、爰に個人的權利あり。之に反して安全の保證なきとき、自由も何するものぞ。これに反して佛國に於ては、「同胞」といひ「平等」といひ、「無形の統一」といふも、皆暗殺の異名なり。モンテスキューは曰く『英國は最も自由の國なり。英國に於ては、たとひわが頭上の髮の數ほど敵をもつとも、何等の害に逢はざるべし』と。

彼等は、その自尊心と、その因果律に對する信仰と、その實際的論理、換言すれば、手段を目的に耦配する事とによりて、現代世界の指導權を得たり。モンテスキュー曰く『英國に生れたる者にあらずんば、眞の常識をもたず』と。この常識は、吾人が地上の生存を保つにつきてのあらゆる條件、すなはち言明し得べき法則と及び言明すべからざる法則とを總て識認するもの、或は、獨り實行上より學び、これに摩擦といへる斟酌を加へたるものなり。彼等は理論に向つて懷疑的研

究を加ふるには不忠實なり。而して、高遠なる思索に關しては、態度窘束し、所産空乏なるを免れず。されど、事實に向つて無條件に降服し、目的に達する爲めに適當の手段を擇ぶに至つては、彼等の讚嘆に價すること、蟻と蜜蜂とに劣らざるものあり。

英國民の性向は、利用厚生に對する嗜欲なり。彼等は槓桿、螺旋、滑車、フライング種駄馬、瀑布、風車、海潮車カイトミルを愛し、その運漕船を駛らしむる海と風とを愛す。燦としてその寶石中に光芒を放てる金剛金「コイヌール」よりも、彼等は、人間よりも、更に睿明にして、その兩極を世界の兩極に向はしめ、その軸を世界の軸に並行せしむる、色澤なき磁石を貴重す。看よ、彼等の玩具は蒸氣と電氣なり。彼等は美術には鈍けれども、その粗大なる技術には敏し。寶石細石又は寄木細工には巧ならざれども、歐洲第一の製鐵者、石炭掘り、刷毛者、鞣皮工たり。彼等は身を以て農業に従ひ、排水に従ひ、海水、暴風、流沙、冷にして濕へる心土等

(107)

(108)

の侵襲を拒ぎ、漁業に従ひ、鹽、石墨、革皮、獸毛、硝子、陶器、煉瓦等、必要
 缺くべからざる商品の製造に従ひ、蜜蜂と蠶兒とを飼養し、その確實なる配合に
 依つて成功す。工業家は、今朝まで羊背に在りし毛をもて織れる衣をつけて、午
 餐に坐すべし。吾人は紳士の午餐に招せられて、獸肉、雉、鶉、鳩、家禽、菌類、
 パイナップル等すべてその所有地に生長したるものを食ふべし。彼等は家と野と
 に屬する一切の道具を整頓する所の淨潔なる農夫なり。あらゆる物皆能く保存せ
 らる。缺乏もなければ、浪費もなし。彼等はその建築に於て、その住宅の構成に
 おいて、その衣服において、使用と適宜とを研究す。佛人は襪縁ひたべりを發明し、英人
 はシャツを作りき。英人は顎あごまでボタンを着けたる實用的の上衣を着る。その地
 合は、粗けれども丈夫にして久しきに耐ふ。彼もし貴族ならば、平民よりも却つ
 て稍劣れる衣裝をなすべし。英人は質素にして實質ある帽子、靴、及び上衣の趣
 味を全歐洲に弘めたり。彼等は、自己の衣服が極めてよくその目的にかなひ、爲

めに他人のこれに注目することなく、或はこれを記憶に留めて後日語りいづること能はざるほどの人を、最も好き服裝の人と思惟す。

彼等はその食物に、その技術に、其製造品に、總て根本要素を保留す。及物の
 各種類は、盡くその形を以て、職工の思想と長き經驗とを示せり。彼等はその費
 用を正しき場所に用ふ。例へば、汽船においては、その機關の堅固と、船體の強
 さに金をかくるが如し。彼等が寒帯航路に用ゐる船舶の優秀なる設備は、倫敦を
 極地に齎らすものなり。彼等は道路を開き、水道を設け、家を暖め、且つ換氣を
 なす。かくて。彼等は現代文明にその直裁明白と實用的習慣とを印象したり。

商業においても、彼等は、蹉跌すべき理由なきものは、決して蹉跌することな
 しと信じ、又、若し商業をあらゆる物となさずんば、商業は何物をも與へずと信
 じ、かゝる信念を以て活動す。秩序の精神、細事に對する注意、及び細事を下位
 におく事、換言すれば、事物を過度に詳密に追究（こは獨逸人の任務也）せざる事、

(109)

是等の特色は相合して、英國商業の勢力たる事務上の敏活を成す。

戦争においても、英人はその手段を吟味するものなり。彼等は、タシクスによつて、『神は最も強きものに味方す』と主張したりと傳へらるゝ、獨乙系の祖先シヰリスと同じ意見を有す。この語はすなはち奈翁が無意識に翻譯して、『余は神が常に最も重裝したる大隊を寵するを認む』と言ひしものなり。彼等の軍學は、若し攻撃隊の武裝が防禦隊よりも重ければ、前者が後者を敗るべし、との主義を提説す。故にウェリントンWellingtonは、西班牙の軍隊に臨みしとき、その兵士をして先づ武裝をなさしめ、次にこれを解かしめて、その重量を測りしが、是れ彼が、軍隊の威力は、個々の兵士の重量と勢力とに依頼し、大砲に關係せずと信したるが爲めに外ならず。パーマーParmerston卿に至つては、下院に於て演説して、英國は他のいづれの國よりも、その軍隊の健康と安慰とに注意せり、故に、一朝有事の日は、戰場に於て、他國の軍隊よりも、一層多大の兵士を列伍に立たしむるを得べしと言ひま。バルチBarthク海岸における丁抹砲臺の砲撃に先ち、ネルソンNelsonは自ら端艇に乗りて、幾日となく、海峡の測深といへる勞多き勤務に服したり。エルディEarldyンのクラークClarkが發明したる、有名なる「海戦における敵陣破摧の軍略」も、ネルソンが戦艦複合の計、すなはち敵の船の個々に對し、その船首の外側と後尾の外側とに、各一雙づゝ味方の船を配置する方法も、畢竟かの奈翁が勢力集中の法則を、海戦に翻譯したるものゝみ。コリングウッドCollingwood卿は、その部下に告げて、もし五分間に三發づゝ精確なる偏船齊發ボートサイドをなすを得ば、いかなる敵もこれに抵抗する能はずと云ふを常とせしが、不斷の練習によりて、彼等は、遂に三分と三十秒を以て、これを能くするに至りま。

されど、自己以上の優良なる人種は、この世界に存在せずとの意識より、彼等は、大抵最も單純なる手段に依頼し、重々しく困難なる方略を好まずして、勝利が單に個々の戦士の體力、勇氣、及び忍耐に繋れる場合には、直に事を接戦に訴

(112)

ふるを以て愉快とす。彼等は綱具に、發動機に、武器に、あらゆる改良を加へたり。されど、彼等は根本的には、最善の軍略が、到底わが船を敵の船に密接してならべ、その大砲を残らず敵に向けて、敬か、味方か、いづれか海底に沈むまで、これを發射するに在るを確信す。こは古き方法にして、英國に於ても、或は英國以外に於ても、決して廢るの悞なきものとす。

彼等は必らずしも常に名譽の爲めには、或は宗教的感情の爲めには、而して決して間想の爲めには、その血を流す事をなさず。彼等をして革命を起さしむるものは、通常財産又は財産によつて計量せらるべき權利なり。彼等は印度人の如く戦斧の舞に對する嗜好を有せず。又、佛人の如く徽章、宣言の如きものに對する趣味を有せず。英人は穩にその務を守り、わが給銀を儲けつゝあり。されど、人もしその手を彼の給銀に、或は彼の牝牛に、或は其財産に對する彼の權利に、或は彼の店舗に加へむ乎、彼は世界最終の日までこれを争ふべし。大憲章、陪審制

度、未決囚保護律、星法院、造船税、天主教、プリモス植民、米國獨立等は、みな自由民の食事に對する權利を含める問題なり。若しこれをだに犯すことなくば、英國民を鞭ちて暴動と叛亂とを敢てせしむるには至らざりしならむ。

彼等が一方に於て、かくの如く、秩序、計量の天稟を具ふると共に、他方に於て、又承認せざるべからざるは、その能く一層濶大なる見解をも有し得ること、す。されど、縦心は彼等に取つて費多く、甚しき事業逼迫、若くは精神力の蓄積を價す。通常、馬の最も能く働くは、その遮眼革をつけたる時なり。凡そ英人思想の傾向と合すること、わがコンネクチカット人の露骨なる質問『足下は家に居るとき、如何して生活費を儲くるか』に如くはあらず、——自由、租税、特權の疑問も、みな金錢の問題に過ぎざればなり。麥酒と肉俵とに漬りたる遅重の漢子は、耳も遠く、眼も矇めり。彼等の昏々たる精神を刺戟するものは、戦争と、貿易と、政治と、迫害とならざるべからず。彼等は、邪教徒を焚殺す薪の光、又は

(118)

(114)

市街にあがる兵燹を假らずむば、主義といふものを明に讀むこと能はず。

タシタスは獨逸人に就いて『彼等は單り急激の努力のみ強く、苦役と勞働とは、これを忍ぶこと能はず』と言ひき。この高遠なる使命を荷へる人種も、その頭腦の何處かに耐忍の特質を蓄へざりしならば、恐らくは後年倫敦を建つる能はざりしならむ。余は英人の粘實性が、この民族の構成に加はりたる諸の種族又は氣質中、その何れより來れるを審にせず。されど事實として、彼等がその打込む一本の釘を、かたく掴むを見る。彼等は決して僥倖を望むで趨らず、又法外の速度を起さず。彼等はその工場に大に費し、徐々として其報償の來るを待つ。彼等の革皮は鞣さるゝ爲め七年間桶の中に在り。シニフィールドのロージャー會社工場にて、余は剃刀と小刀を製造する方法を見しとき、良好の鋼鐵を造るには決して幸運といふものなく、又その職工は毫も失錯をなさずして、百個、千個、その及は盡く利しと語るを聞けり。是れ、彼等のあらゆる仕事の特色なり、——前に

出來たる成果よりも、一層多くを企つることなし。

(115)

北歐神話中のソール神は、その友と共に、ウトガルドに至りしに、『茲には、能く一藝を解し、且つその藝においては萬人を凌ぐ者にあらずんば、とゞまる事を得ず』と告げられたりと云ふ。これと同一の禁制は、今尙ほソール神の後裔たる英國民に與へられつゝあり。この勞働者の國民は、各自に或一種の技術、若くはその細部を練習して、これが奧秘を窮めむことを志し、自ら他のあらゆる人間に勝ると思惟する物を所有するまでは、決して満足することなし。彼は何事にも、これを能くするにあらずむば、寧ろ全く爲さざるに如かずと思へり。余は英人の如く、事物に對して精通といふことを重むる國民は、他に無しと想像す、——最高の貴族より最下の民に至るまで、各人みなわが技能の達人たらむことを念とすればなり。

『能倣を示せば』とある佛人が、討論中、その辯論の終に云ひしに對して、英人

(116)

は「否々、卿は自ら肩を車輪にかけざるべからず、——自ら事件を進めざるべからず」と曰ひしと。サー・サミュエル・ロミリーは諸種の公會にて演説するを謝絶し、専ら下院にのみ籠りしが、是れ、議會に於ては、演説を以て計畫を實現し得るが爲めなりき。下院の事業は少數の人間に支配せらる。されどこれらの人間は皆激烈の労働者なり。サー・ロバート・ピールは「議會報告を暗誦したりき」。彼の同僚及び政敵も議事録を暗誦したり。行政上又は司法上の高き官職は安逸の寢臺にあらずして、猛烈に心力を誅求する地位なり。ピット、カンニング、キャスレリ、ロミリー等、多數の英國指導者は早くも激務の爲めに身を亡したり。彼等はみな好き労働者を鑑定する優秀の判官なりき。一度びクラーレンドン、サー・ヒリップ・ウワーウィック、サー・ウィリアム・コヴェントリイ、アッシュリー、パーク、サーロー、マンズフィールド、ピット、エルドン、ピール、若くはラッシュェルの如き人物を發見すれば、高官美祿、何物を與ふるも尙足らずとしき。

彼等は公共的目的を追求するに、驚くべき熱心を有す。一個の私人が、科學的若くは考古的研究に於て示すところの硬執は、すなはち、全國民が奈翁の帝國に反對して、歐洲諸國を聯合し、幾度か敗衄して、尙ほ新なる勢力をふるひ、終に六度びにして、彼を帝座より蹴落したると同じ性質のものなり。

サー・ジョン・ハージェルは、北半球における天體目錄をつくりし父の遺業を完成せんが爲めに、多年、喜望峰に住み、南半球の目錄を製して、本國に歸りし後、更に八年以上の日子を費して、これを整理したりき。而してこの事業の價值は、久しく世に現れざりしが、三十年を経たる後より、初めて最も緊要なる一記録として、未來永遠に傳へらるゝに至れり。英國海軍省は、サー・ジョン・フランクリンの行衛を搜して、年々、北極探検隊を派遣せしが、この探検隊は、大浮氷群を貫き、ベーリング海峡を過ぎ、終ひに地理學上の疑問を解決したり。エルギン卿は、雅典に於て、希臘遺物の廢滅に瀕せるを看、その詩銘を顧みずして、直に足

(117)

代をかけ、これを集むること八年にして、その大理石を残らず船に積みしに、船は暗礁に乗懸りて、海底に沈みしが、巨額の費用を投じ、潜水夫を用ゐて、これを引揚げ、終に倫敦に齎しかへりき。されど卿は元よりこれに依つてヘイドン、フリーセリ、カノーヅア等世界の大美術家に賞讃せらるべしと期せしにはあらず。これと同一の精神を以て、サー・チャーレス・フエローズも、クサンサスの記念碑を探索し、發掘したりき。レヤードも、ニネヅエの彫刻を捜査したりき。

英國民は自己の建てたる宏大なる都の中に住めり。倫敦は、彼等が濠州のマタスニア島に在ると、或は喜望峰に在るとを問はず、その心中に擴れるなり。一旦、完成せんが爲めに着手したる事物を、忠實に完成する事、これを以て彼等は自ら榮譽となし、又、己と同等の英人たる證據として、互に他に向つてこれを求む。現代世界は彼等のものなり。彼等はこの世界を造り、且つ日毎にこれを造りつゝあり。世界の商業的關係は、極めて密接に倫敦に集り、殆んど地上のあらゆる非

貨は、英國政府の威力を助成するもの、如き觀を呈す。而して若し地球上のあらゆる富が、戦争又は洪水の爲めに、一掃せるらゝ事ありとも、英人は能く自らこれを恢復すべき能力ありと信す。

彼等は、その航海に従事する性質を以て、自ら索遜民族の血統なる事、その鐵工業における遺傳的長技を以て、英雄オーデインの鍛工の末裔なる事、その農業と無量の收穫とを以て、英國に生れし事を、並びに善く證明し、その至上の能做と宇宙的精神を以て、人間の住むべき陸地の中心を、彼等みづから領有するの道理あるを辯解す。彼等は耕し、建築し、鍛へ、紡ぎ、織れり。彼等は英國全島を以て一條の通路となせり。而して、倫敦をば、一個の店舗となし、法廷となし、登録事務所となし、科學試験所となし、以て他邦人士を誘致し、政治上、宗教上に各種の意見をいただける亡命者の避難所となし、殆んどあらゆる活動的男子をして、その國籍の何れに屬するを問はず、いつかは一度び、これを訪はざるべからざる如

く感せしむる都會となしき。

(120)

彼等は實際的活動の何れの方向に向つても、盡く最良最美の發達をなしたり。戦争の秘術に於ても、彼等はその極意を示さざりし事無し。ソットの蒸汽機關、ステイブンスンの機關車、ロバーツの紡綿機は、世界の勞働を負擔す。文學、科學若くは實用的技藝の何れの部門においても、彼等は第一等の書籍を出さざることなし。何等か新しき發明ありし時、何等か科學上の改良ありし時、その價值について、先づ意見を徵せらるゝは、英國なり。而して、彼等はその浩大なる帝國の商業上又は政治上の紛糾せる關係に於て、危急の問題に逢着することあるも、慎重にこれを吟味し、且つ適宜の處置を施すが故に、能くこれを解決するを得て、自ら屈辱するに至らざりき。是れ彼等の僥倖なるか、或は彼等の頭腦に依るか、そは兎も角、たしかに彼等に與ふるに商業上の利益をもつてするは、凡そ從來よりも良好なる方法、若くは幸福なる發明と見るべき光の來るや、毎に必らず彼等

の同族中に現るゝ事なり。彼等は一系の家族にして、定命を荷ひ、家族の守護神バンシーより決して男統を缺くことなしと誓はれたるもの、如し。彼等は重要な地位を充すべき人物の富を有し、黨派的批評の謹嚴なるが爲めに、常に有爲の人物を揀選せざることなし。

(121)

英人精力の一證は、その國家全體が極めて技巧的に構制せられ居る事實なりとす。氣候と地理とは、前にも言へる如く、宛ら人間の手を以て、その状態を按排したるの觀あり。これと同一の特色は、全帝國を支配す。ベーコン曰く『羅馬は逆説に從はざる國家なりき』と。されど、英國は反對と矛盾とによつて成立す。その偉なる勢力の根柢は逆巻く波濤なり。而して、徹頭徹尾、英國は不合理を集めたる博物館たり。この霧深く、雨多き國も、全歐洲に、星學上の觀測を寄與するにあらずや。その短き河流は水力を起すに堪へず。されど、その大地は工場の雷

(122)

燕の爲めに震ひうごく。注目すべきほどの金山なきも、國內に存する黄金の量は、他の何れの國にも勝れり。葡萄を栽培するには、餘りに北に偏するも、あらゆる國の葡萄酒が、その港に在り。佛人コムト・ドゥ・ローラグア曰く『英國にては焼林檎の外一の果實も熟せず』と。されど、倫敦におけるオレンジ、バイナップル等の價は、地中海におけるよりも廉し。マルク・レーン特使又は税關報告は、詩人ポーブの大言を文字通りに確證す。

"Let India burst her palms, nor envy we

The weeping amber nor the spicy tree,

While, by our oaks, those precious loads are borne,

And realms commanded which those trees adorn."

『印度をしてその棕樹を誇らしめよ、われ等は羨まず、流るゝ琥珀を、香料饒なる木を、そ

は、わが檜樹をして、その貴き荷をばこび、かゝる樹々の飾れる國をば支配すればなり。』

土生の家畜は跡を絶てり。されどこの島は人造の畜類を以て充滿す。農學者ペークツニルは羊と牝牛と馬とを規則正しく造出し、その畜類の經濟にかなはざる部分は、盡くこれを棄てたりき。牝牛はその乳房の犠牲となり、牡牛はその腰肉の犠牲となれり。舍飼の方法は、家畜を以て精液製造機となし、厩を變じて化學工場となせり。河流、湖、池等、甚しく漁災を被り、又は工場の爲めに中斷せられたる所は、蛙、比目魚、鯉の卵を以て填充せらる。

チャット・モッスの濕地と、リンカーン州及びケムブリッジ州における多くの沼澤は、人の健康を害し、且つ借地料を償ふだけの禾穀を生せず。されど、瓦の圓筒とベルチャ護謨の水管とは、この不良地の五百萬瓩を乾し、莖莖を植ゑ、荊草を育つれば、最良の土地に比して、毫も遜色なきに至らしめき。既に從來、莫大の

(123)

(124)

石炭費消の爲めに、溫和乾燥となれりと信せられたる氣候は、又此新しき努力によつて、霧も暴風雨もやめりと稱せらる。一定の時來らば、英國は總て排水せられ、再び水上に出づるならん。最近の進歩は、蒸氣の力を農業に假るに在り。蒸氣は殆ど一個の英人なり。余は世人が次期議會に蒸氣を選擧して法律を制定せしむるなきを知らず。彼は織り、鍛へ、鋸り、碎き、煽ぐもの、今や、更に農夫に代りてボンプを運轉し、搗き、掘り、犁かざるべからず。製造業者の開きたる市場は、農業を高めて、極めて殷盛にして費用多き工業となせり。家屋の價は、英國に於ては、殆んど土の價に等し。多種多様の人工的補助力は、いづれも天然の資源より安價なり。國有鐵道が、一哩一片にて人を運ぶのとき、何人か徒歩の勞を敢てするを得んや。無數の室を上下に配置したる都會に於ては、日光よりも瓦斯燈を用ゐるを安價とす。英國の貿易は自國の生産を輸出する爲めに存在せずして、その製造品の爲めに、委しく言へば、他國に於て粗惡に製せられたる物を精

製するが爲めに存在す。英人は墨國人の爲めにその外被をつくり、印度人の爲めにその大手巾を製し、支那人の爲めに人參を栽る、アメリカ印度人の爲めに南京玉をつくり、フランスダース人の爲に線帶を織り、星學者の爲めに望遠鏡を作り、帝王の爲めに大砲を製す。

通商局は各工業地に、希臘、伊太利の優秀なる標本をおき、その人民をして自由自由にこれを觀覽せしむ。この局はミュンヒ、伯林、巴里等において最も賞讃を博せし作品を、其國語に就いて翻譯せしめ、且つこれを説明するに精巧なる繪畫を以てせしむ。この局は又伊太利國內を探索して、新しき意匠を求め、これを用ひて自國の織物、陶器、鑄物等に光彩を加へしむ。

尙一層近く觀察する時は、英人の社會組織は、愈益技巧的なるを知らむ。彼等の法律は假想の網細工なり。彼等の財産は、何人も未だ曾て見たる事なき、金錢に關する權利の假券或は證書なり。彼等の社會的階級は法文に依つて造らる。

(125)

権力及び選舉權の比例は歴史的にして且つ法制的なり。最近の改革案は、城壘より、廢墟より、石垣より、その政權を取去りたれども、バーミンガム及びマンチェスターの如き、その工場を以て、英國の大陸における軍費を拂へるに拘らず、未だ一人の代議士をも有せず。議員を選舉する議會に於て、純潔を保つのは、金を以て出席權を購ふに在り。外國の勢力を抑ふるには、武装したる植民地を以てし、本國の勢力は警察の常備隊を以てす。貧民の生活は自由の勞働者よりも好く、盜賊は貧民よりも好く、流刑の重罪人は禁錮の重罪人よりも好し。犯罪の人工的なるは、密輸入、密獵、國教違反、異端、叛逆の如し。英國に於ては人を殺す罪は兎を殺すより輕しと、普通に稱せらる。水兵を強制的に徵集するは海上の主權を維持する所以のもの。エルドン卿曰く、『水夫の強募はわが海軍の生命なり』と。支拂能力は、國債に依つて維持せられ、『君もし余に錢を貸さずんば、余焉んぞ君に拂ふを得んや』との主義を主義とす。司法上の行政に關しても、衡平法裁

判所における事件の費用を清算するに、サー・サミュエル・ロミリーは、裁判所長自身が全然法廷以外に立つの手段を取りき。彼等の教育制度も人工的なり。大學は死語に電流を通じ、これを生命あるものゝ如く、躍動せしむ。彼等の教會も技巧に成れり。社會の禮法風俗も技巧的なり。造上げられたる人間は、造上げられたる禮法を有す。かくて一切のもの、大工業市バーミンガムの魔力を被り、茲に、吾人は、技術上の製造物として存在する一種の國民を見る、——寒冷、不毛、殆んど極地と同じき海島は、一變して、地球上最も多産、豪華、且つ霸權を握る國土となれり。

英國に於ては、何人も自己が財政上の一產物たるに甘んず。冷落たる瘦野に、工場は建てられ、銀行は設けられ、而して人は水の溝渠に入るが如く來り、而して邑となり、都會となる。人はバーミンガムの鉤子の如くにして製造せらる。急速なる人口の倍加は、ワットの蒸汽機關と共に現れたり。一州を所有する大地

(128)

主は曰く『小作人は不利益なり。余は羊を飼はん』と。則ち彼は屋根を剥ぎ、その農夫を米國に送る。英國民は短時日を以て富を造るに慣れたり。その經濟學者は、口を揃へて、『英國に現存する富の大部分は、最近十二ヶ月の間に、人間の産出せしものなり』と云ふ。これと同時に降雨兩三日に亘れば、倫敦街頭、早くも幾百の生靈を餓死せしむるものあらむ。

彼等が勢力を得たる秘訣の一は、その互に善く他を了解する事なり。彼等相互の間に、善良なる意志の存するのみならず、彼等は、また各自に優秀なる精神を有す。何れの國民も、多少の智者を生ぜざりしはなし。たゞ或る國民に於ては、わづかにその一人を生じたるに止まれるのみ。されど、英國に於ては、その社會構制の合理的なるが爲めに、知識も觀念も、盡く國民全體に融通するを得べし。而して、この國民的觀念の各個より發する電觸は、彼等を溶して一家族となし、

彼等が個人として絶えず貯へつゝある勢力の蓄積を導きて、一般人民の使用し、享樂する所たらしむ。こは國の小なるが爲め乎、若くは人種の誇りにして又その傾向なる乎、——彼等は協同性、換言すれば責任尊重の念を有し、互に他を信任す。

彼等の心性は、羊毛と同じく、いかなる色にも染まり、而して、その色は地質其のものよりも長きを保つ。彼等が自己の主張を固執するや、その生命におけるよりも甚し。人別帳に録せられたる個々の平民は、その軍籍に在らざるものも、皆な以て好箇の兵士となすに足る。これ等私の、謹慎にして、無言なる、家庭の人も、公共的目的の爲めには、極度の熱心を現すべし。かゝる旺盛なる感情は、古來この國における幾多の英雄の物語を成せり。階級の相違も國民的情性を二三にするとなし。丁抹の詩人オーレンシュラーゲルは、丁抹語にて書けば二百人の讀者より無しと、怨言を洩せり。獨逸には、教育ある人士の言語と、俗衆の言語

(129)

(130)

と、二様の國語ありて、その差別の甚しきこと、すべて偉大なる文學者の作物に現れたる感情、又は語句は、到底下層社會に達するの時なしと稱せらる。されど、英國に於ては、貴族の用語も、貧民の用語なり。議會に於て、説教壇に於て、劇場に於て、辯士一度び思想と激情との爲めに起たんか、その用語は早くも慣用語となるべし。街上の人が、最も良き言葉を、最も良く了解す。彼等の國語は、聖書より、慣習法より、シェークスピア、ベーコン、ミルトン、ボープ、ヤング、クーパー、バインズ、乃至スコットより出でたる如し。この島國の産したる二三の偉人は、古來絶無にして稀に見るところのものなり。されど、これ等偉人は、その生存中にも決して孤獨を憂ひざりき。ニュートンの發見は、直に綠威天文臺に、航海業に、實現せられたり。小兒も、フットンが地層に就いて、ダルトンが原子に就いて、ハーツイが血管に就いて、各々知りしところを知れり。これらの研究は、一度び危険と目せられしも、今や流行せり。農業上に、商業上に、戦争

(131)

上に、美術上に、或は文學上に、或は考古上に、發見せられ、若くは知得せられしもの、盡く然り。偉大なる能力は、少數の巨人に集中せずして、一般人民の精神に均分せられ、従つて彼等は皆多少の努力を以て他人の名譽に與ることを得たり。彼等は能力或は階級において相異なるよりも、品性において相襯附す。労働者も能く貴族たるべき資質を備ふれば、貴族も亦籠細工人たるを得。各人みなその頭腦中に英國社會を貯へ、わが荷へる天職の何なるかを識り、これに向つてその全力を傾倒す。大法官はその笏を以て英國を荷ひ、少尉候補生はその短劍の先を以て、鍛工はその鐵槌を以て、料理夫はその匙の凹窪を以て、荷へり。御者は英國の爲めに、その鞭を鳴らし、水夫は『神よ、救へや大君を』の國歌に合せて、そのオールを整ふ。極悪罪人と雖も、その英人的硬骨を矜れり。政治において、戦争において、彼等の互に團結するや、宛ら鋼鐵の鈎を以て繋がれたるが如し。ネルソン傳の妙味は、その私心なき偉大なり、わが最後まで助くる人々に依つて、我も

(132)

最後まで助けらるゝの信念なり。英人は、生活の技術において、他のあらゆる國民に先ずること、常に數代にして、或方面に於ては、現代精神を代表せずして、自らこれを構成するに拘らず、冷々としてこの文明と勢力との急先鋒をたもち、その軍を行くや、方陣においてし、密聚部隊においてし、踵くびすを接し、列を狭せまめ、盡く英雄にして、首より尾に至るまで、その幾千萬といふを知らず。

第六章 品行

余は、あらゆる國民の中にて、最も堅固に自己を守るもの、英人なるをみとむ。彼等はその馬に、材料に、基礎に貴ぶところのものを、自ら具有す。余がリヅァーブルに到着したる日、一人の紳士あり、余に向つて愛耳蘭總督の事を説きしが、その中偶々「總督クラレンドン卿は雄雞の如き剛勇を有し、死に至るまで戦ふべし」との語ありき。余は此最初に聞ける事を、最後まで聞きたり。英人の貴ぶも

の、一は豪膽なり。馬丁も之を有し、商人も之を有し、僧正も之を有し、婦人も之を有し、新聞も之を有す。「タイムス」新聞は、英國に於て最も豪膽なるものと稱せらる。而して、シドニイ・スミスは、少年たるジョン・ラッセル卿も、明日直に海峡艦隊を指揮し得べしと云ひて、これを諺となせり。

彼等は人にもとむるに斷乎として自己の意見を確守せん事を以てし、——事に臨んで、明白に、然り若くは否、と答ふる能はざる實行上の懦弱を唾棄す。彼等は人の意に忤ふをも敢て辭せず。否、人もし、自然に、且つ勇氣を以て、斷行せば、彼をして一切の命令をも破らしむべし。人は先づ何者かたるを要す。然る後、その欲するが儘に何事にも爲すを得べし。

器械があらゆる仕事に應用せられ、且つ極めて精巧となりし結果、人間の爲すべき事は、單にこれに注意し、及び火爐を養ふに過ぎざるに至れり。されど、器械は正しく時間に合へる勤務を要求し、且つ決して倦怠を知らざるが故に、その

(133)

司掌者をして殆んどこれに當ること能はざらしむ。鑛山、鍛鐵場、製造場、醸造場、鐵道、蒸汽ポンプ、蒸汽犁、軍隊の操練、警察の練習、裁判所法規、乃至商店の規則は、みな人の習慣と活動とに、器械的精確を帯びしむるの作用を爲しき。一種の恐るべき器械は、大地に生じ、空氣に生じ、男子と女子とに生じ、思想といへども亦自由なるを得ず。

器械的勢力と組織とは、人民に向つて強壯なる體軀とこれに愜へる氣力とを要求したり。従つて、かゝる人民の間に入るものは、多少金屬性の重みを有せざるを得ず。遂に、人は物凄じき人生ものすさまじきの様を見て、心に悟る所あり、則ち謂つて曰く、一事の明白なるあり、この國は臆病なる人間の住むべき所にあらず、狐鼠こね々々と這ひまはること勿れ、決心せよ、わが獨特の進路をとれ。さらば尊敬と推舉とを見出すべしと。

世人は曰く、西班牙を旅行するには、強健の身體を要すと。余は他の理由より

英國に就いても同様の語をなすべし。而して、その理由は、單に英國の人民が元氣旺盛にして、筋骨逞きに在り。眞面目の仕事を除いては、これ等の猛士と相當るべき重さを與ふるに足るものなく、その仕事は、彼等の爲めに朝食の卵とマフィンとを調理するに過ぎずとするも、必らず眞面目なるを要したりき。英人はその全身を以て語る。彼等の聲はその腹より出づ、——米人の聲が唇頭に發すると同じからず。英人は旅館の設備、道中の便宜に關し、極めて痲痺強く、簡切なり。その炕麵包、截肉、各種の方便について無用の時間を費し、聊にても怠慢を發見すれば、大聲を放ち、且つ猛烈に、その短氣たんきを直白す。彼等の快活が遺憾なく暴露するは、その態度なり、その呼吸なり、その啖を斷るにあたつて發する不明瞭の濁聲なり、——すべて粗大なる強さを意味するもの。彼等は硬性を有す。彼等は突嗟の場合にも案を立つるを得。彼等は冷靜を具ふ。こは道德的及び肉體的性質を巧に按配し、そのあらゆる力を意志に従はしむる結果なり。さながら彼等の眼

(136)

は、その柄が脊骨に連結せる爲め、胴と共に動かざるを得ざるに似たり。

この精力はまた彼等が互に毫も好奇心を起さず、冷々として相關知するなきの風に現れたり。彼等の各自に歩行し、食ひ、飲み、髭を剃り、衣を整へ、身振手眞似をなし、種々の状態に於て、活動し、苦むや、更に傍人と關係するなく、自己獨特の方式に於てし、たゞ他人に牴觸し、若くはこれを煩さんことを怖るゝのみ。されど、これ彼等が隣人の眼を輕んずるに慣れたるが爲めにあらず、彼等は、實際、わが事に心を奪はれ、他人を思ふに暇あらざるなり。この洗煉せられたる國においては、各人皆な獨りわが便宜に依つて行動を決すること譬へば無人の境を進む孤獨の探検者と異なるなし。余はこの國の如く、自由に人の奇癖を許し、何人もこれに向つて特に係心することなき國あるを知らず。英人は或は降注ぐ雨の中に、蝙蝠傘を疊みて、これを杖の如く振りながら、平然として濶歩し、假髮、肩掛、或は馬鞍を被り、或は逆立ちをなすも、一語を挟むものなし。而して、彼

等は、幾代となく、これを續けたるが故に、今や、その特色を血液に存す。

これを簡言すれば、彼等島民は、各、一個の島といふべく、安全、静寂、互に通信すべからず。相知らざる人々の集れる席に於ては、恐くは啞者にあらざるかを疑はしむ。彼等の眼は、決してその卓子と新聞とを離れてさまよはず。彼等は決して好奇心、若くは不約合の感情を暴露せず。彼等は總て峻嚴なる「品行」の學校において訓練せられ、寸時も、その手綱を離さず。彼等は握手の爲めに手を出さず。彼等は他人をしてその視線をわが視線と衝突せしめず。紹介を経ずして、人の面を直視するは、殆んど侮辱たり。雑交の會合においても、擇交の會合においても、彼等は人を紹介せず。推薦は、契約と同じく、確實なる形式なり。紹介は宣誓なり。彼等はわが姓名を現さず。旅館に泊るも、彼等は帳房ちやうばにおいてその姓名を書辨はんぶんに呷くことを欲せず。彼等若しその住所を記したる名刺を與へんか、是れ友情の明認なり。而して、彼等は他人に紹介せられて、こゝろに交誼を求む

(137)

る時にも、尙冷靜なる態度を保ちながら、對手の意に投せんとを研究す。

余は、この度びの講演には、從來、貧弱無能の人間に關して吐出すに慣れたる、多くの輕蔑的語句を、不適切と感じて、漫りに聽衆に向つて擲つことを躊躇せしが、是れやがて彼等の手強き精力に對する、奇なる證明なりき。この強壯なる民族の美しき體軀、及び氣力は、余の想像に斯程の影響を與へたり。

余が英國に到着したるは、恰も商業上大逼迫を告げたる際なりき。されど、何人が失敗せんとも、英國の失敗すべき憂なきは、明白なりき。彼等英人は、一千年間此島に坐せり。今後も續けて茲に坐すべし。彼等は、その隣りの國民の如く、解體せざるべし。或は絶望的革命に陥らざるべし。何となれば、彼等は今日までに有したる精力と操持とを、今も同じく有すればなり。彼等を繞れる勢力及び財産は、彼等自身の創始せし所のもの、而して、彼等はこの危急の際にも、尙同一の權威ある勞働に従事したり。

彼等は積極的、方法的、簡淨的、形式的にして、常道と慣用的手段とを愛し、又、たしかに眞理と宗教とを愛するも、形式の點においては、決して異を容れず。世界を擧げて、英國の旅館とその家庭の愉快にして、各室の裝備の善美なるを稱揚す。何人も彼等の清潔と個人的作法とを信じて可なり。佛人も清潔なるべし。されど英人の清潔は、その良心に基く。一種の秩序と、完全なる禮義とは、彼等の衣裝に、彼等の携帶品に露れたり。

彼等は猛烈、多濕なる風土に生れて、休息の間は常に室内に閉籠り、且つその天性情味濃にして忠厚なるが爲めに、切にわが家を愛す。富める者は地所を購ひて、館を建つべし。中流の生計を營む者も、家の爲めには、財を吝むことなし。屋外はすべて樹を植る、屋内は腰羽目を張り、彫刻を加へ、窓掛を吊り、懸くるに額面を以てし、充たすに良好の家具を以てす。家を飾り、家を修むるは、最も長く傳はれる嗜好なり。こゝに彼等は、あらゆる珍らしきもの、價貴きものを收

(140)

む。而して、同一の場所に幾代となく、定住する國民的傾向は、家をして、時を経るに従ひ、世襲財産、餽物、その家族の冒險又は武勳を紀念する鹵獲等の博物館たらしむるに至れり。彼等は銀碟を好むこと甚しく、又、祖先の肖像をかくる畫廊はなくとも、その使用に係るボンズ鉢、羹碗の類は必ずこれを藏す。良家は數限りなき碟あり。いかに貧しき家にて、名親より贈られて、家計豊なりし時より貯へたる、若干の匙又は鍋を有せざるはなし。

英人の家族は少許の人数より成り、彼等は老いたるも若きも、さながら眼に見えざる紐にて繋がれたる如く、數呎の距離の内に回轉せり。英國は實に安樂にして修養ある都合好き状態の下に、世界第一の秀麗なる婦人を産す。而してその男子の情愛濃にして、誠實なるが如く、女子は彼等を鼓吹し、瀟清するもの。凡そ最も精緻にして輕浮に流れず、生れながらの性情の最も穩固にして根柢あるもの、兩性相互の求愛と應酬とに過ぐるはあらず。一五九六年の歌にいふ『英人の妻は

みな天の恵と考へらる』と。沙翁の戯曲『シムベリン』に現はれたるイモーゲン
の情感は、英國婦人の天品を寫したるものにして、同じくブルータスのポーシヤ、
ケート・パーシイ、及びデスデモナも然りとす。リュウシイ・ハッティンソン夫人或
はラッセル夫人の高潔なる情熱、又は、ペビスの『日記』を通じて認めらるゝ英人
の妻の聖なる習しには、小説と雖も及ばざるべし。サー・サミュエル・ロミリーは、
その妻の死に堪ふること能はざりき。何れの階級も、その氣高く優しき實例を有
す。

家居を楽しむは、是れ英國民をして、廣く、高く、其枝葉を張らしむる直根なり。
彼等が、貿易を營み、主權を握る所以の動機は、家庭の獨立と私事とを擁護せん
と欲するに外ならず。この家族的關係に萬事を凝注する點よりも、更に明に彼等の
特色を示すはなし。かゝる家庭性は法廷乃至軍中にも搬入せらる。ウエリントン
は印度、西班牙、及び我麾下の軍隊を管理し、忠實なる家庭の人の態度を以て戰

(141)

闘に従ひ、我私債を償ひしが、尙ほ公の負債の爲めに、西班牙駐箭軍司令官として、尙一步も門外に出づること能はざりき。勿論、この我家又は教會を過重する趣味にも、その溺れて愚に陥れる一面あり。コベット氏は、一八一〇年に宰相たりしパーシヴァルの非常に高名なりし理由を擧げて、そは彼が日曜毎に大なる八ツ折判金鍍の祈禱書を片手に抱へ、他方の手にその妻を縋らしめ、その後多勢の子を率ゐて寺参りをなし、に在りと言へり。

彼等はその古き風俗、裝束、行列、その假髮、權標、笏、冠を保存す。中古時代は今尙ほ倫敦の市中に潜めり。浸禮勳爵士は迫害せらるゝ貴婦人を保護せんことを誓約し、金杖奉持者は事ある毎に現はれ、十一世紀の儀式は、今の女王の即位式にも繰反されき。一種の財産世襲は、彼等に取つて自然的なり。官職、田庄、商業、乃至傳説はみな斯くして彼等に傳はれり。彼等の特許權は百年、千年を経て變せず。奉公と組合とは生涯を以て期限となし、或はその子孫に及ぶ。

エルドン卿いはく『ホールドシップは八十二年の間余の家に仕へて、余の事務も書籍も盡くこれを知れり』と。慣習の古きものは、それ丈けにて、充分の權利を有す。ウアーツウアースはウエストモアランドの小民の事を述べて曰く、『これ等貧しき山の子の多くは、わが耕す土地は五百年前より、同姓同種の人間によつて所有せらるとの自覺を有す』と。國立造船所の船大工、王宮の園丁、門衛等は、父子相傳へて、百年以上、その地位に在り。

英人の勢力は、また、その變化を好まざる性質に基因す。彼等はその理性を活動に現すを難んじ、いかなる場合に於ても、先づ記憶を使用す。既に從來の弊害を除きて、新しき實行方法を定むるや否や、彼等は急ぎてこれを最後のものとなし、決してこの上の改革を聞くを欲せず。

英人は各自に一個天成の衡平裁判官たり。彼等の本能は先例を搜るに在り。彼等がその法律に關する最愛の格言にいふ『人間の記憶せる限り他に反對を見ざる

(144)

慣習』と。男爵階級は曰ふ『變化を欲せず』と。倫敦兒は何等かの實行に就いて、その理由を訊ねらるゝ毎に、『君よそは常に斯くの如きのみ』と言つて、その好奇心を淹殺す。彼等は新設を厭ふ。ペーコンは彼等に告げて『時は正しき改革者なり』と。曰ひ、チャタムは『孚信は生長の遅き木なり』といひ、カンニングは『時と共に進め』と曰ひ、ウエリントンウエリントンは『習慣は天性に十倍す』といへり。英國の政治家は皆風習の潮の抵抗すべからざるを學び、數多の好語を作りて、この認識の緩漫と、舊習の墨守とを掩ひ去りき。

貝殼かひがらは以て英國の頂飾となすべし。是れ、その管に波濤の上に築かれたる勢力を代表するのみならず、その人民の極めて硬く造られたるを形容すればなり。英人は寶貝又は悪鬼貝の如く造上げられたり。一種の液汁は、幼芽と脊骨との形くられたる後、或はこれと同時に、内部より滲出しみだで、その表面はすべて瑛瑯を以て掩はれき。作法を守る事は、清潔なる襯衣と同じく、必要にして缺くべからず。

いかなる價值を身に具ふるも、作法の缺失は償ふこと能はず、却つてこれだにあれば、時に他のあらゆる物に代ふるを得。『その趣味は卑し』とは、英人の口にする語の中にて、最も怖るべきものなりとす。されどかゝる漆塗は彼等に向つて高價をもとむ。彼等は、一種の散文的調子を有し、その木強石頑は、あらゆる他の國民に勝る。彼等の聲の驕泰にして皮屑くわいせつなるものも、一種凶鐘の響を含むが如し、曰く『一切の希望を見棄てよ』と。常性は、この作法の大盤石を以て圍まれ、固められ、堅牢無比に造上げらる。されば英人の流行を趨ふものは、譬へば彼金文字入りの革表紙かばざしにて装釘し、厚き壓搾紙に、多くの精巧なる版畫を刷りたる、紀念的出版物と異ならず。これらの出版物は、貴婦人と貴公子との玩要にこそ適すれ、中に何等の讀むべきものなく、若くは記憶に値するものを含まず。

峻酷なる禮儀は、宮廷と茅屋とを等しく支配せり。ピアノ演奏家タールベルヒは、一夕、ウインヅルに於て、ある私の宴會に招かれ、皇后の前にて、演奏を爲

(145)

(146)

し、に、皇后はこれに合せて歌を唱ひたり。このことは忽ち風聞となれり。而して、全英國は、海の涯はてより涯まで、戰慄したり。この不謹慎は以後再び繰返されざりき。冷にして忍べる態度は、一般社會を支配す。熱情は、オペラに向つてより許されず。彼等はすべて目立しき物を避く。彼等は、室内に於て、何等の注意を惹起せざる如き調子の聲を要求す。サー・ヒリップ・シドニイは英國守護神の一人なり。彼に就いては、ウオトン曰く、『彼の機智は適宜ほどよくといふ事の標準なりき』と。

假偽と浮誇とは、絶對的に嫌惡せらる。彼等は服裝に於て、態度に於て、これと反對なる極端に低き調子を守れり。彼等は假偽を避けて、直に物の心髓こころを擧ぐ。彼等は無意味と、殉情性と、仰々いひおこほしすき意表いひおこほしとを厭ふ。彼等は洗磨せられたる直白を使用す。彼等の中の虚飾家なるブルムメルといへども、尙その服裝の極めて簡素なるを以て知られたりき。彼等は、公務においては、毫も舞臺的の行動なきを以て、自ら貴び、私事に於ては、簡短にして要領を得たるを貴ぶ。

英國の如き貴族的の國に於ては、第一主要の制度は、陪審官に依る審理にあらすして、正餐ディナーなり。未知の人を食事に招くは、その人を尊敬する所以の一法なり、——而して數百年來然りき。一五〇〇年のころ、英國に遊びたる、ヴェネチアの旅行家は曰く『また彼等は他人を招き、或は他人に招かれて會食するほど、大なる名譽を授け、或は與へらるゝ事なしと思へり。従つて、彼等は四五金を費して一人の客を饗應するも、その人の窮苦を見て、これに一錢を投ずる事を爲さず』と。正餐は、一日の終まで控ひかへらる。家族團樂の時間が、倫敦に於ては、普通午後六時なればなり。若し、招待の客あるときは、これよりも一二時間を遅るゝものとする。正餐に列するには、わが家におけると、他に招かれたるとを問はず、何人もその衣服を改めざるべからず。客は招待狀に記されたる時間の三十分以内には必らず到着すべく、死亡若くは負傷の爲めに脚を失ふ外は、いかなる理由ある

(147)

(148)

も、これを破るを得ず。わが太平洋岸の都會に生じたる正餐の儀式は、即ち精密にこれを摸したるもの。着席後、一二時間にして、婦人先づ食卓を去り、紳士は尙ほ一時間長く居残りて、酒を飲みつゝ語り、次ぎに客間に退きて、婦人と合し、此處にて咖啡を啜るべし。正餐は食卓談話の才を養ひ、これをして非常に巧妙ならしむ。その話説の佳なる、人をして斯くも愉快なる調子を帯ぶるまでには、必らず前に屢語られたるべしと、信せしむるに足るものあり。これに入り來るものには、曰く各種の巧なる新計畫、曰く通俗科學の斷片、曰く實用上の發明、曰く種々雜多の談話、曰く政治、文學、又は個人に關する消息、乃至、鐵道、馬、金剛石、農業、園藝、養魚、酒。

英人の話説、滑稽問答、及び記錄に残れる、其才人の食卓談話は、佛國における最上のものに譲らず。わが米人も好箇の博識家たり。されど、その談話はかくの如く善美の域に達せず。蓋し、倫敦に集れる各國民の種類と、非常に懸隔ある境

遇の對照は、譬へば丘坡起伏せる土地の美しき風景を成すが如く、その社會をして趣味多からしむるに反し、米國の萬人平等主義は、大平原の如き馴伏を生ずるに至り、且つ、英國において毎夕行はるゝ正餐の慣習は、すべての善きものを都合よく産出せしめ、貯藏せしむる傾向あればなり。多大の磨滅は總ての言葉を彈丸となす。加之倫敦に於て、時々遭遇する文雅の君子には、一切の事を知り、一切の事を試み、一切の事を爲すに足り、文學、科學以上に超越せるものあり。何事か、彼等は、その欲するがまゝに、成すを得ざらん。

第七章 眞理

(149)

チユートン民族は、その感情國民的に簡朴にして、この點、ラテン民族と相對映す。獨逸の名は、著しく眞摯、誠實の意味を含めり。その藝術も、これを顯證す。古代の彫刻、又は經卷の挿畫に現れたる僧俗の顔も、熱烈なる信仰を宿せり。この

(150)

遺傳的硬正に加ふるに、商業より生じたる時間の嚴密と、精確なる執務の風を以てせよ。輒ち英人の眞實ならびに信用を見るべし。政府は固くその契約を履行し、人民亦これを瞞着するを知らず。特權なる物の行はれたる昔時に在つても、苟も約束の破らるゝ事あれば、人民は、これを堪ふべからざる弊害として憤りき。而して、今日に至つては、政府の政治的信念の變轉頼み難きものあるか、或は財政の事に關して、拒絶乃至放辟あるか、直に全國民を驅つて審理、改革の委員たらしむ。私人相互の間にも、その約束は嚴重に守られ、如何に輕微の應諾も、決してこれを懈ること無し。駟言一度び書牒に痕を留むるや、その拭ひ去る能はざる事「陸地測量簿」の然るが如し。

英人の實行上の氣力は、その國民的忠厚に因る。誠悃は其本能に由來し、肉體の優秀を標示す。自然は、ある種の動物に、狡智を賦與し、以て、これより優ひたる體力の報償と爲しき。されど、そは他の總ての動物の憎惡を招き、彼等を變

(151)

じて、宛然、公共的害惡を排撃するところの復讐者たらしめたり。體力の餘裕ある、高等生物に至つては、眞理に對して忠實なり。何也、眞理は社會的状態の基礎なればなり。人類と瞬間の休戦をもなさざる、かの野獸と雖も、彼等相互には決して信を破る事なし。世に曰ふ、狼は獲物を埋匿し、わが同類をその場所に伴ひて、これを掘るに及び、若し發見せざる時は、即座に容赦なく寸裂せらるゝを常とすと。英人の質直は、これよりも一層健なる肉體より來るが如く、彼等はかゝる質直に堪え得るの觀あり。彼等は露骨にその思ふ所を語り、猥りに約束を爲さず、他人に向つて、公明正大の處置を要請す。彼等は假面を被れる人間と交渉するを欲せず。彼等は眞理を聞かんと欲す。一條の直線を引け、而して如何なる人にも、場所にも、その衝くが儘に、これを衝かしめよ。アルフレッド大王は、英國民の欽仰して、その民族の典型となす所、當時其友アッサーに「眞理を語るの人」と稱せられき。モンマスのジョフリーは、アッサー王の伯父オーレ

(152)

リユースに就いて、『就中、彼は虚言を憎みき』と言へり。北人ガットームはオラフ王に謂つていはく『王言を果すは王業なり』と。英國諸舊家の家訓は、皆記憶に値する格言なり、例へば、フェアアックス家の『言へ、行へ』の如き、フイーンズ家の『言へ、而して押印せよ』の如き、デウイア家の『實にこれより真なるもの無し』の如し。

わが言の王となるは、英人の誇なり。彼等は物の假肖を剝ぐに際して曰ふ、『その英國的は斯くの如し』と、而して、他人に虚偽を告ぐるを極度の侮辱と爲す。最下級の人民の用語にも、『名譽の光れる』と云ひ、又、卑しき套語に『彼の言葉は、その縲紲の如し』と云へるあり。英人は不得要領と、多義の語とを厭ひ、爲めに詐術を施すべき餘地ある問題は、輿論に於て、大に損害を受く。かの佛國流の教育を受けたる、チェスターフィールド卿の如きも、紳士の定義を下すに方つては、その特色を成せるものを「真理」なりと云ひ、而してこの語は、卿の口にしたる言葉

の中にて、最も快き同意を、英國民より得たり。ウエリントン公は、佛の將軍ケラーマンに向つて、その英國士官の證言に信頼して可なるを述べしが、公は即ちこれを言ふべき最大の權利を有する人なりき。英人は、その總ての階級を通じて、この點に於て自ら重んじ、以て佛國人民と異なる所以のものとなす。蓋し、佛人は一般の信する所に依れば、眞と云はんより、寧ろ有禮なればなり。英人は控目に語り、最大格の形容を避け、讚辭を省き、而して、佛語を用ゐる時は、虚言を告ぐるを免れずと稱す。

英人は富、勢力、優遇に就いて、その實を愛し、容易に外觀を整ふる事を學ばず、世界をその有りの儘に受領す。彼等は藻飾を好まず、苟もこれを帯ぶれば、寶玉に限る。彼等は、欣然として、老フラーの書に出でたる、エリザベス朝の貴婦人の逸話を讀む。彼女は『模造の寶石或は贗眞珠の耳環を帯びたる者を見る如く、大に忍んで虚言をゆるしたり』と。彼等は土地を熱愛し、如何なる財産よ

(153)

(154)

りも地所を好む。而して、こはチュートン民族の特性と稱せらる。彼等はその家屋を石造となす。従つて、公私の建築、何れも重々しく、且つ久しきに耐ふ。その貴族の邸宅乃至官衙を、米國の諸建築と比較し、米人の一弗を費す所に、英人は一磅を投ずとは、普通に説かるゝ所なり。地味にして高價なる衣服、裝飾、家屋の内外、及び附屬品一切の仕上げ、これ即ち英人の眞實を表明するもの。

彼等は互に信賴す、——英人は英人を信ず。佛人もこの誠實の優越を感ず。英人は、他の嘆賞を博せんが爲めに畏を設くる事なく、唯老實に自己の務を恪守す。佛人は倥侗なり。ステエユ夫人曰く、英人は主として、その誠直と成功とを連結する方法を知れる點を以て、奈翁を激怒せしめたりと。されど、彼女も、英人が如何に廣汎なる應用を、この語に與ふべきを悟らざりき。ウエリントンは、自家の正直より、奈翁の事業の破滅すべきを發見せり。彼は、佛蘭西帝國が實體無く、僅に戰爭に依つて生存せるを認むるや否や、直にその凶運を卜知せり。惟らく、

戰爭にして、若しその結果、新なる貿易、及び従前よりも一層良好なる農工業を促進する事なく、たゞ勝敗、火技、非常の光景を現すに過ぎずんば、如何に繁榮なる國家も、これを持続するに堪えず。然るを況んや、徴兵を以て、國民の十の一を奪ひ、且つ財囊空乏せる事佛國の如きに於ておやと。乃ち彼は年久しくリスボンに留まりて、軍務に勞苦し、終にこの根據地より、その雄大なる軍隊を、ウオータールーに進めしが、これ實に深くその國人を信じ、全歐洲の大言壯語よりも、固く自國の三段論法を信じたるが爲めに外ならず。

余は英國より歸りし後、モントリールに於て、偶、聖ジョージ祭に招待せられ、この時、祭司がその同胞英人に對する式辭として、『人々は何處に於て英人と逢ふも、その眞理を語る所の人間なるを信ず』と述ぶるを聞けり。果して斯くの如く、全世界に亘つて、苟も二三の英人を見る所、彼等は、この四月二十三日を以て、一堂に會し、以て互に愈、その誠實と云へる國民性を磨くとすれば、誰か、この祭

(155)

(156)

を効果なきものと考へ得べき。

英人が憶而なく眞理を語り、時に生命の危険をも顧みざる勇氣には、何れの國民も及ぶ能はず。往日天長節には、全國の僧正各、王に黄金一包を献ずるを常とす。此日、僧正ラティマーは、ヘンリー八世に奉るに拉丁譯の聖書を以てし、特にその中『娼婦を購ふもの、及び姦淫者は、神に審判かるべし』と云へる一節に横線を引けり。されど、英人の互に剛直を敬するや、王も敢てこれを問はざりしと曰ふ。彼等はその所信を固持し、容易に時勢に應じてこれを枉ぐる事を肯んせず。彼等は舳の重きが爲めに、急に廻轉する能はざる船の如く、得意も、失意も、その行動の習慣的見解を改めしむべき力を有せず。一八四八年二月、余の倫敦に滯留せし間、ギゾー・巴黍より窺れ來りき。多数の友人は、彼を訪問せり。彼は早くも「アセネーム」倶楽部の名譽會員に推薦せられき。されど、投票の結果、彼は黒票を以て排斥せられたり。彼等は、元よりギゾーの聲名を知れり。唯、英人は無定

性にあらず。彼等は、年久しく新聞を讀みて、今や、ギゾーを厭ひ憎むの念固し。假令、その地位一變して、赫々たる亡命者となり、且自國に客となるも、そは徒らに米人を熱狂せしむべくして、英人を動すに足らず。

彼等は公人に向つて、終始一貫の操守と、徹底せる確信と眞實とを要求す。愛耳蘭議員の低評は、その品性の不足に因る。英人は曰ふ『彼等を見よ、その一百二十名は、總て羊の如く賛成し、一事だに建議せず、而して、四名を除く外は、皆所得税に投票す』と、——この所得税は、獨り英人にのみ課して、愛耳蘭人の財産には、之を免除したる、政府の不條理なる讓歩を指す。

彼等は、議會の内外に散在せる、多くの投機者を見て戰慄す。今日英人を支配せる激情は、騙詐に對しての恐怖なり。彼等は、又、これに反する比例を以て、誠實、豪頑、及び自説を固執する態度を重んず。彼等はわが目的に拘束せられたる人間を好む。彼等は輕佻なりとて、佛人を忌み、無見識なりとて、愛耳蘭人を

(157)

(158)

忌み、教授なりとて、獨人を忌む。一八四八年の二月、彼等は曰く「見よ、佛王及びその臣下は、一人の發砲者だに無きが爲めに敗れたり。國家の心髓の全然腐蝕せる事、斯くの如し」と。

彼等は、投機者と云へる、何時も乍らの理由を以て、毎日の如く、その政治家を攻撃す。彼等は、毅然としてわが權利を擁護し、金錢又は昇進の爲めに讓歩することを肯んせざる硬直を愛す。大狀師の法服を授けられたる者も、その後進狀師にして、己より一日早くこれを受けし者あれば、これを拒絶す。コリングウッド卿は、一七九七年二月十四日の勝戦に依つて、勳章を授けられしも、若し一七九四年六月一日の勝戦に、勳章を與へられざるならば、これをも受くるを欲せずと主張し、これが爲めに久しく控へられたる勳章を受けたり。カースレイは曾てウェリントン卿に向つて、世評惡きシントラ事件の解決を見る迄、その朝拜を控へん事を勸むるや、卿答へて曰く「足下は余に朝拜の理由を與へたり。余はこの回朝

拜すべし。然らずんば今後決して朝拜せざるべし」と。曾て牛津オックスフォードに蜂起したる急進黨の一揆、王黨のエルドン卿の過ぐるを見て叫んで曰く「彼處に老エルドンあり。彼の爲めに喝采せよ、彼は未だ味方を賣らず」と。英人の品性は、阿世隨時の徒を愛する能はず、これを呼ぶに、議會慣用の日和見トリヴィスと云へる渾名を以てす。

今これら等の稀なる美德を回顧するに方り、英國が、頃日、佛帝ルイ・ナポレオンに、敬意を表したる事實あるを見るは、不幸と云ふべし。されど、倫敦の貴族平民が、一齊に、その頭を成功したる盜賊の前に屈するに拘らず、余の識れる程の英人は、一人としてこれに同意せず。然りと雖も、——國家的必要の大なる連鎖の中途に於ては、如何に厭ふべきも、かゝる一步を避くるの術あらざるべきか？——政府は、常に、後に至つて、不誠實なる手段を用ふるは、個人に對しても、國家に對しても、等しく有害なる事を悟らざるべからず。

英人は一種緩漫の氣質を有し、他國人の如く、快敏、輕捷なる能はず、爲めに「英人の機智は後より出づ」との諺を聞くに至れり。この遲鈍は、彼等をしてその郷土に戀着せしめ、従つて、如何なる國に在つても、常に本國の風習を守らしむ。

(159)

(160)

彼等は、エトナ火山にのぼるも、その渴沸しを頂上まで運ぶべし。昔「英國物語」(一五〇〇年)を著し、伊太利人は曰へり「余は最も確實なる話として、これを聞く、彼等は慘怛たる交戦の間にも、良好の食事を求め、その他種々の愉快を盡して、何時我身に落ち来るやも知れざる危害を思ふ事なし」と。是に依つて之を觀るに、彼等の眼球は、大なる隧道の奥に着けるものゝ如し。従つて、彼等は、わが知れる一個の事實を斷定するに、これ以外の事實は、世界に存在せずとの無上の信念を以てす。而して、金貨に對する、彼等の信仰は、最も完全なるが故に、如何なる場合にも、金錢上の議論を最後の決定として應用す。「降仙術」が、英國内に聞え初めたる頃、一人あり、百磅の金を函に封じてダブリン銀行に預け、次に新聞廣告を以て、夢中遊行者、催眠術者等に告げて、何人を問はず、この手形の番號を云當てたる者は、件の金子を得べしと云へり。かくて、この金を放置するもの、六ヶ月の久しきに亘り、その間、新聞紙は、彼の請求に依つて、時々、

熟練家の注意を促したるも、終に、一人としてこれを告ぐる能はざるや、彼曰く、「さらば、余をして今後この證明濟の虚偽の爲めに煩はざらしめよ」と。傳ふらく、サー・ジョン、曾て或事件に關して。辯護士の辯論を聞き、心に決する所あり。然るに、次ぎに他方の辯護士も陳述を始めんとしたれば、彼は周章狼狽措く所を知らず、「神よ、我を救ひ給へ！我は決して再び論證を聞かじ」と叫びたりと。かゝる英人の痴呆は、その例限りなく多く、何れも大陸人士の笑柄たり。余も一人の甚だ尊敬すべき紳士を識れり、——デルビー市の市長なりしと記憶す。彼、一日、オペラの『マリブラン』を觀たり。その一場にて、女主人公は朽廢せる橋の上を突進せんとす。彼は忽ち起立し、穩なる中にも、力を籠めたる聲にて、觀客並びに演者に向つて、彼の判斷によれば、この橋は安全ならずとて、その注意を喚びたりと。かゝる英人の痴呆は、佛人の機智及び手練と相對照す。佛人は、英人に比し、歐洲に於て、迥に大なる勢を有すと、普通に稱せらる。英人の勢力は、富と

(161)

權柄の蠻方に本き、佛人の勢力は、和親と才能より來る。伊太利人は詭巧なり。西班牙人は陰險なり。拷問も、以て埃及人より、その秘密の自白を振ちとるに足らずと云はる。かゝる特質は、一も英人に無し。その短氣と自負心とは、一切の事を暴露す。デフォールは、能くその國人を知れるもの、彼等に就いて、次の如く云へり、

「隠謀を行ふに、彼等の能力は弱し、

そは、概して、知れる所を盡く語り、

且つ方略なき弱味の爲めばかりに、

我と我商量にて廻ばなり、

學者は曰へり、この故に、英人の謀反は

決して成功するなしと。

そは、彼等、聊も腹藏なくして、

自他の秘密を告ぐればなり。」

第八章 性格

英人は世に知られたる一肚氣的サツツキなり。余は彼等が北方の隣人よりも、一層愁顔をなせるを知らず。唱歌と舞蹈とを事とする國民に比して、悲氣かなしに見ゆるのみ。されど、これよりも一層悲しきにあらず、その慰樂を専ら家庭に向つて求むるが故に、遲緩にして沈着なるのみ。彼等は、生活の慰樂なき所には、従つて、言語又は思想に、活氣も修飾もなしと信じ、又快活の心は終迄往くも、悲しき心は一哩マイルにして疲るといへる事を信ず。陰鬱を以て英人の特色としたるは、英國に遊びたる佛人なり。彼等は、フロアッサー、ヴォルテア、ル・サージ、ミラボーより、降つて今日の敏活なる文藝記者に至るまで、皆その機才を盡して、英人の嚴格を嘲弄チャウリヤウせり。佛人はいふ、活氣ある會話は、絶えて彼等の島に知られず。英人は反省を止めて休息することを知らず。若し休息すれば、反省のおひだにするのみ。

(164)

彼は逸樂を欲するときに、仕事を爲す。彼の歡喜は熱病の發作の如し。宗教、演劇、自國の書籍を読む事、これらは總て彼の憂鬱なる天性を助長す。警察は公共的娛樂に干涉せず。警察は惟へうく、この慰め易からざる國民の、快樂、及び稀有の快活を尊重すべき義務ありと。而して、英人の世に聞えたる勇氣は全くその人生に對する避嫌に歸すべきものなり。

余は英人の嚴肅なる舉動と、その寡言とが、この評判を招たる原因ならんと察す。米人と比較すれば、余は、彼等を舒暢にして満足せるものと考ふ。米國の青年は。英國の青年よりも、迥に憂鬱に陥りやすし。英人は溫和の容貌と、鈴の如き、愉快なる聲とを有す。彼等は鷹揚にして、南方國民の如く、容易に悦ぶことなくその間に入れば、宛も小兒の間に交れる大人の觀をなし、些々たる歡娛を一排して、或は戰爭を、或は商業を、或は工事を、或は科學を要求す。彼等は自尊の念強く、隱密を愛し、たとひ儻散を欲することあるも、打開きたる場所を避く。

彼等は悲しげに嬉戯す。フロアッサー曰く『彼等は其國の風習に従つて悲しげに嬉戯す』と。余は又想像す、英人の如く間隔の壁を厚くし、或は庭園の牆を高くする國民は、他にあらざるべしと。肉も酒も彼等に何等の影響を與へず。彼等は宴會の終りし時も、その初と同じく、冷靜、沈着、態度苟もみだれず。

彼等は、五六百年來、寡言を以て稱せらる。演説の拙きを掩はざる一種の矜りは、下院に著しく現れ、彼等は好んでその舌に依つて生きざるを示すが如く、或は紳士の品格をだに保たば、充分に語れりと思惟するが如し。衆人混合の席に於ては彼等は皆その口を鍼す。ヨーク州シタの一工場主が、余に告げて曰ひしには、倫敦よりリーツまで、汽車の一等に乗りて旅行するに際し、始終同じ人と車室を共にしながら、互に一語をも交さざる事は敢て珍らしとせずと。倶樂部は社交の習慣を養はん爲めに設立せられき。されど、二人以上の會食を見るは稀有にして、大抵は單獨に食事を認む。果して然りとせば、かの莊重なるスエーデンボルグを

(165)

(166)

して、獨り英人を天の一方に拘囚せしめたるもの、單に彼の戲謔の一片に過ぎざるべきか、或は、彼の容赦なき論理たるに過ぎざるべきか。

彼等は、一方に於ては、苦澁、拂戾、頑固、他方においては柔和、温厚、聰明と、互に相反せる語を以て形容せらる。眞理は、彼等が多種多様の性格を含む所に存す。商業は無数の異なる階級を海外に送出しき。膽汁質のウェールズ人、熱烈の蘇格蘭人、東西印度に住む悻性漢等を見れば、教育あり、品位ある家庭の人の完美なる行動と、相距る甚だ遠し。粗野木強の農夫も亦同じからず。狹量にして暴虐の生活を送れる郷紳も同じからず。英國に於ては、何れの旅籠屋にも商業室なるものありて、こゝにて、かの見本を携へ、製造家の爲めに、その注文を求め歩く旅商人を饗應するを常とす。外人は彼等と途上に逢ひ、到る處の客舎にて逢ふが故に、この階級が、獨り彼等に對して英人を代表するに至り易きは自然なり。紳士は旅宿を避け、若しこれに泊れば、各自その室に占據して、猥りに出で

す。

されど、これらの階級こそ、固有の英國民族にして、技術と教育とが、未だ此民族を教化せざる以前の國民性を、明々地に示すものなり。彼等は強き愛好者なり、強き嫌惡者なり、遅けれども頑固なる嘆美者なり。而して何事に就いても、その感情極端に趨り、恰もわが好める深き眠より、いまだ全く醒めざる人の如し。彼等の習慣と本能とは自然の骨髓に剖入す。彼等は地のものにして、土製的なり。又海のものにして、海の生物のごとく、偏にそが彼等に與ふる所のものゝ爲めに、これに戀着し、決してわが感情よりする事なし。彼等は粗大の力、猛烈の運動、屠獸者の食物、及び熟睡を以て、其生活を充たし、此動物的生存の上にも、時に何等かの詩的能惟、又は生活の方針に關する暗示の閃き落つることあれば、宛も何者か、臍帶の邊を冥索し、わが補養を止めんとするかの如くに訝るべし。彼等は、人若し充分の食慾を以て健啖せずんば、其判斷力を疑ひ、特に貞潔ならば、

(167)

その頭を振るべし。途上任意に彼等を點檢せよ、その通常なるものには、苦々しき冷淡と、時には刻薄と痼癖とを見、稍、精神の強盛なるものには、無限の戦の準備を見ん。その挑めるは、

「時と怨恨とが齎らして、暴れ狂ふノーサムバーランドに、
眉を盛めんとする最も艱難の時」

彼等はわが意見の、剛愎なる信仰者、保護者にして、その幻想、或は悪性を固持するも亦同じく固し。ヘゼキア・ウッドワードは神の祈禱書に反對せる書を著したり。吾人は「愛憐の解剖」の著者バートンは、星によつてわが死を預言せしより、その占星術を空しくせざらんが爲め、自ら縊れたりと信するを得。

彼等の風采は、打克つべからざる精強を示す。彼等は極端に逃走を難んじ、死を決して勝負を争ふ。侍衛兵は優しく育ちたる上流浮華の子弟より成るもの、ウエリントン曰へり、『されど艶粧子も能く戦ふ』と。又ネルソンはその部下の水兵に就いて曰く『彼等は眞に彈丸を豆粒ほどに思へり』と。絶對的頑強に就いて

は、いかなる國民も、英人以上に好例を有せず。彼等は能く方形堡を襲撃し、重裝艦に闖入し、死に至るまで奮闘し、其他いかなる絶望的勤務といへども、苟も公明正大にして名譽の伴ふ限り、決してこれを辭する事なし。されど、余は思ふに、拷問を忍び、或は露帝の一言の下に、高樓より飛降る如き服従に至つては、彼等の長所にあらず。是れその肉體が完全に發育して、苦痛を感ずる事の容易なると、進歩せる理智の爲めに、その事の道理と榮譽とを看るに慣れたればなり。

彼等は、その日の生活費を稼ぐには、充分以上の肉體的勢力を有す。これが過剰は、すなはち守節の勇氣、詩歌の天才、機器の發明、商業上の企圖、宏大の富、裝嚴の儀式、乃至青年に於ける焦燥と計畫を成すものなり。青年の粗暴なる元氣は、不良の習性を醸す原因たり。彼等は、火酒を飲む事、水の如く、その餘賚の體力を、騎馬、狩獵、游泳、擊劍の類に盡す能はざる爲め、凄じき猛威を以て、無謀の戯樂に趨る。彼等はその浮燥の性質を以て、隈より隈まで、地上の秘密を

(170)

穿鑿し、何等の虚偽にも反對せざるなく、何等の假托をも吟味せざるなし。彼等は魔酔藥ハシツシユを噛み、毒を塗れると首を以て、わが肉を劈き、毒樹ウツキの枝にハムモツクを釣る。ネーブルスにては、彼等は聖ジャヌアリーヌの血を蒸溜器ラビヒキにかけたり。彼等は「瞬く聖母」の像の頭に穴を穿ちて、その何故に瞬またくかを見たり。彼等は英國流の呎尺フイトヤシを以て、あらゆる異端究明所、回々教の神殿、猶太教寺院の内陣を測り、賄賂と威嚇を以て婆羅門教徒の秘傳を強奪し、これを翻譯して博言學者ベントリイに送り、常に他の恐怖を以てわが威力を測れり。これ等の旅行家は、すべての階級に亘り、その最上より、その最劣に至るまでを含む。されど、其中殊に行動の亂暴なるものが、獨り注目を惹き、記憶せらるゝに至るは、自然の道理なり。貧富を論せず、卑俗なる人民の有する索遜サクソン的憂鬱は、さながら不快の氣分の逃出せるものゝ如く、妨害を受くるや、倏ち激して皮肉と嘲罵とに變ず。無数の粗暴なる英國青年は、各、その國民に固有なる驕慢と魯莽とを備へ、他のすべ

ての國民を侮蔑すると共に、この激昂し易き特色を發揮して、遂に英人の旅行家と云へば、即ち不愉快にして無禮なる人間を意味せしむるに至りき。二百年前、オックスフォードの一學者に就いて記されたる、次の文章は、英人一般に適用するも、決して當らずと云ふべからず。曰く「彼は甚だ大膽の人にして、その同輩の前のみならず、市中の珈琲店に於ても、心に思へる事は盡くこれを口にし、同席者の何人なるかを見究めずして、その場に居合せたる人をも批評せし事珍らしからず。爲めに彼は屢々叱責せられ、又幾度か蹴飛され、毆打されんとしたり」と。

通常の英人が、動もすれば忘れがちなは、人は各、わが耳に關しての權利を有すと云へる、社會的權利を含める法案の重要な一項なり。何人も公の室に於ては、僅々數立方呎より大なる可聽範圍を侵略するを得ず。或は大聲にわが隨想乃至人物批評を述べて、同席者を煩はすを得ず。

(171)

(172)

されど、すべて國民の運命の記されたるところは、深刻なる人種の特質なり。而して、唯一種の民族が幸福なるか、或は數種の民族が幸福なるか、性情の中庸を造り出すは、海なるか、或は他の何等かの境遇なるか、この問題はいかに推論せらるも、——ここに、世界最上の人種は嚴存す、正面廣く、基礎廣く、深さと、種類と、均齊とに最も善く、人は沈毅にして謹厚、品等も多種、性情も多岐、本能は猛烈なるも、能く教化に適し、軍人の階級は、事務員と相對し、伯爵は、商人と、賢明なる少數は、愚なる多數と相對し、底知れぬ氣質は、忿怒の泉と、日光を受けざる陰鬱を隠し、總ての愉快なる義務を確守せしむる常職と人情とに従つて變化し、爲めに、いかなる暴風にも狂騒がざる大海となり、好運の此人種に向つて流るゝや、宛ら彼等が精緻にして同時に強健なる、屈伸自在の體質を有する爲に、特に能くその管掌に堪へ得るものなるが如く、又、曾てわが炎々たる氣息を以て、この島を燭したる彪大、昏憤、今、黙々として頑硬なるのみと思

(173)

へば、忽ち又猛烈にして脚聲を發する惡龍の、其凶猛を征服者に譲りたる如きものあり。彼等は美德を惡德の下に、或は惡德に類する行爲の下に匿す。荷馬車を泥濘の中より引出し、或は『十人の日傭も終ふる能はざる玉蜀黍を連枷す』ものは、又かの不幸の時に世に出でたる毛深きスカンディナヴィアのトロール神なり。されど、彼は人に隠れて、且つ忌々しとつぶやきつゝ、かゝる仁慈の行をなす。彼はその胸に柔かなる部分をもてる野人にして、その言葉は苦き水を散する筈なれども、好んで人の危急に瀕せるものを助く。彼は否と云ひて、人の爲めに盡し、その感謝を聞けば嘔吐を催す。近きころ、一人の守錢奴ありき。その顔は異様に醜くして、笑を抜きたるポンチに類したるが、大に勉強して金を蓄へ、淋しき家に獨り黙然と住みて、決して人を響應する事なく、すべて禮容といふ物を卑しむき。されど、彼は深く繪畫の美を崇拜し、自ら品位と眞理を備へたる作物を成して、これを冷かなる同胞英人の心に注ぎ、英國美術より、その缺點と稱せられた

(174)

る意想の空乏を除き、その險惡なる風土の中に、美しき光景を看取し、その畫廓を充たすに、日影鮮かなる都會と空との種々様々なる描寫を以てし、遂に繪畫の世界に一新時期を劃するに至りしが、畫會に出品したる、彼の作が、その光彩を以て、隣りに懸けられし競争者の作を壓倒するを見たる時、窃に刷毛を取つて、わが畫を薄暗く塗りしと云ふ。

彼等はわが内心を人の眼に曝さん爲め、これを袖に着けて歩くものにあらず。彼等は冷靜と頑硬とを有し、これを擾すは、却つて彼等に對する尊重なり。アリストートル曰く『大人物は常に生れながらにして憂鬱性なり』と。好んで精神を一事に凝注し、爲めに全く他事を忘れ去る習慣は、即ち莫大の結果を齎すものなり。彼等は人に忤ふことを憚からず。彼等は答を豫想して語らず。彼等は然りと云ふものよりも、否と云ふ者を好む。彼等は各自己の意見を有し、その他人と異なるだけ、従つてこれを發言するを愈々至當の事と感ず。彼等は反對を默想しつ

つあり。この嚴重なる態度は、大なる力を有する精神と離るべからざるものとす。

英國には、佛蘭西、獨逸、伊太利、又は希臘の英雄にも勝れる英雄あり。彼は運命と闘ふべき場合となれば、一層多大の物質的所有を犠牲となし、而も一層純正なる形上の根據に於てす。彼は自ら承認して、運命と對抗し、これを物ともせず。自由の選擇と、性格上の理由より、彼は自己の死生を托すべき職分を定め、而して壯烈の最後を遂ぐ。英民族は新しき要素を人道に寄與し、最も深き根を、この世界に下せり。

彼等は、兇猛より精細なる禮文に至るまで、その品等の廣濶なる範圍を有す。品等多きが故に、彼等は、大なる回復的勢力を有す。彼等は、一の傾向を極端まで走りたる後、同じ熱度を以て、更に他の方向を試む。他の諸民族よりも一層智力に富めるが故に、彼等はこれと交るも、その國語を用ゐずして、却つて自國の語を與ふ。彼等は他の國民を扶持して、自ら扶持を受けず。彼等は、改宗せしめ

(175)